

胴部の境目に刻目列点文を全く見ないのも特徴の一つである。

第4D類 (第70図1、第71図1・3～13、第72図1～13)

A-3区出土土器で主体となるもので、良好な資料を多く見る。深鉢と浅鉢がみられ、深鉢は波状と平口縁がみられ、浅鉢は絶て平口縁である。

深鉢は、口縁を「く」字状に内折さすものの立ち上がりは短く萎縮し、端部は尖り気みとなる。長く延びる頸部は無文で外傾、外反させ、胴部は球状に丸く膨らみを持つ。文様は縄文を地文とする面に直接描かれ、縄文の燃りはRL、LR共にみるが、後者が圧倒的に多い。文様は口縁と胴上半部に持ち、口縁部では2～3条単位、胴部は6～7条単位の平行横直線文を描き、沈線間に「C」字状文を上下に配置さすもの、それを対向させ「C」文「C」文を形成さす。また穀粒状、斜行刻目文を沈線間や沈線の溝の中に連続施文する手法も多用され、本類土器の大きな特徴となっている。中には第72図(10)にみられるように胴部に1条沈線で波状文に描かれるのも特徴の一つとして上げられる。

浅鉢(第70図1、第72図1～2)「く」字状に内折さす口縁器形を呈し、その端部は尖り気みとなる。文様帯を口縁外面に持ち、4条～5条単位の平行沈線を縄文LR、RLとなる面に直接描く。第70図(1)は、5条単位の沈線で描く中央の1条を緩やかに山形に上げて、山形の頂部に「C」字状文を対向させて「C」文を形成し、その左右に穀粒状の列点刺突文を連続施文させ文様構成している。

第4E類 (第72図14～18、第73図1)

深鉢で、口縁外面と無文の頸部を挟み胴上部に縄文帯を持つタイプである。口縁部片3点、胴部片2点、口縁と胴部の明らかな資料1点である。口縁は外反するものと緩やかに内湾する2種を見る。端部は共に丸みを持ち、外面の縄文はRLである。胴部は丸く膨らみを持つもので(17)は外面に朱色が鮮明に残る。第73図(1)は口縁、胴部の明らかな資料で、最大径を口縁に持ち、傾斜の緩い波状口縁を呈している。口縁外面には1条の沈線が走り、胴部の縄文は口縁同様、RLとなっている。

第5A類 (第73図3～8)

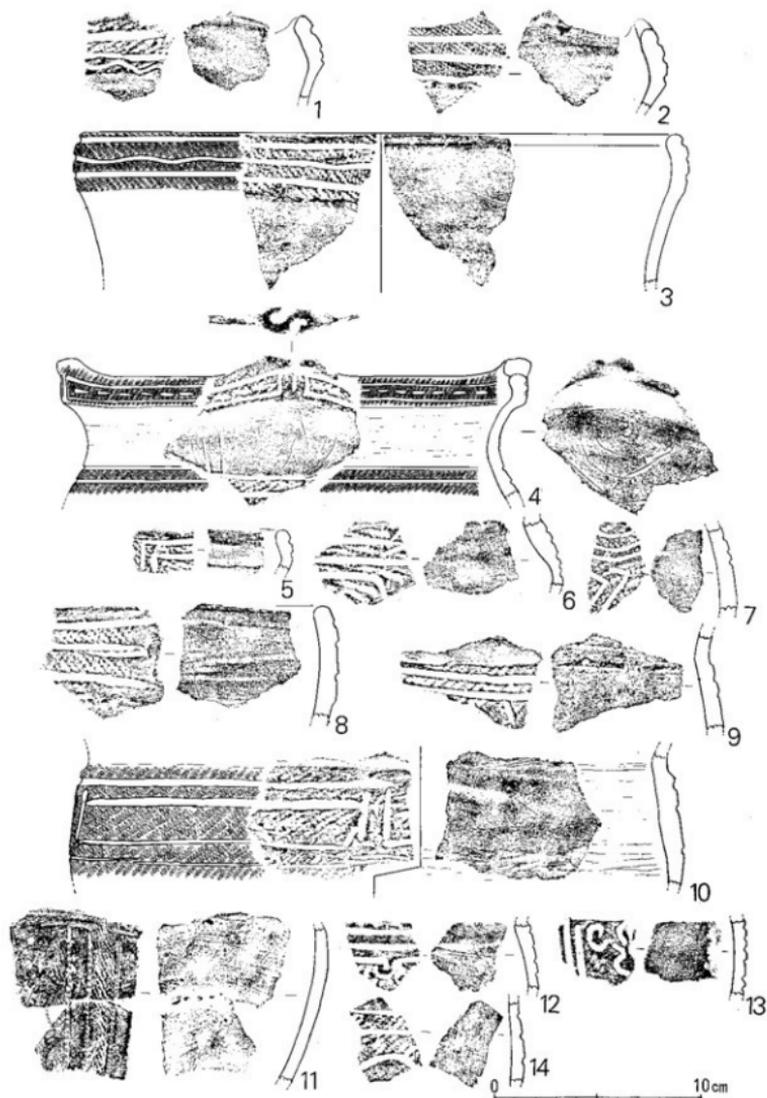
深鉢と浅鉢がみられ、後者は波状口縁となり、前者は平口縁を呈する。

深鉢(4・5・7・8)は、直線的に延びる頸部を持ち、口縁端部は丸く作られ、口唇直下の内面に1条の沈線を見る。(4・5)の胴部片は緩い膨らみを持ち、その胴上半部の外面に(4)は2条の平行沈線を、(5)は1条の凹縁文が施されている。

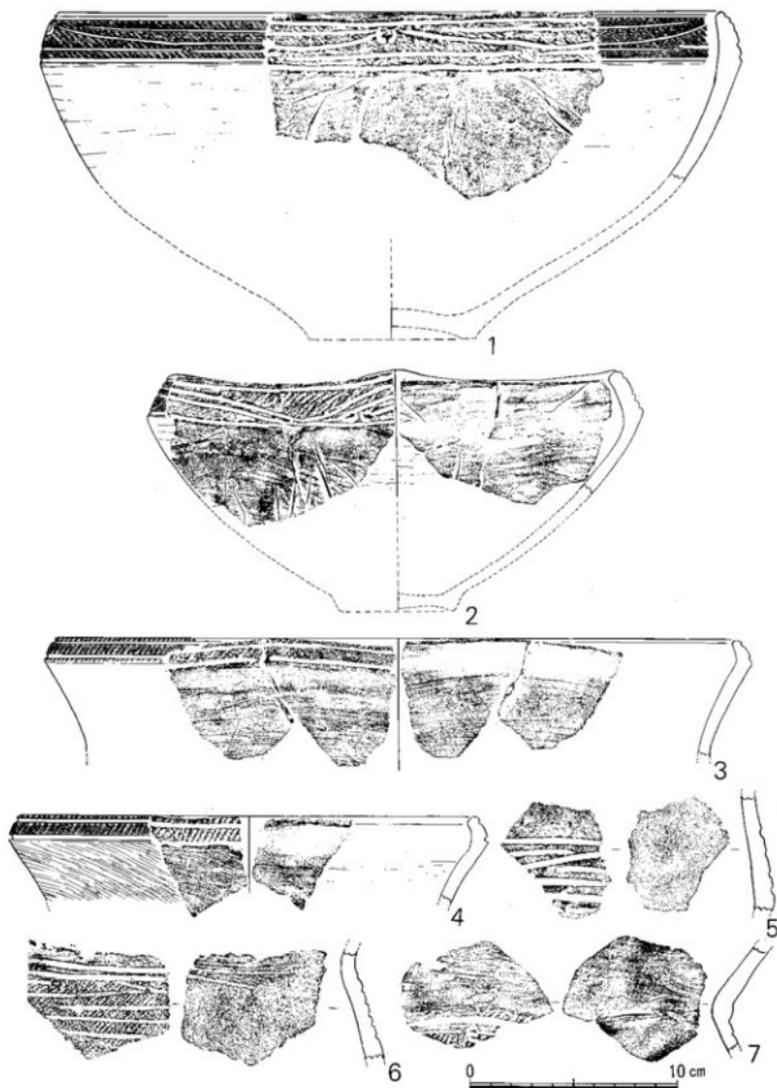
浅鉢(3・6)は、(3)が外傾する頸部を持ち、波状口縁の波頂部に「V」字状の切れ込みが施され、内面には口縁に平行する1条の沈線が走る。(6)の頸部は外反し、端部は水平にカットされ平坦面を持つ。胴部は中程で屈曲し稜がみられ、外面には筋の太い4条の平行横直線が描かれている。なお、これの口唇直下の内面に1条の沈線を見る。

第5C類 (第73図2・9・11)

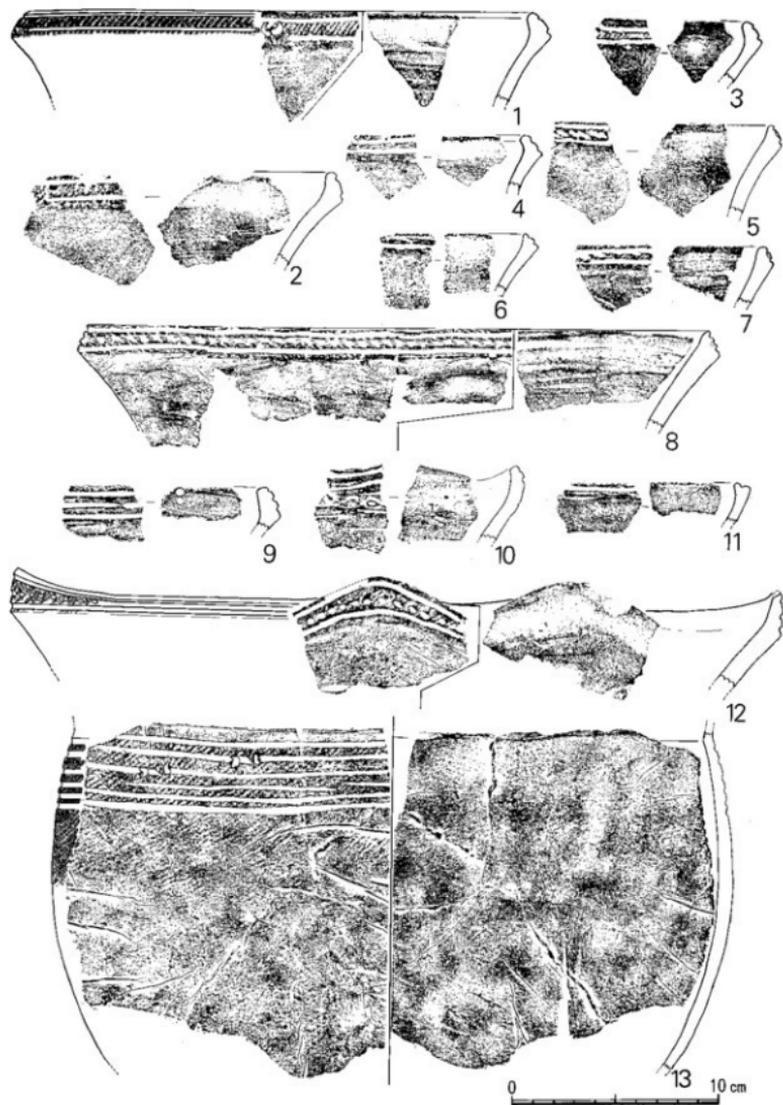
絶て平口縁を呈する深鉢である。(2)の口縁は外傾し、端部はやや肥厚し平坦気みにおさまる。くびれる頸部から球状に膨らむ胴部へと移行するが、最大径を口縁に持つ。(9)も口縁は外傾し、



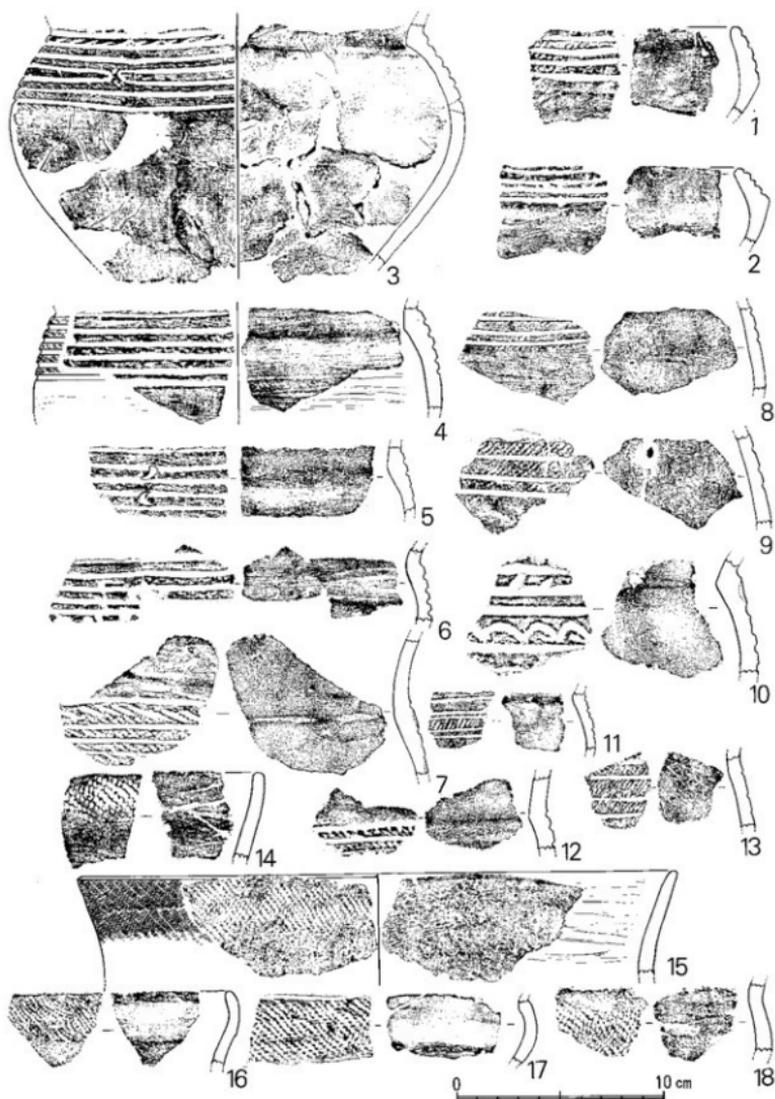
第69図 大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器



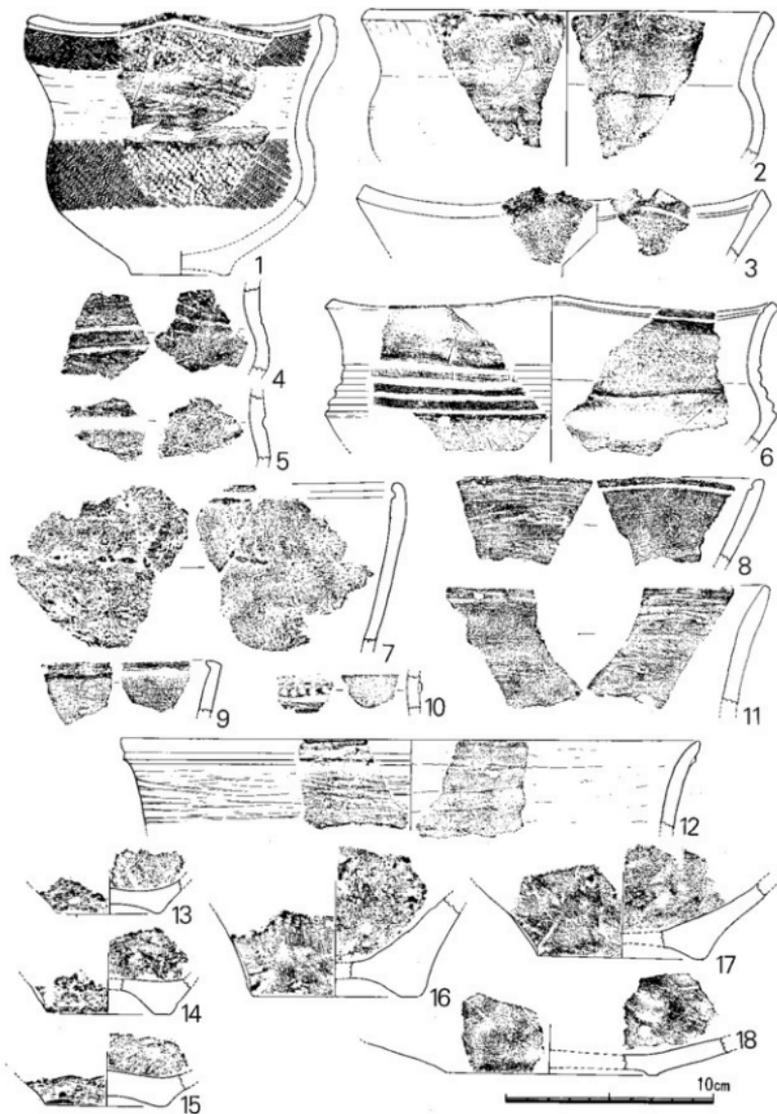
第70図 大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器



第71图 大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器



第72図 大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器



第73图 大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器

端部は平坦に調整され、その端部は内面へと張り出している。(11)の口縁は外反し、端部は尖り気みとなり幅狭い平坦面を作出する。

第6A類 (第73図12)

深鉢の口縁部片1点で、緩く外反し、端部は尖り気みとなる。口縁外面には端部からやや下がった位置に断面三角形で背の低い無刻目突帯文が貼付されている。

第6B類 (第73図10)

深鉢の胴上半部片で、外面に1条の刻目突帯が貼付されている。

底部 (第73図13~18)

高台を持つものはなく、底部外縁からそのまま上がる上げ底を呈する。それらは底径6cm前後のものから、8cm前後を測る。(8)は浅鉢の底部で、背の低い小さな高台が作出され、底径10cmを測る。

石器 (第74図~第79図)

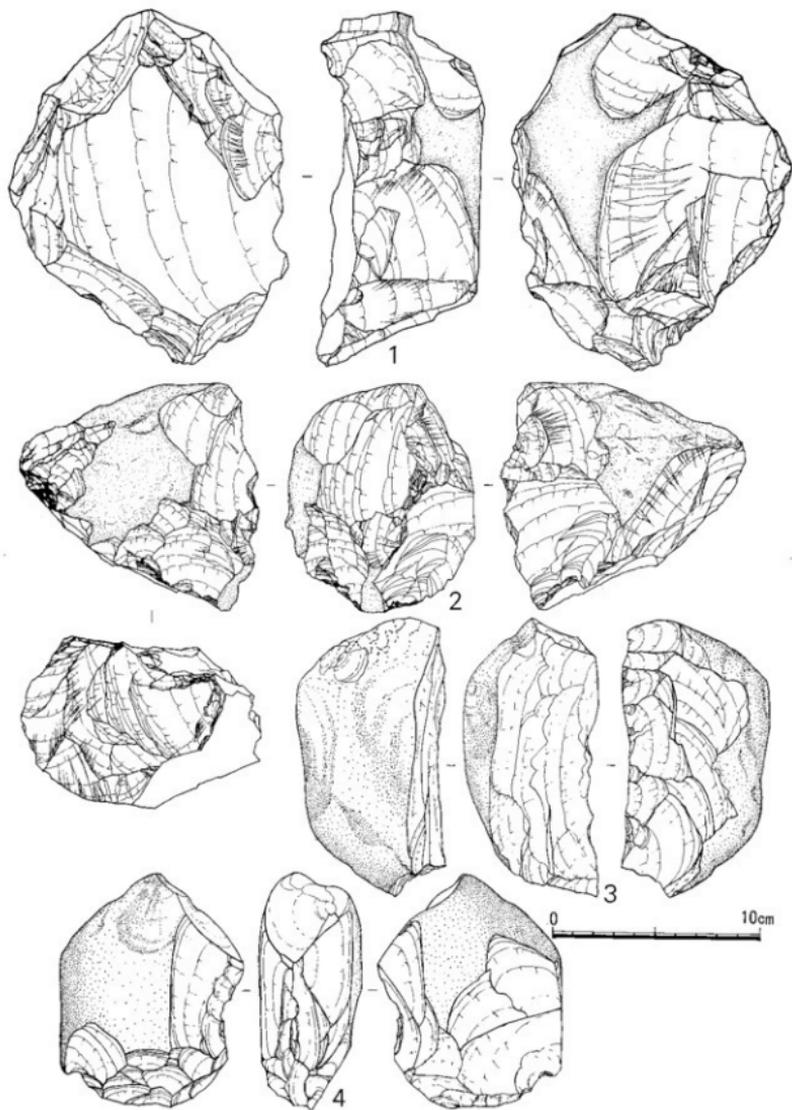
石材核を主体に磨石、叩石、スクレイパー、石鏃、楔形石器、線刻礫などである。

石材核 (第74図1~4、第75図1~3、第76図1~5)

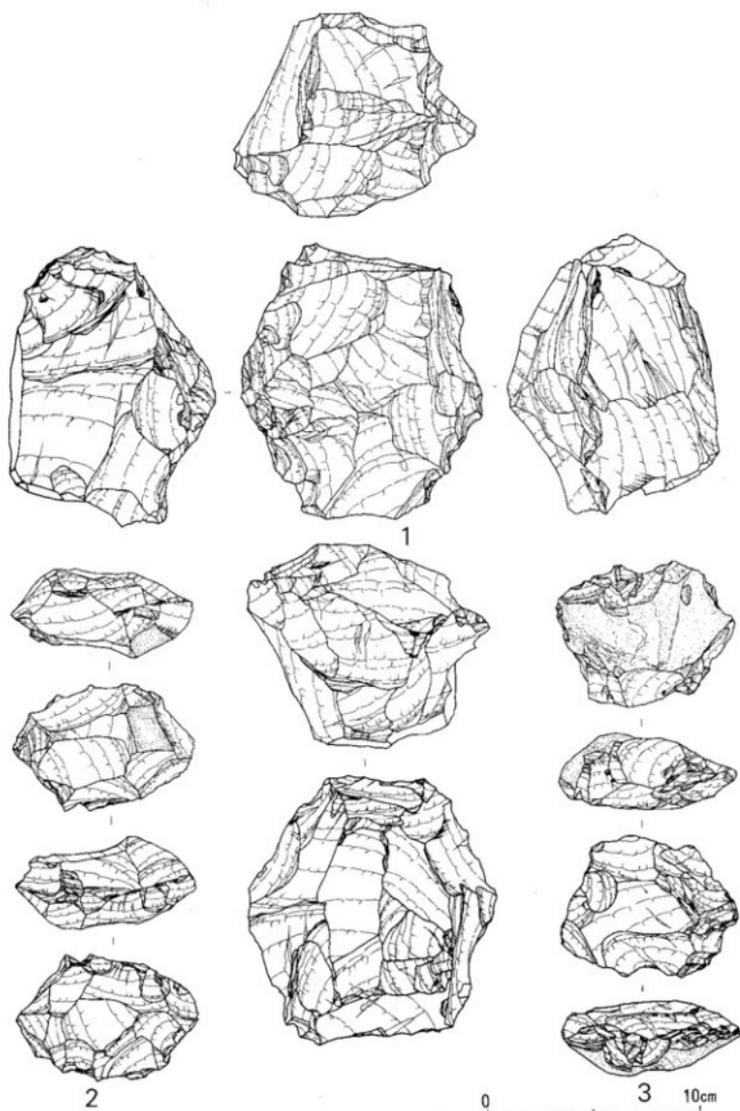
12点を図示した。総て良質の頁岩で、円礫を素材とし大部分のものの一部に自然面をとどめ、しかも分厚なものが多い。第74図(1~4)第75図(1)は比較的大型である。第74図(1)は礫を半裁し板状としたもので、片面に幅広く第一次剝離面をとどめ、その平坦面の縁辺を打面とし大型の横長剥片を剝取している。同図(2)は三角形をなし、3面の縁辺より剥片剝離がなされているが、短軸一辺には激しい剥片剝離痕を残す。同図(3)も(1)同様、円礫を半裁したもので、片面に第一次剝離面となる平坦面をとどめ、その面の縁辺を打面とし剥片剝離がなされている。同図(4)は不整四辺形をなす扁平礫の周縁より剥片剝離が行われ、特に長・短軸の2辺に集中し、両面に横長剥片剝離痕をとどめる。第75図(1)は、全面に剥片剝離痕をみる。剥片剝離は激しくなされているものの、身は瘦せ細ってなく分厚である。第76図(4・5)は、剥片剝離が原礫の一部にのみ見られるもので、素材となる原礫の原形をほぼそのままとどめる。第75図(2・3)、第76図(1~3)は小型タイプの石材核で、剝離された横長剥片も小型であったと思われる。(第75図2・3)は、その剥片剝離痕を器面のほぼ全面にとどめる。第76図(1)は円礫を半裁したもので、片面に第一次剝離痕を幅広く残し、その縁辺を打面とし横長剥片を剝離している。同図(2)は不整四辺形を呈し、分厚で、全面に横長剥片を剝取した剝離痕をとどめる。同図(3)は礫の片側全面にやや小型の横長剥片剝取痕をとどめ、一方の面には幅広い横長剥片2枚を剝取した剝離痕を残す。

磨石・叩石 (第77図1~3)

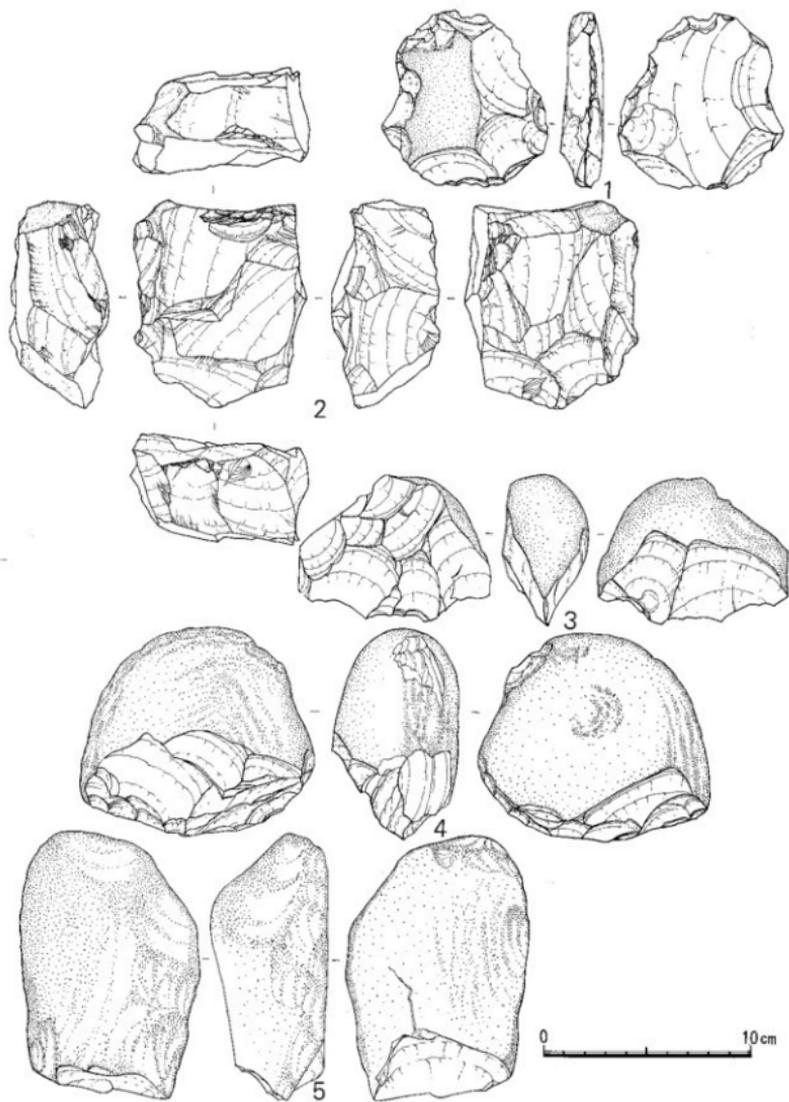
総て砂岩製で(1)は扁平で楕円形をなし、上面の片面中央と両側面にアバタ状の使用痕をみる。(2・3)は分厚で、前者は側面にアバタ状の使用痕を、後者は両面中央に磨石として使用された磨耗痕が残る。



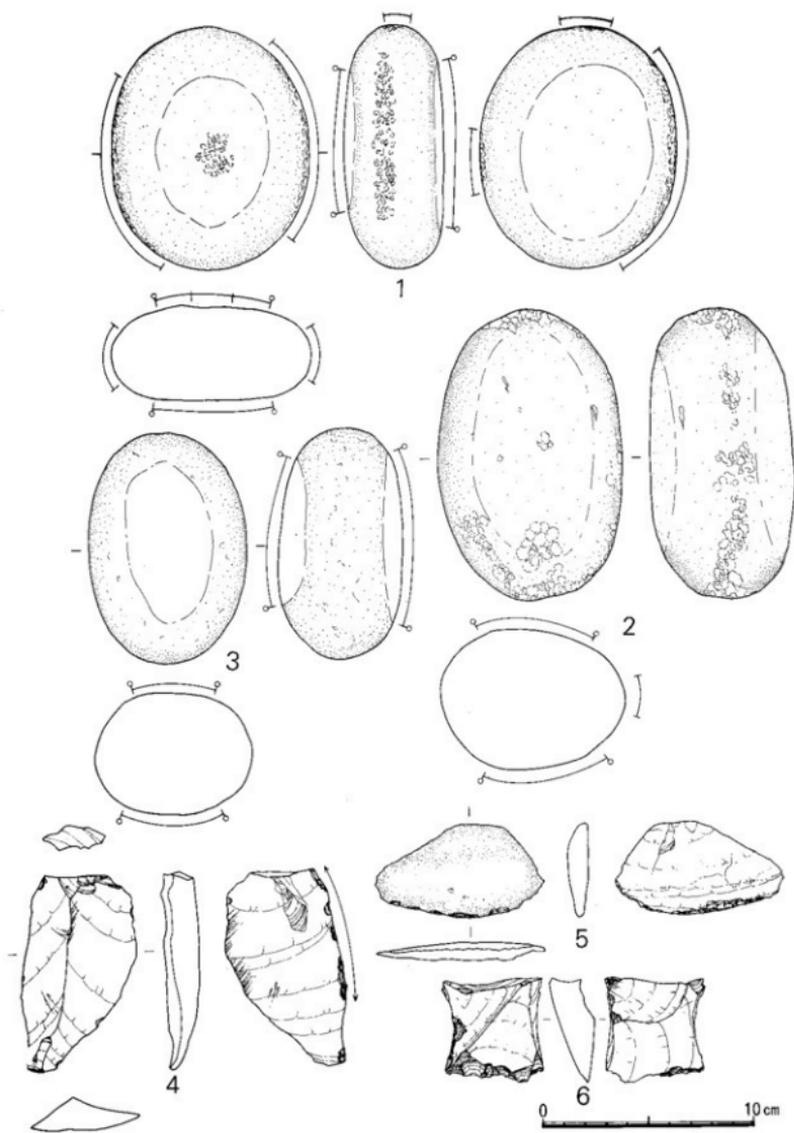
第74图 大宮・宮崎遺跡A-3区出土石器



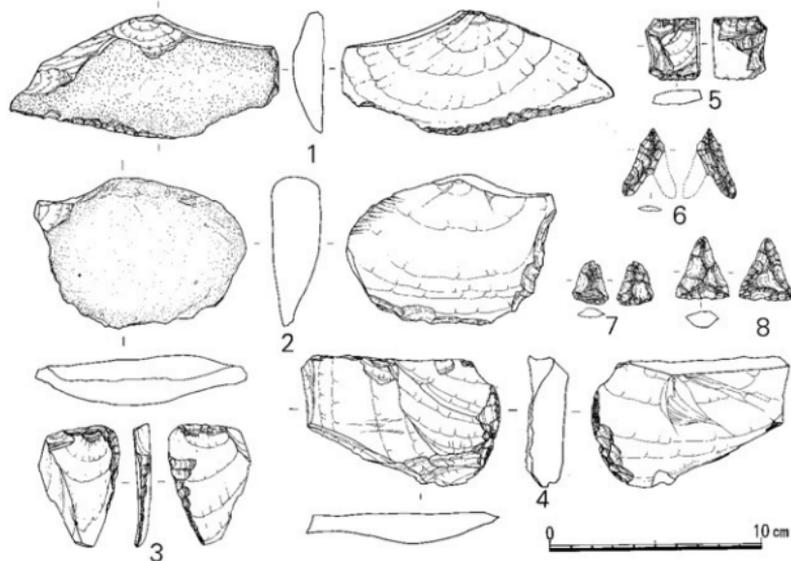
第75図 大宮・宮崎遺跡A-3区出土石器



第76图 大宮・宮崎遺跡A-3区出土石器



第77図 大宮・宮崎遺跡A-3区出土石器



第78図 大宮・宮崎遺跡A-3区出土石器

スクレイパー（第77図4～6、第78図1～4）

総て頁岩製で、總体的に大型のものが多い。第77図（4）は縦長剥片素材で、片側面に刃部を持ち、同図（5）は横長剥片の長軸一辺に両面加工によって刃部を作出し、片面には自然面を全面に残す。同図（6）は、四角形をなす分厚な剥片の一辺に片面より粗い押圧剥離を加え鋸歯状の刃部を形成する。第78図（1・2）は、共に大型横長剥片を素材とし、片面の全面に自然面を残し、長軸の一辺に直線的な刃部を形成するが、（1）は両面加工によって作出している。同図（3）は縦長剥片素材で、片側面に刃部を持つ。同図（4）は分厚な不定形剥片を素材とし、短軸一辺に両面加工によって外湾する刃部を形成する。刃部の形状からして、本資料は搔器とすべきものかもしれない。

楔形石器（第78図5）

1点の資料で、縦長剥片を素材とし、両極打法によって整形され、両端面には刃潰れとみられる小さな剥離痕が観察される。

石鏃（第78図6～8）

3点はサヌカイトと頁岩製である。（6）は大型で二等辺三角形を呈し、先端部は特徴的な将棋

大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器観察表(第10表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成	
				外面	内面			
第69図	1	29	深鉢口縁部	28	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	長石 石英 粒粒	不良
	2	17	深鉢口縁部	30	灰茶褐色 縄文RL	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
	3	300	深鉢口縁部	29	淡灰褐色 縄文RL	淡灰褐色 横撫で滑らか	長細 石砂 粒	良好
	4	385	深鉢口縁部	23	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	金雲母 粒	良好
	5	93	浅鉢口縁部	21	赤褐色 縄文RL	赤褐色 横撫で滑らか	細砂 金雲母 粒	良好
	6	44	深鉢胴部	21	黒褐色 縄文RL	黒褐色 横撫で滑らか	金雲母 長石 粒	良好
	7	73	深鉢胴部	24	赤褐色 縄文LR	灰茶褐色 横撫で滑らか	金雲母 細砂 粒	良好
	8	27	浅鉢口縁部	33	黄褐色 縄文RL	灰黄褐色 篋撫で滑らか	長細 石砂 粒	良好
	9	25	深鉢胴部	30	黒褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	石雲母 長石 粒	良好
	10	40	深鉢胴部	29	黒褐色 縄文LR	黄赤褐色 横撫で滑らか	長金雲母 石 粒	良好
	11	35	深鉢胴部	?	縄文RL、 篋研磨	横褐色 篋撫で滑らか	長細 石砂 粒	良好
	12	13	深鉢胴部	21	黄褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂 石砂 粒	良好
	13	表採	深鉢胴部	35	茶褐色 撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	金雲母 長石 粒	良好
14	385	深鉢胴部	16	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	金雲母 細砂 粒	良好	
第70図	86 14	浅鉢口縁部	32	灰茶褐色、縄文RL、 撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好	
	2	80	浅鉢口縁部	24	黒褐色、縄文 LR、篋研磨	黒褐色 篋研磨	細砂 粒	良好
	3	50	深鉢口縁部	33	暗茶褐色条痕、縄 文LR、撫で消し	暗赤褐色、横位 条痕撫で消し	細砂 粒	良好
	4	106	深鉢口縁部	21	暗赤褐色、縄文 LR、斜行条痕	暗赤褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
	5	41	深鉢胴部	22	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	長細 石砂 粒	良好
	6	1	深鉢胴部	24	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	金雲母 細砂 粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器観察表(第11表)

図番号	遺物記録No	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第70図7	101	深鉢頸部	24	赤褐色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	金雲母粒 細砂粒	良好
第71図1	34	深鉢口縁部	25	黒褐色、縄文LR、撫で滑らか	灰茶色横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	80	深鉢口縁部	35	暗赤褐色、縄文LR、撫で滑らか	暗赤褐色横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	不良
3	表採	深鉢口縁部	23	灰茶色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	93	深鉢口縁部	25	赤褐色、縄文LR、撫で滑らか	暗茶褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
5	75	深鉢口縁部	29	灰茶褐色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
6	103	深鉢口縁部	21	赤褐色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	不良
7	55	深鉢口縁部	31	暗茶褐色、縄文LR、撫で滑らか	暗茶褐色横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
8	131 82	深鉢口縁部	30	灰茶褐色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	18	深鉢口縁部	26	黄灰色横撫で滑らか	黄灰色横撫で滑らか	細砂粒	不良
10	173	深鉢口縁部	27	灰茶色横撫で滑らか	淡黄色横撫で滑らか	細砂粒	良好
11	表採	浅鉢口縁部	25	暗茶褐色撫で滑らか	暗茶褐色撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
12	77	深鉢口縁部	44	黄赤褐色、縄文LR、撫で滑らか	黄赤褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	ベルト内	深鉢胴部	33	黒褐色、縄文LR、撫で滑らか	黒褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
第72図1	24	浅鉢口縁部	30	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色横撫で滑らか	長石 石英粒	良好
2	130	浅鉢口縁部	28	赤褐色 縄文LR	暗赤褐色横撫で滑らか	長石 細砂粒	良好
3	30	深鉢胴部	22	灰茶褐色、縄文RL、磨研	灰茶褐色 磨研で滑らか	長石 細砂粒	良好
4	72	深鉢胴部	19.5	黒褐色、スス付着、縄文RL、撫で滑らか	黒褐色横撫で滑らか	金雲母粒 細砂粒	良好
5	32	深鉢胴部	21	黒褐色 縄文RL	黒褐色横撫で滑らか	長石 細砂粒	不良
6	11	深鉢胴部	20	赤褐色 縄文RL	赤褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器観察表(第12表)

区番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第72区7	表採	深鉢頸部 胴部	30	赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	赤褐色 塗撫で滑らか	細砂粒	良好
8	8	深鉢胴部	28	黒褐色、縄文RL、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	42	深鉢胴部	30	黒褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	56	深鉢胴部	30	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 撫で滑らか	長細石砂	良好
11	47	深鉢胴部	14	黄灰色、縄文LR、 撫で滑らか	黄灰色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	57	深鉢胴部	23	黄褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	不良
13	55	深鉢胴部	30	黄褐色 縄文LR	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	不良
14	16	浅鉢口縁部	21	灰茶色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
15	33	深鉢口縁部	29	黒灰色、縄文RL、 撫で滑らか	黒灰色 横撫で滑らか	長細石砂	良好
16	11	深鉢口縁部	40	黒褐色、スス付 着、縄文RL、 撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
17	74	深鉢胴部	29	黒褐色、朱色残 存、縄文RL、 撫で滑らか	黒褐色 塗撫で滑らか	長細石砂	良好
18	70	深鉢胴部	26	黄褐色 縄文RL	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第73区1	23	深鉢口縁部 胴部	15	黒灰色、スス付 着、縄文RL、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
			13				
2	49	深鉢口縁部 胴部	19	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	99	浅鉢口縁部	19	灰茶色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長細石砂	不良
4	67	深鉢胴部	29	灰茶色、スス付 着、横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	長細石砂	良好
5	95	深鉢胴部	24	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細長石	良好
6	92	浅鉢口縁部 胴部	22	灰茶黒色 横撫で滑らか	灰茶黒色 横撫で滑らか	細長石	良好
7	94	浅鉢口縁部	48	黄褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	長大石	不良
8	75	浅鉢口縁部	30	暗茶褐色 条痕撫で消し	暗茶褐色 条痕撫で消し	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器観察表(第13表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第73図9	73	浅鉢口縁部	24	灰茶色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	68	深鉢頸部	17	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
11	71	深鉢口縁部	25	茶褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横位条痕	細砂粒	良好
12	78	深鉢口縁部	28	黄褐色、スス付 着、横位条痕	黄褐色 横位窪撫で	長細石 砂粒	良好
13	53	底部	5	淡黄褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	大粒砂	不良
14	93	底部	6	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂 石粒	良好
15	21	底部	6	淡黄色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細金雲 砂粒	良好
16	62	底部	8	赤褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	長細石 砂粒	良好
17	81	底部	8	赤褐色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂粒	良好
18	119	底部	10	淡灰黄色 窪研磨	黒褐色 窪研磨	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-3区出土土器観察表(第14表)

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第74図1	199	石材核	17.1	13.6	8.0	1739.39	頁岩	青黑色、片面に 幅狭く自然面残 す。剝離面鋭利
2	155	石材核	11.6	11.0	9.2	1037.34	頁岩	灰黑色、両面中 央に幅狭く自然 面残す
3	142	石材核	13.5	7.1	6.0	780	頁岩	青灰色、両面に 自然面幅広く残 す。剝離面鋭利
4	129	石材核	11.3	8.5	4.9	600	頁岩	青灰色、両面に 自然面残す。剝 離面鋭利
第75図1	表採	石材核	13.2	11.4	9.8	1365.94	頁岩	青黑色、全面に 剝片剝離痕残す
2	134	石材核	8.5	6.0	4.4	191.66	頁岩	灰黑色、片面に 幅狭く自然面残 す。剝離面鋭利

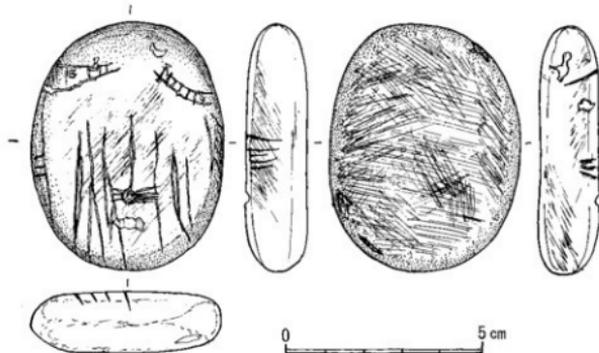
大宮・宮崎遺跡A-3区出土石器観察表(第15表)

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第75図3	170	石材核	8.4	6.8	3.7	181	頁岩	青黒色、両面に自然面残す。剥離面鋭利
第76図1	135	石材核	8.5	8.0	2.0	160	頁岩	青黒色、片面に自然面残す。剥離面鋭利
2	182	石材核	10.0	8.4	5.2	520.22	頁岩	灰黒色、自然面をわずか残す。剥離面鋭利
3	表採	石材核	9.2	7.1	4.1	230	頁岩	青灰色、片面に幅広く自然面残す。剥離面鋭利
4	201	石材核	9.2	7.1	4.1	230	頁岩	青灰色、両面に幅広く自然面残す。剥離面鋭利
5	141	石材核	13.0	8.5	5.6	680	頁岩	灰黒色、自然面両面に幅広く残す
第77図1	第8号 配石内	叩磨 石	11.5	9.4	4.7	773.98	砂岩	灰黒色、側面、中央片面に叩磨、一方の面光沢あり
2	81	叩磨 石	13.7	8.7	6.5	1151.6	砂岩	灰黒色、両端部に叩磨、中央両面研磨痕あり
3	第8号 配石内	磨 石	11.0	7.5	5.9	696.34	砂岩	青黒色、中央両面研磨
4	187	スクレイパー	9.4	5.6	1.8	71.02	頁岩	縦長剥片素材、片側面に使用痕あり
5	42	スクレイパー	4.4	8.0	0.9	29.93	頁岩	横長剥片素材、片面に自然面残す
6	118	スクレイパー	5.0	4.6	1.8	40.7	頁岩	不定形剥片素材、片側面に粗く刃部形成
第78図1	表採	スクレイパー	13.0	5.8	1.5	90	頁岩	横長剥片素材、両面加工で刃部形成、大型
2	68	スクレイパー	7.1	9.0	2.4	173.19	頁岩	横長剥片素材、片側面に粗く刃部形成
3	表採	スクレイパー	5.7	3.7	0.7	14.0	頁岩	縦長剥片素材、片側面に刃部形成
4	64	スクレイパー	6.2	9.4	2.0	104.90	頁岩	青黒色、短軸片端に刃部形成
5	表採	楔形石器	2.9	2.5	0.65	6.0	頁岩	両端に刃つぶれ痕残る
6	表採	石 鏃	3.4	1.1	0.3	1.1	頁岩	片脚欠損
7	42	石 鏃	2.0	1.7	0.5	1.4	サスカイト	完形、粗製
8	110	石 鏃	3.0	2.5	0.75	4.4	頁岩	完形、大型

の胸形をなす。基部は「V」字状に深く抉られ、長い脚部は左右に開き脚端は丸く作出され全体的に薄身である。(7・8)は共に基部に抉りのない平基式で、(7)は先端が丸みをなし鈍く、(8)は左右均整のよくとれた二等辺三角形を呈するが、押圧剥離による加工は前者同様、大まかで共に粗製である。なお、後者は身が分厚い。

線刻礫 (第79図)

1点の資料で、楕円形を呈する扁平砂岩礫を素材とし、平坦面をなす両面と両側面共に磨かれ、均整のよくとれた楕円形へと整形されている。平坦面をなす片面に女人像が線彫されているが、礫面上側に八の字状に2条単位の細線で描かれ、2条細線の中を縦位に刻む短線が並び、その下部中央に1条の縦線が彫られ、縦線の末端には直径0.3cm、深さ0.2cmの小穴があげられている。小穴の左右には左側3条、右側5条の細線がシャープに描出される。さらに、中央に見られる小穴を中心とし、礫の中央よりやや下った位置に12条の緩く蛇行し垂下する細線が線彫りされている。これらの線描された表面には、右上から左下方へと下る線条痕が微かに観察される。最大長6.35cm、最大幅4.95cm、最大厚1.55cm、重量70gを量る。



第79図 大宮・宮崎遺跡A-3区表採の線刻礫

(5) A-2区・A-3区表採遺物

本遺跡発見の発端となった遺物で、A-2区、A-3区内で一括表採された資料である。土器・石器共にみられるが、前者が圧倒的に勝る。主体となるのは縄文後期後半の第4D類土器で、次いで第4B類が日立ち、第4C類や第4A類、第4E類、第5C類などが少量みられ、前期初頭の第

2 A類、同B類も微量含まれている。石器は石材核、スクレイパー、石錐、叩石、打製石斧、尖頭状石器、石棒などをみる。

土器（第80図～第87図）

第2 A類（第80図2）

深鉢の胴部片で、緩く膨らむ胴部の内外面には器面調整による横走する貝殻条痕が浅く残り、外面には2列単位の列点状刺突文が施されている。

第2 B類（第80図1）

深鉢の口縁部片で器壁は直立し、端部は水平にカットされ平坦面を持つ。器面には横走する条痕を残し、外面には口縁に平行し5条の断面三角形を呈する細い隆帯が貼付される。

第4 A類（第80図3・4）

2点は深鉢の緩く膨らむ胴部片で、前者は縦位に弧状を描く沈線内に、後者は横走する2条単位の沈線間に共に充填縄文が幅広く施文されている。文様の特徴から一見、後期初頭中津式に見られぬでもないが、これらの沈線は浅く弱々しく引かれ、しかもその筋が細目であることなどから、中津式とするにはやや抵抗を感じ、問題を残しながらも本類に含めた。

第4 B類（第80図5～17、第81図1～14）

深鉢と浅鉢がある。第80図（1～11）は深鉢の口縁部片で、波状口縁と平口縁とがある。波状口縁（5・6・10・11）は、どれも傾斜が緩く、波頂部に粘土紐貼付文を持ち、その上面に刻目の施された（5・10）などをみる。器壁は外反する無文の頸部を持ち、口縁は緩く「く」字状に内折させ、その端部は丸く肥厚させている。平口縁（7・8・9）も前者同様、口縁は緩く「く」字状に内折させ、口唇部は丸く肥厚す。これらの口縁外面には、3条単位の平行沈線が口縁に平行し描かれ、内1条は波状文となっている。中には（9）のように押し引き状の刺突文を連続施文するものもみられ、これには口縁内面にも外面同様の押し引き状刺突文が施されている。また波状口縁の波頂部外面に縦位の短直線2条を垂下させるもの（10）もみられる。（11）は2条単位の沈線を口縁に平行させ、上下2段に描き、その中間に蛇行状文を垂下させている。これらの文様は、縄文を地文とする面に直接描かれ、縄文の撚りはLRを原則とする。

胴部は緩く膨らみを持ち、外面には上下に1～2条単位の平行横直線を間隔を開けて描き、その中間に4条単位の斜行沈線でシャープに逆三角形文を描き連続転回す。これらの胴部文様も口縁同様、縄文LRとなる地文に直接描かれる。第80図（12～17）は、その胴部片で、外面には逆三角形文様の一部をとどめている。本類の沈線は総体的に、その筋が太い。

浅鉢（第81図1～14）、口縁部が長く緩く内湾気みに立ち上がるタイプと、立ち上がりは短く「く」字状に内曲すタイプの2種に大別される。それらは縄文地に直接文様を描くものと、磨研された精製品、磨消縄文手法となるものなどに細別される。縄文地に直接文様を描くもの（1～5・10・11・13・14）。（1）は緩い波状口縁を呈し、器内は薄いが推定口径40cmを測る大型で、口縁外面には幅広い文様帯を持つ。沈線は比較的細く、口縁に平行し2条単位の沈線を上下2段に間隔を開けて描き、その中間に3条単位の沈線で逆三角形文を描き文様構成する。その文様は口縁を連続転回させていたものと思われる。この文様構成する沈線末端は鉤状に曲げられ特徴とし、地

文となる縄文はLRとなる。(2)は(1)と同一個体と思われる。口縁外面には(1)と同じ細線で描かれた逆三角形文の一部文様をみる。(3)も薄手、器壁は外傾みに直立し、外面には筋の細い沈線で(1)同様の逆三角形文が描かれている。これの地文はRLである。(4)は口縁の立ち上がりがやや短かく、外面には4条単位の沈線で2条が直線、他の2条は波状に描かれ幅狭な文様帯を構成する。地文の縄文はLRである。(5)も口縁の立ち上がりは短い、これの外面は肥厚させ端部は尖り気みとなる。外面には1条沈線で逆三角形に描いた中を2条の緩い波状沈線で飾り文様構成する。地文となる縄文はLRである。(10)は口縁の内折が強く、口縁は直立気みに立ち上がる。外面には上段3条、下段2条単位の沈線を口縁に並行し巡らし、その沈線の末端に小さく入組文を上下2段に描き文様集約部を形成する。地文の縄文はLRである。(13・14)は共に胴部片で、前者は縄文RLとなる縄文地に2条単位の沈線で横位に巡らし、さらにその沈線に接して縦位に垂下させ文様構成させ、後者は「く」字状に開いた沈線と横位に1条沈線が描かれ、その1条沈線に接して小さな円形刺突文が縦位に施文されている。これの地文となる縄文はLRで、その位は極めて小さく特徴的である。(11)は、胴上半部で「く」字状に内折させ、口縁端部へとはわずかに膨らみを持たせ移行する。器形からみて、これらは注口土器とすべきものかもしれない。文様は口縁に2条の平行沈線、胴屈曲部に2条の沈線を巡らせ口縁から胴上半部の屈曲部まで幅広く持ち、その沈線内に縦位に2条単位の弧状を描く沈線を垂下させて文様構成させている。地文の縄文RLである。

鏡研磨された精製品(6~9)、(6・7・9)は文様、器形、土器質などからみて同一個体とみてよいものである。口縁は緩く内湾気みに立ち上がり、端部は尖り気みに丸くおさまる。外面は縄文が施されていたものと思われるが、それを鏡によって磨消され滑らかな肌を呈する。部分的には地文となる縄文LRがうっすらと残る箇所をとどめる。文様は口縁外面に幅広く施される。まず、口縁に平行する3条沈線と、その沈線に接して2条の沈線が直角に交わり、さらに下側に2条単位の平行沈線が巡る。下側の2条沈線の上側には波状文が、縦位の沈線に接し「の」字状文が描かれ、口縁に接する3条単位の沈線間には円形刺突文が連続施文されている。

磨消縄文(12)は、口縁部片で、器壁は緩く「く」字状に内曲し、端部は尖り気みとなり丸くおさまる。外面には、口縁に平行する2条単位の沈線が描かれ、その沈線間に幅広い縄文帯を磨消縄文手法によって形成する。縄文の撚りはRLである。

第4C類(第81図15~19、第83図1~5)

深鉢と浅鉢がみられる。深鉢は絶て平口縁で、弓状に長く外反する頸部は「く」字状に内折する口縁部へと移行する。口縁部は第4B類を踏襲し立ち上がりはやや長く、その端部は肉厚く丸みを持たせている。口縁外面には2条単位の沈線が縄文LRとなる面に直接描かれ、中には口縁内面に押し引き状となる刺突文をみる第81図(5)、外面の沈線内に短直線を左右対向さすもの第81図(16)などをみる。胴部は張りが弱く、文様帯を上半部に持ち、縄文LRとなる面に直接平行横直線を上下2段に間隔を開けて描き、その沈線間に傾斜の緩い逆三角形文を連続転回させ文様構成する。第83図(2~5)はその胴部片、(2・3・5)には逆三角形文となる文様の一部をとどめている。

浅鉢(第81図19)、1点の口縁部片で、緩い波状をなし、波頂部は欠損している。器壁は薄手で、

口縁は緩く内曲させ外面には2条の沈線が口縁に平行して廻り、その沈線は途中で切れ、末端には下向きとなる鉤状文が描かれている。さらに、その沈線の下側には2条単位の沈線が廻る。

第4D類 (第82図1~3、第83図6~18、第84図1~13、第85図1~10)

資料は最も多く、中には図面上で器形の復元可能な良好なものを含んでいる。深鉢を主体とし、若干の浅鉢をみる。

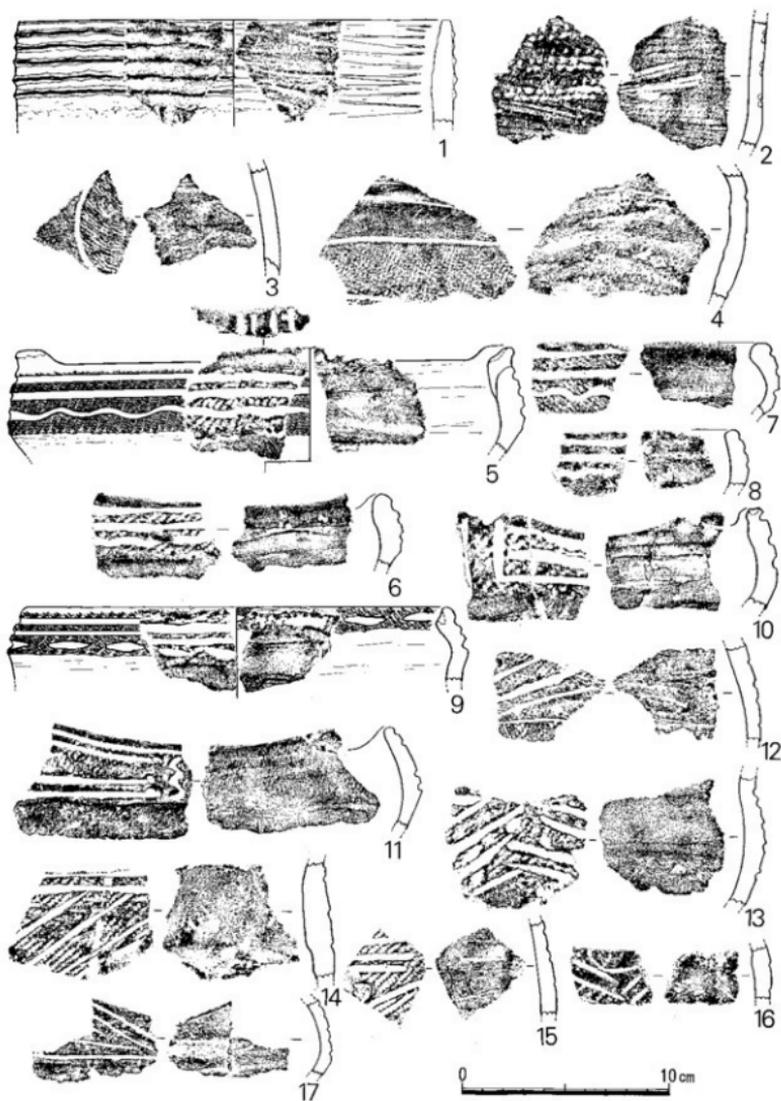
深鉢(第82図1~3、第83図6~18、第84図1~13、第85図7)は、縄文地に直接文様を描くもの、無文地に文様を描くもの、無文のものとして3種が看取される。その中で最も多いものは縄文地に直接文様を描くタイプである。口縁は波状となるもの、平口縁共にみられ、その数は後者が勝る。器形は弓状に外反する無文の長い頸部と「く」字状に緩く内折する口縁、そして胴部は球状に膨らむもの、張りが弱く最大径を胴上半部に持つものなどで底部は上げ底となる。「く」字状を呈する口縁は、その立ち上がりが短く萎縮し端部が尖り気みとなる特徴を持つ。口縁外面には2~3条単位の平行横直線を描き、その沈線間に斜行刻目を連続施文し飾る。この手法は胴部にも及ぶ。胴部では3~4条単位の平行横直線を胴上半部に廻らし、斜行刻目は1段ないしは2段施される。1段のみの場合は胴上段に限られる。また中には第84図(1)にみられるように頸部が短く、口縁外面の文様帯に穀粒状の列点刺突文を沈線内に連続施文し、沈線末端で小さく入組文を描く手法を持つものなどもみられる。また第83図(6~10)のような口縁外面に2条沈線を描きながらも、特徴とする刻目文を全く持たぬものも稀にみる。第82図(3)は、同図(2)を推定復元したものである。口径36.5cm、胴最大径34cm、器高24cmを測る。口縁は小さく萎縮退化し、外傾する頸部は直線的に延び、胴部の張りは弱く膨らみを持つ。地文となる縄文の撚りはRLで、口縁に2条の平行横直線と沈線間に連続斜行刻目文を施す。胴部は4条の平行横直線を廻らし、最上段に口縁と同様のタッチで連続刻目文を、中央には1条を波状に描いてアクセントをつけ、さらに下段に描く2条横直線の沈線間に直径0.6cm前後の円形刺突文を横並びに7cm間隔で施し文様構成している。

波状口縁となるタイプも平口縁同様、口縁に2~3条、胴部は3~4条単位の平行横直線を廻らし、沈線間に斜行する刻目文を連続施文する。第84図(9)は、胴部の文様帯に1条沈線で描かれた波状文をみる。また同図(7)は波頂部に「U」字状の切れ込みを持ち、その直下に「C」字状文を左右対向させ同図(5)は波頂部に切れ込みはなく山形口縁を形成し、外面の波頂部直下には「C」字状文を横位に描き主文様を構成している。第84図(8)は地文に縄文はなく、無文地に文様を描くタイプで、波状口縁となる深鉢である。波頂部には切れ込みはなく山形をなし、外面には2条単位の沈線を口縁に平行させ2段廻らしている。同図(3・4)、第85図(17)は無文の深鉢で、共に平口縁で(17)は緩く外傾する長い頸部を持っている。

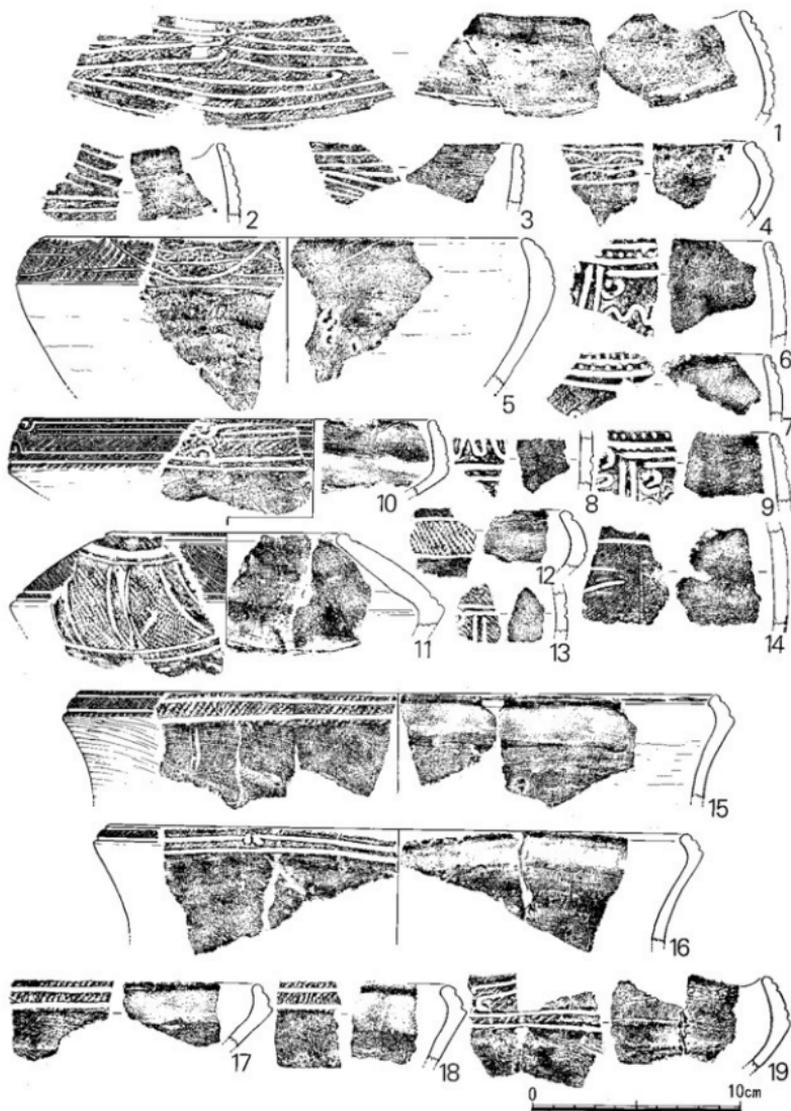
浅鉢(第85図8~10)、3点で絶て口縁部片である。緩く内湾し、端部は尖り気みに丸みをなす。(8)は外側を肥厚させ、外面には4条の平行横直線を縄文地に直接描く。(9)は緩い波状口縁を呈し器内は薄い。外面には3条の平行横直線文を縄文地に描く。(10)も薄手で、無文地に直接3条の平行横直線文が描かれる。

以上、本類の器面に施される縄文の撚りはRL、LR共にみられ、その割合はほぼ互角である。

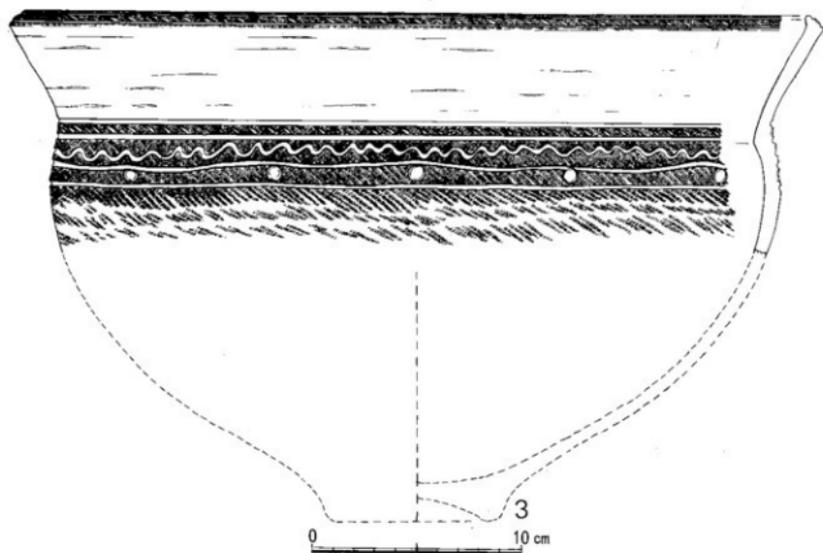
第4E類 (第85図11~16)



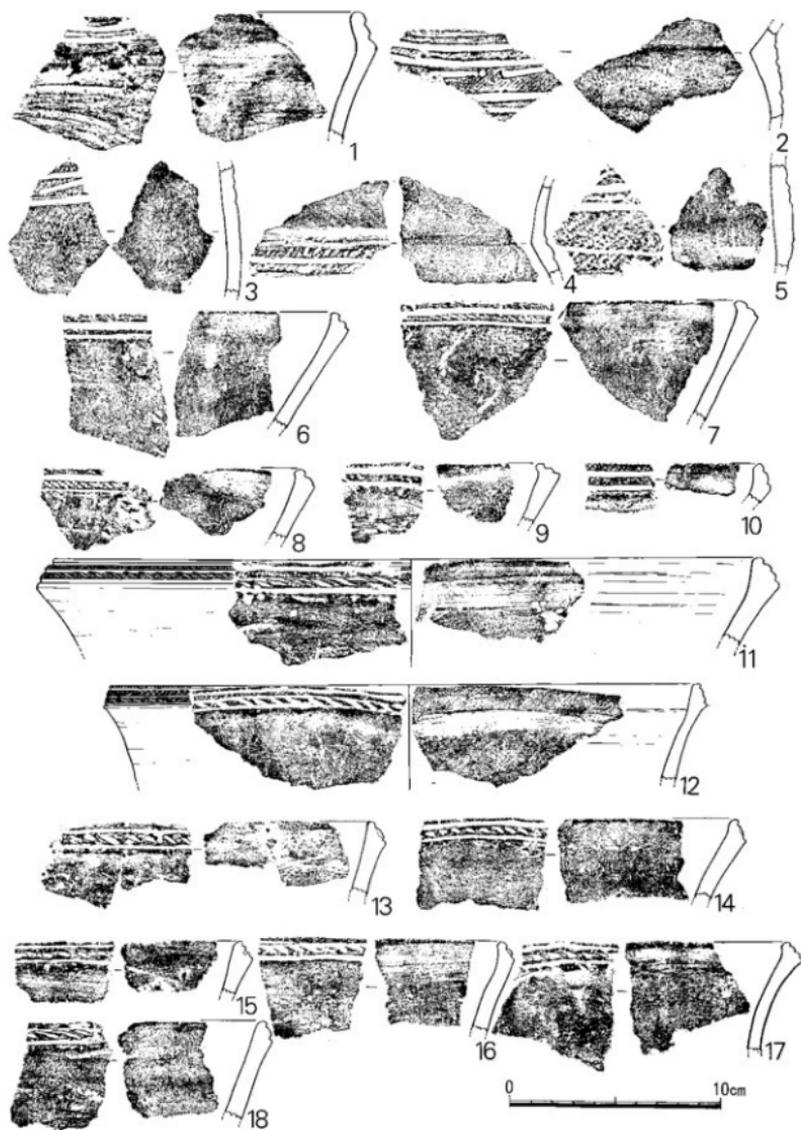
第80圖 大宮・宮崎遺跡発見時（A-2・A-3区）表採土器



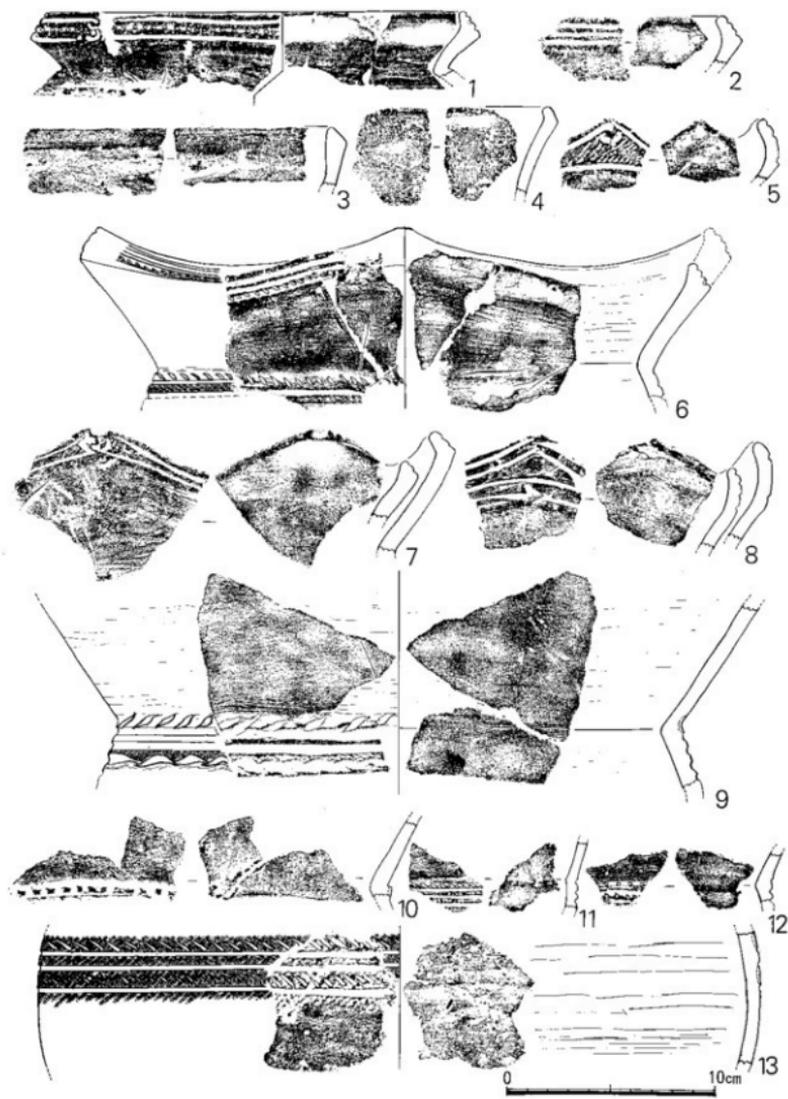
第81圖 大宮・宮崎遺跡発見時（A-2・A-3区）表探土器



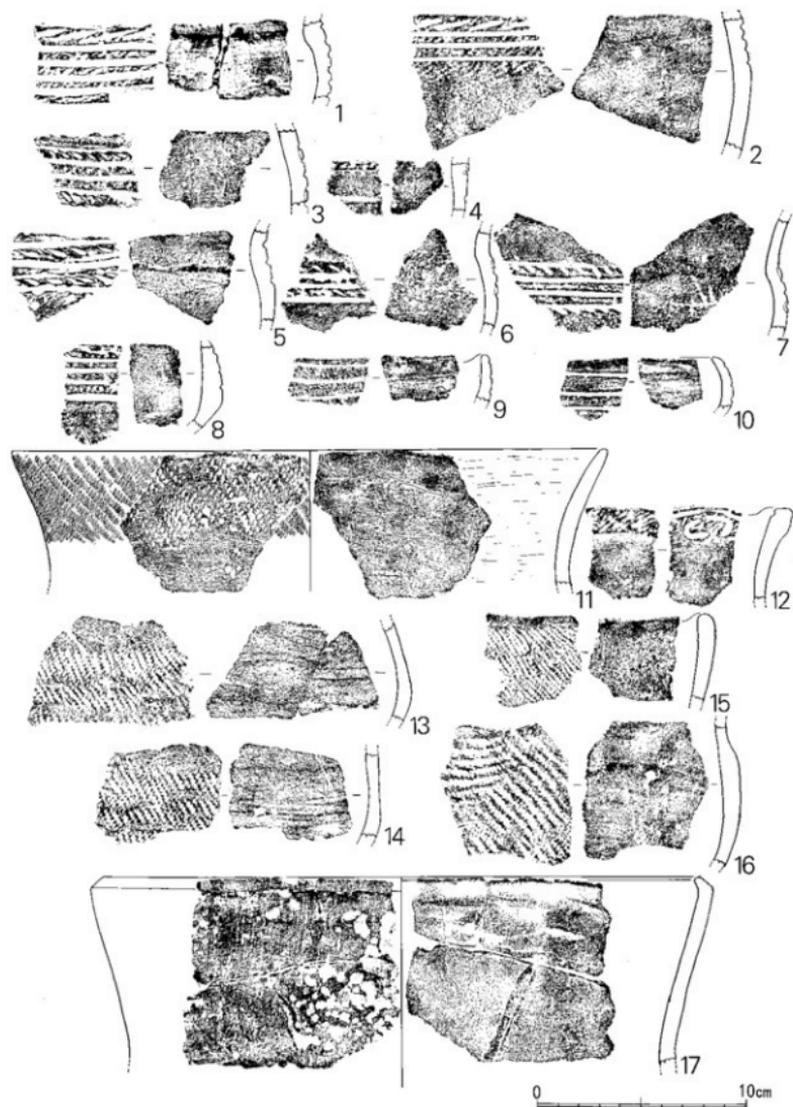
第82圖 大宮・宮崎遺跡発見時(A-2・A-3区)表採土器



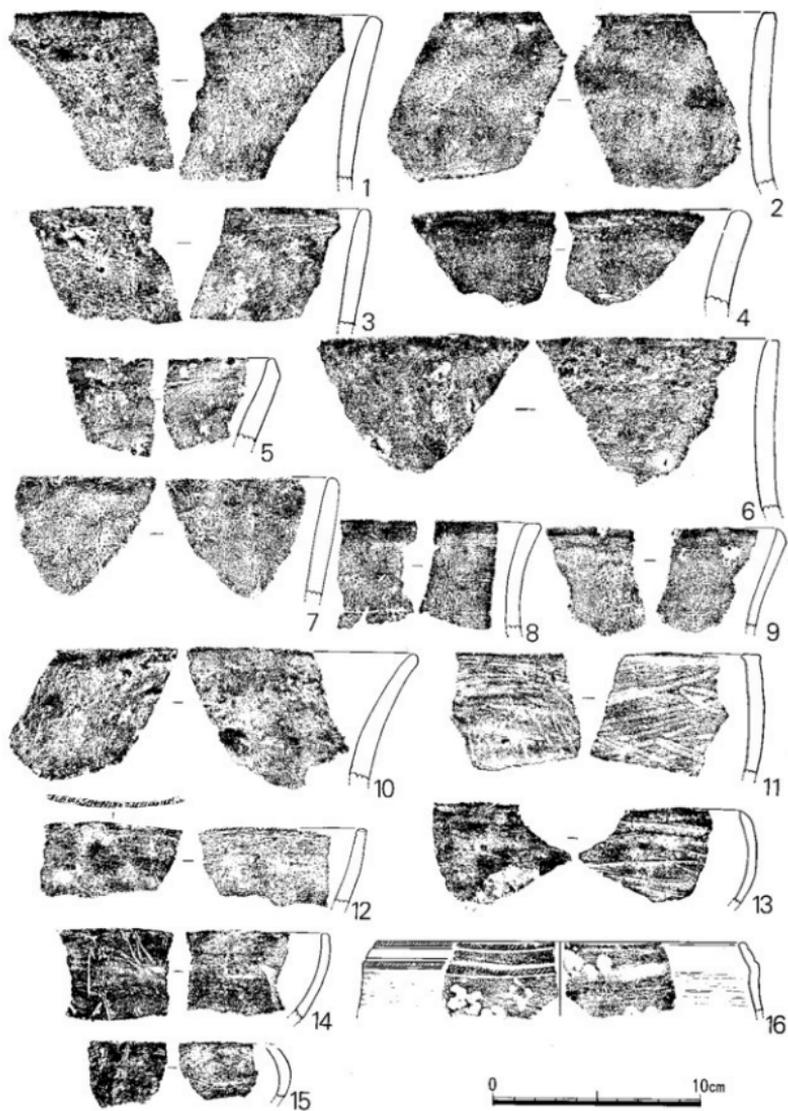
第83图 大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2・A-3区) 表探土器



第84圖 大宮・宮崎遺跡発見時（A-2・A-3区）表探土器



第85図 大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2・A-3区) 表採土器



第86図 大宮・宮崎遺跡発見時（A-2・A-3区）表採土器

総て深鉢で(11~12・15)は口縁部片で、(11・12)は外反し、(15)は緩く内湾している。外反する(11)は端部が尖り気みに肉薄く幅狭い平坦面を作出し、外面には大粒の縄文RLが施されている。(12)は緩い波状口縁を呈し、外面を若干肥厚させ、端部は平坦面を持つ。これは両面に文様帯を持ち、内外面共、縄文LRとなる幅狭い縄文帯を形成し、内面には口縁に平行する1条の沈線と波頂部直下に「C」字状文を左右対向させ「C〇」文を大きく描いている。(15)も緩い波状口縁を呈し、端部は肥厚させ丸くおさまり、外面には幅広い縄文RLとなる縄文帯を持つ。胴部(13・14・16)は緩く膨らみ、(13・14)の外面には縄文RLが施され、(16)は大粒の縄文で羽状に施文されている。

第5C類 (第86図1~15)

深鉢と浅鉢に分けられる。総て口縁部片で、深鉢(1~10)は器内の厚いものが多く、器形は外反、外傾、直立、内傾気みに立ち上がるものなどで、端部は丸みをなすもの、尖るもの、平坦面を作出するものなどがみられる。同図(5)の口縁は「く」字状に内折させているが、立ち上がりは極端に短い。

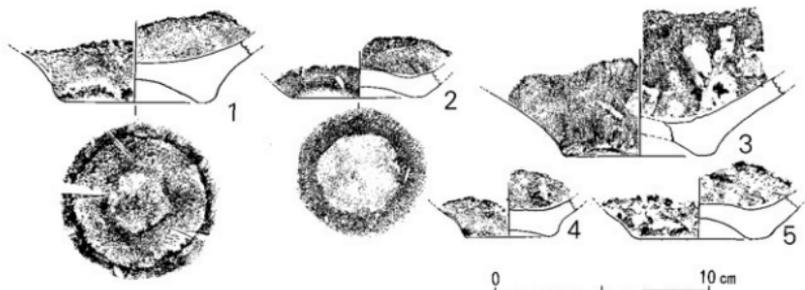
浅鉢(11~15)、緩く内湾するものと強く内曲するタイプの2種に分けられる。緩く内湾するタイプ(11・12・14)は、口縁端部を平坦に拡張する(11)、器肉が薄く尖り気みとなる(12・14)などがみられるが、(12)は口唇部に細線で密に刻目が施されている。強く内曲さす(13・15)は共に端部は尖り気みとなり、全体的に器肉は薄い。

注口土器 (第86図16)

器肉が薄く、口縁は「く」字状に緩く内折させ、口縁外面には平行横直線が3条描かれ、口縁端部に接する箇所と下段の2条沈線間に斜行する細線を密に描き文様構成している。これは文様、器形の特徴から注口土器とすべきものかもしれない。

底部 (第87図1~5)

高台をみるものではなく、総て底部外縁からそのまま上がる上げ底である。底径7.5cmのものから、4.5cmを測る小型のものまでがみられ、外底の上がりは約1cmと深く上げたものから0.2cmと浅いものがみられる。



第87図 大宮・宮崎遺跡発見時(A-2・A-3区)表採土器

石器 (第88図～第90図)

石材核 (第88図1～3、第89図1・2・4) 6点の石材核は総て良質の頁岩製で、自然礫を素材とし、身の一部に自然面を残している。第88図(1～3)は分厚、大型の石材核である。(1)は長楕円形礫の片側面を打面とし剥片剥離が行われ、その剥離痕を両面にとどめている。剥離は表、裏面と交互に繰り返行われたらしく側面観はジグザグ状となり、鋭利な稜線を形成している。これの一方の側面は原礫面をそのまま幅広く残している。(2)も片側面に剥片剥離が集中し、さらに片端部からの剥片剥離も進み、片面の約70%までに剥片剥離痕をとどめている。側面からの剥離は主に横長剥片剥離を目的としており、その剥離痕をとどめるものの、片端部からの剥片剥離は縦長剥片を剥取している。(3)は、不整三角形をなし、長軸の一辺と短軸の一辺に剥片剥離が及び、大きな横長剥片剥離痕を2辺の両面にとどめている。これの剥片剥離も交互剥離によりなされており、打面となる縁辺はジグザグ状となる鋭利な稜線をとどめている。第89図(1・4)は扁平な楕円形礫を素材とし、長軸の一辺より剥片剥離がなされ、(1)は大きな剥片剥離痕を(4)はやや小型の剥離痕を残し、これは長軸一辺に入念な剥片剥離痕をとどめている。同図(2)は三角形をなし、剥片剥離は長軸の一辺に交互剥離によって剥片剥取がなされ、その剥離痕を両面に残す。

叩石 (第89図3、第90図7)

砂岩製で長楕円形礫を素材とし、両面の片端部に寄った個所に深く凹む叩痕を両面のほぼ同じ位置にとどめている。第90図(7)は長さ5.5cm、最大幅4.6cm、厚さ3.6cmを測る小型の叩石である。全体形は菱形を呈し、使用痕は側面の全周にみられ、平坦面を残すほどに使い込まれている。

スクレイパー (第90図1～5)

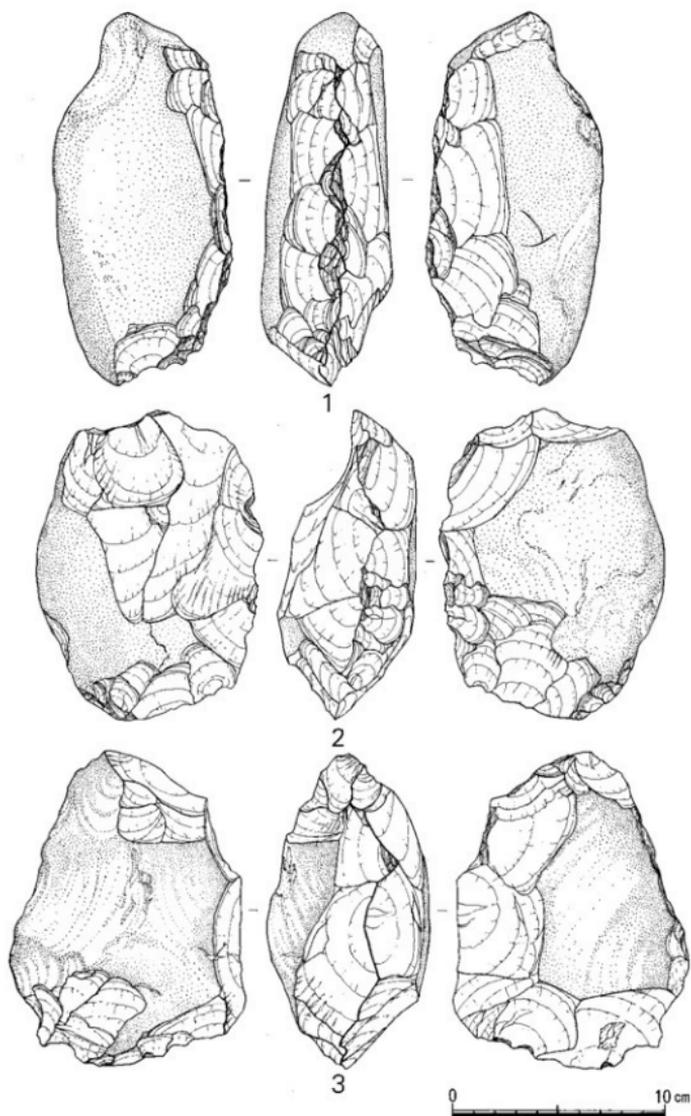
(1～3)は横長剥片素材で、刃部は押圧剥離によって鋭利な刃部を作出している。3点は総て刃部は両面加工によるもので緩く外湾する刃部を形成し、(1・2)は大型で前者は背面に、後者は片面の刃部近くに自然面を幅狭く残している。(4)は、やや幅広い縦長剥片素材で、打面と対向する一辺に直線的な刃部を作出し、(5)は分厚な不定形剥片素材で、長軸の一辺に粗く押圧剥離を加え刃部を形成する。共に刃部は片面加工による。

打製石斧未製品 (第90図6)

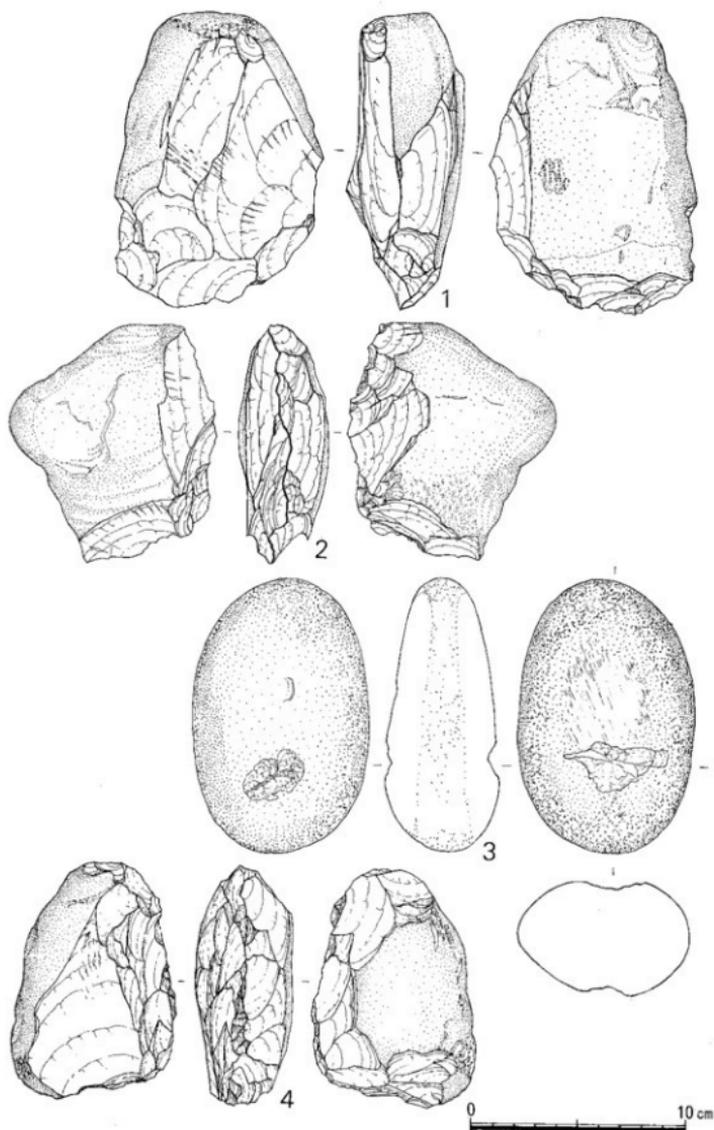
棒状を呈する扁平礫素材で、長軸の一端に打ち欠きによる加工が両面よりなされている。刃部作出を意図しての加工とみなされる。

石錘 (第90図9)

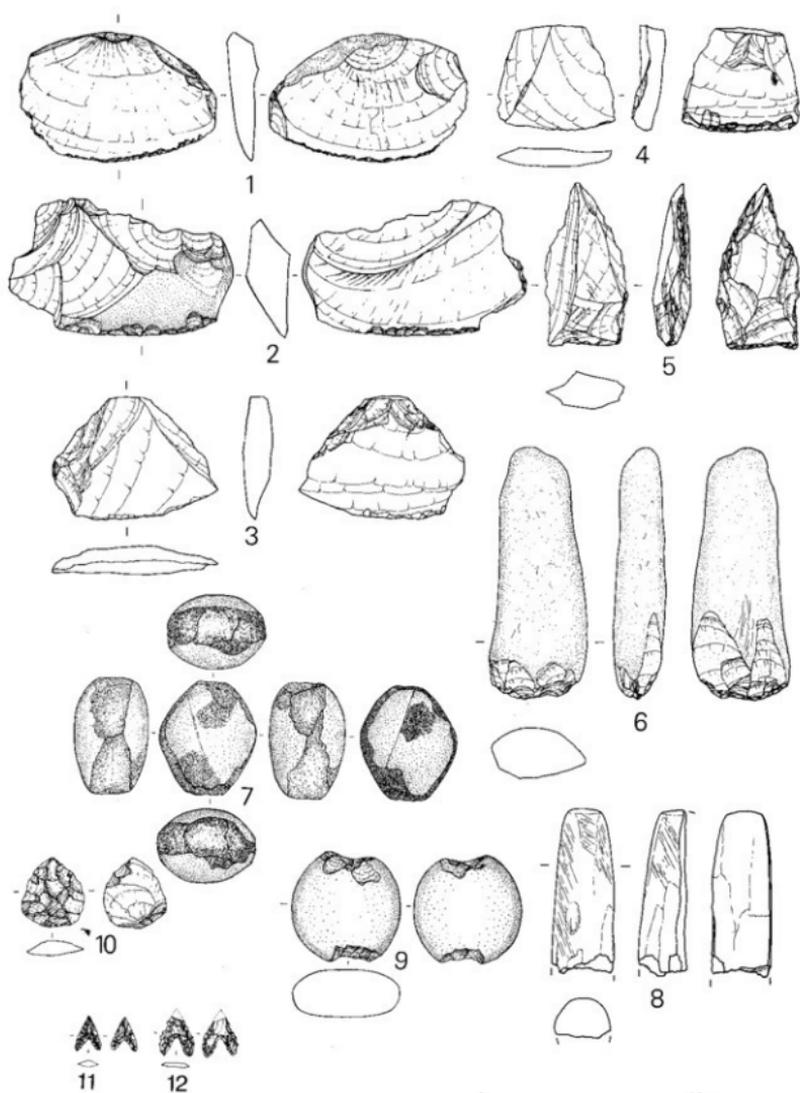
扁平な砂岩礫素材で、ほぼ円形を呈し、両端部には紐掛けとする凹みが打ち欠きによって作出されている。河川で使用された小型石錘である。



第88图 大宮・宮崎遺跡発見時(A-2・A-3区)表採石器



第89圖 大宮・宮崎遺跡発見時(A-2・A-3区)表採石器



第90図 大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2・A-3区) 表採石器

大宮・宮崎遺跡発見時（A-2区・A-3区）表探土器観察表（第16表）

図番号	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎 土	焼成
			外 面	内 面		
第80図 1	深鉢口縁部	21	灰茶色 横撫で滑らか	淡黄茶色 横位浅条痕	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
2	深鉢胴部	24	灰白茶色 横位浅条痕	灰茶白色 横位浅条痕	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
3	深鉢胴部	36	黄茶色 磨消縄文RL	茶褐色 撫で滑らか	長石 石 母 粒 石 英 粒	良好
4	深鉢胴部	44	淡黄茶色 磨消縄文RL	淡黄茶色 撫で滑らか	細石 砂 母 粒 雲 英 粒	良好
5	深鉢口縁部	24	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
6	深鉢口縁部	34	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
7	深鉢口縁部	27	灰黄色 縄文RL	灰黄色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
8	深鉢口縁部	25	黄褐色 縄文LR	黄褐色 撫で滑らか	細長 砂 母 粒 石 粒	良好
9	深鉢口縁部	21	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
10	深鉢口縁部	27	灰茶色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細長 砂 母 粒 石 粒	良好
11	深鉢口縁部	50	赤褐色、篋撫で滑 らか、縄文LR	赤褐色 篋撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
12	深鉢胴部	30	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
13	深鉢胴部	22	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
14	深鉢胴部	30	黒褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	石英粒、長石粒 金 雲 母 粒	良好
15	深鉢胴部	32	茶褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細金 砂 母 粒 雲 母 粒	良好
16	深鉢胴部	21	黄褐色 縄文LR	黄褐色 撫で滑らか	細 砂 母 粒	不良
17	深鉢胴部	50	灰黒色 撫で滑らか	灰黒色 撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
第81図 1	浅鉢口縁部	48	灰黒色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
2	浅鉢口縁部	48	灰黒色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
3	浅鉢口縁部	25	黒褐色 縄文LR	灰黄色 撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好

大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2区・A-3区) 表採土器観察表 (第17表)

図番号	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎 土			焼成
			外 面	内 面	細	砂	粒	
第81図4	浅鉢口縁部	22	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	不良
5	浅鉢口縁部	23	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 錠研磨	細金	砂雲母	粒粒	良好
6	浅鉢口縁部	38	黒褐色、縄文LR、 錠撫で	黒褐色 錠研磨	細金	砂雲母	粒粒	良好
7	浅鉢口縁部	22	暗灰茶色 錠研磨	暗灰茶色 錠研磨	細	砂	粒	良好
8	浅鉢胴部	21	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
9	浅鉢口縁部	38	黒褐色、縄文LR、 錠撫で	黒褐色 錠研磨	細金	砂雲母	粒粒	良好
10	浅鉢口縁部	21	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	長石	石英	粒粒	良好
11	注口土器口縁部 胴部	11 12	黄褐色 磨消縄文LR	灰黄褐色 撫で滑らか	長金	石雲母	粒粒	良好
12	浅鉢口縁部	23	灰茶色 磨消縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
13	浅鉢胴部	?	黒褐色 縄文RL	黒褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
14	浅鉢胴部	29	灰茶色 縄文LR	灰黄色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
15	深鉢口縁部	31	黄茶褐色、縄文LR、 斜撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	長金	石雲母	粒粒	良好
16	深鉢口縁部	28	灰茶色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
17	深鉢口縁部	28	暗茶褐色、縄文LR、 斜撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
18	深鉢口縁部	24	暗茶褐色、縄文LR、 斜撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
19	浅鉢口縁部	23	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	長金	石雲母	粒粒	良好
第82図1	深鉢口縁部	36.5	暗赤褐色 縄文RL	暗赤褐色 横撫で滑らか	細金	砂雲母	粒粒	良好
2	口縁部 深鉢胴部 器高	36.5 34.0 24.0	暗赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	金細	砂雲母	粒粒	良好
3	深鉢復元図	第82図2 に同じ						
第83図1	深鉢口縁部	36	黒褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好

大宮・宮崎遺跡発見時（A-2区・A-3区）表採土器観察表（第18表）

図番号	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
			外 面	内 面		
第83図2	深鉢胴部	27	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
3	深鉢胴部	27	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 金 雲 母 粒	良好
4	深鉢胴部	27	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
5	深鉢胴部	23	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	金 雲 母 粒 長 石 粒	良好
6	深鉢口縁部	38	淡黄茶色、縄文RL、 撫で滑らか	淡黄茶色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
7	深鉢口縁部	38	淡黄茶色、縄文RL、 縦撫で滑らか	淡黄茶色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
8	深鉢口縁部	33	黄褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
9	深鉢口縁部	21	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	黒 雲 母 粒 長 石 粒	良好
10	深鉢口縁部	24	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
11	深鉢口縁部	38	灰茶色、縄文RL、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長金 石 母 粒 雲 母 粒	良好
12	深鉢口縁部	28	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
13	深鉢口縁部	26	暗茶褐色 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
14	深鉢口縁部	38	淡黄茶色 横撫で滑らか	淡黄茶色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
15	深鉢口縁部	30	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
16	深鉢口縁部	32	黄褐色、縄文RL、 スス付着	黄褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒	良好
17	深鉢口縁部	20	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
18	深鉢口縁部	26	黒褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好
第84図1	深鉢口縁部	20	黄褐色 横撫で滑らか	灰黄茶色 横撫で滑らか	金 雲 母 粒 細 砂 母 粒	良好
2	深鉢口縁部	38	黄茶色 撫で滑らか	黄茶色 撫で滑らか	細 砂 母 粒	不良
3	深鉢口縁部	30	黒褐色、スス付 着、撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細 砂 母 粒 長 石 粒	良好

大宮・宮崎遺跡発見時（A-2区・A-3区）表探土器観察表（第19表）

図番号	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土			焼成
			外 面	内 面				
第84図4	深鉢口縁部	21	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
5	深鉢口縁部	19	赤褐色 縄文LR	黄色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
6	深鉢口縁部	30	灰黄茶色、スス付着、 縄文RL、撫で滑らか	灰黄茶色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
7	深鉢口縁部	23	黄茶色 撫で滑らか	黄灰茶色 撫で滑らか	細金	砂母	粒粒	不良
8	深鉢口縁部	23	灰白色 横撫で滑らか	灰白色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
9	深鉢頸部 胴部	38 36	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細黒	砂雲母	粒粒	良好
10	深鉢頸部	36	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
11	深鉢頸部 胴部	22	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
12	深鉢頸部	22	茶褐色 鋭研磨	茶褐色 鋭撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
13	深鉢胴部	35	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長細	石砂	粒粒	良好
第85図1	深鉢胴部	32	黄褐色 縄文LR	黄褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
2	深鉢胴部	26	黒褐色、スス付着、 縄文LR、撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細金	砂雲母	粒粒	良好
3	深鉢胴部	30	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
4	深鉢胴部	25	淡黄灰色 撫で滑らか	淡黄灰色 撫で滑らか	細	砂	粒	不良
5	深鉢胴部	22	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
6	深鉢胴部	21	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
7	深鉢胴部	21	黒褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
8	浅鉢口縁部	21	灰黄茶色 縄文LR	赤褐色 撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
9	浅鉢口縁部	14	灰茶色、スス付 着、撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
10	浅鉢口縁部	25	黄茶色 撫で滑らか	黄茶色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好

大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2区・A-3区) 表探土器観察表 (第20表)

図番号	器種及び破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
			外面	内面		
第85図11	深鉢口縁部	29	淡黄色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	深鉢口縁部	23	茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
13	深鉢胴部	27	黒褐色、スス付 着、縄文RL	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
14	深鉢胴部	27	黒褐色、スス付 着、縄文RL	黒褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
15	浅鉢口縁部	27	灰茶色 縄文RL	灰茶色 撫で滑らか	細黒雲母粒	良好
16	深鉢胴部	30	赤褐色 羽状縄文	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
17	深鉢口縁部	29	灰黄茶色 横撫で滑らか	黄赤褐色 横撫で滑らか	長金雲母粒	良好
第86図1	深鉢口縁部	30	灰茶色 横撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
2	深鉢口縁部	35	灰黄茶色 横撫で滑らか	灰黄茶色 横撫で滑らか	長金雲母粒	良好
3	深鉢口縁部	28	黄茶色 横撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	長金雲母粒	良好
4	深鉢口縁部	32	茶褐色 撫で滑らか	灰黄茶色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
5	深鉢口縁部	23	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	不良
6	深鉢口縁部	35	暗茶褐色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	長金雲母粒	良好
7	深鉢口縁部	27	淡黄茶色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
8	深鉢口縁部	29	灰茶色、スス付 着、撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
9	深鉢口縁部	21	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	不良
10	深鉢口縁部	35	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	長金雲母粒	良好
11	浅鉢口縁部	27	灰白茶色 横位浅条痕	灰白茶色 横位浅条痕	細砂粒	良好
12	浅鉢口縁部	26	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
13	浅鉢口縁部	21	淡黄茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2区・A-3区) 表採土器観察表 (第21表)

図番号	器種及び破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
			外面	内面		
第86図14	浅鉢口縁部	21	黒褐色 撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
15	浅鉢口縁部	23	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂粒	良好
16	注口土器口縁部	18	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
第87図1	底部	7.5	淡黄茶色 撫で滑らか	淡黄茶色 撫で滑らか	長金雲母粒	良好
2	底部	6.0	灰白色 撫で滑らか	灰黄茶色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
3	底部	7.0	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
4	底部	4.5	灰黄色 撫で滑らか	灰黄色 撫で滑らか	細砂粒	良好
5	底部	6.0	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	長金雲母粒	不良

大宮・宮崎遺跡発見時 (A-2区・A-3区) 表採石器観察表 (第22表)

図番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第88図1	石材核	17.7	6.0	8.0	1200	頁岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残し剥離面鋭利
2	石材核	14.6	10.5	6.4	1200	頁岩	青黒色、両面に自然面残し剥離面鋭利
3	石材核	15.0	11.0	7.7	1250	頁岩	青黒色、自然面を両面に残し剥離面鋭利
第89図1	石材核	13.8	9.6	5.4	740	頁岩	青黒色、両面に自然面残し剥離面鋭利
2	石材核	11.3	9.8	4.2	540	頁岩	青黒色、両面に自然面幅広く残し剥離面鋭利
3	叩石	13.0	8.3	5.4	690	砂岩	黄茶色、両面に凹む叩痕残す。
4	石材核	11.4	8.2	4.5	490	頁岩	青黒色、両面に自然面残し剥離面鋭利
第90図1	スクレイパー	6.1	9.3	1.5	80	頁岩	大型扁平、横長剥片素材、細密な刃部を両面加工にて作出
2	スクレイパー	6.2	10.5	2.0	130	頁岩	大型内厚、横長剥片素材、両面加工にて刃部作出

大宮・宮崎遺跡発見時（A-2区・A-3区）表探石器観察表（第23表）

図番号	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第90図3	スクレイパー	5.8	7.8	1.4	55.60	頁岩	肉厚、不定形剥片素材、両面加工で刃部作出
4	スクレイパー	5.0	5.5	1.5	28.67	頁岩	縦長剥片素材、完形
5	スクレイパー	7.7	3.9	1.8	50.0	頁岩	肉厚、不定形剥片素材、三面に刃部形成
6	打製石斧	11.9	4.6	2.5	179.70	頁岩	長楕円形礫素材、刃部のみ作出、他自然面残す。
7	叩石	5.4	4.6	3.55	110	砂岩	小型円礫素材、側面に激しい使用痕残す。
8	石棒	7.8	2.9	2.2	70.0	結晶片岩	頭部残片、火に焼け赤茶褐色に変色。
9	石錘	5.1	5.1	2.3	90	砂岩	完形
10	尖頭状石器	3.3	3.0	0.7	7.5	頁岩	肉厚縦長剥片素材、片面に第一次剥離面残す
11	石鎌	1.8	1.2	0.3	0.3	頁岩	完形
12	石鎌	1.8	1.7	0.2	0.4	サヌカイト	先端部欠損

石棒（第90図8）

結晶片石製で、細身、小型の石棒で中央部から先端にかけて部分を欠損する頭部の残片である。全面磨製で表面は鈍い光沢を持つが、これは火熱を受け全面赤茶褐色に変色している。

尖頭状石器（第90図10）

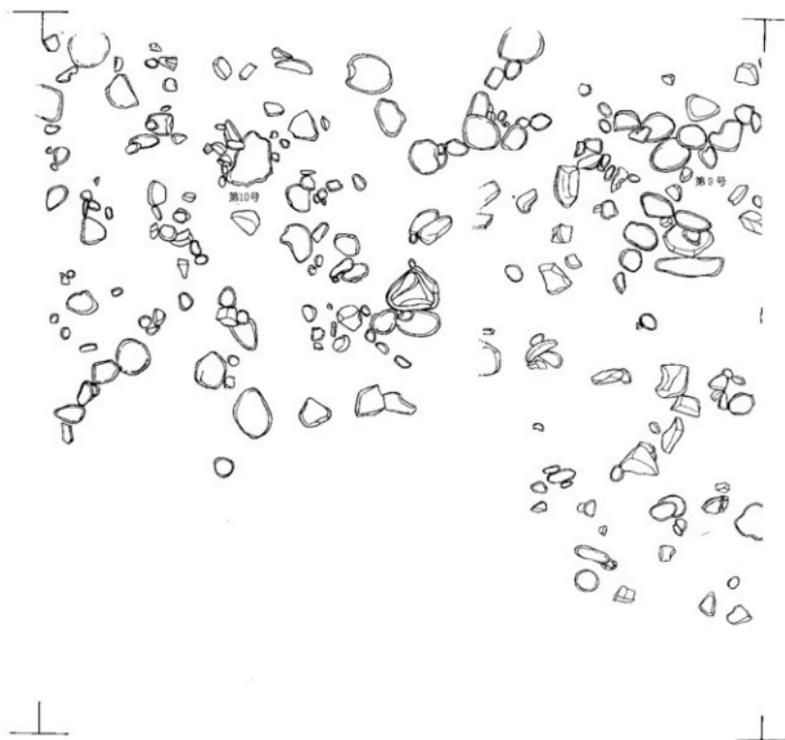
1点で、押圧剥離による加工は大ぶりで、しかも加工は片面のみで一方の面は第一次剥離面をそのまま幅広く残す。断面は凸レンズ状を呈し、両側縁と基部共に緩く外湾し、全体形は杏仁形をなす。

石鎌（第90図11・12）

二等辺三角形を呈し、押圧剥離による加工は比較的入念で、基部は共に山形状に深く抉られ、長い脚部は緩く内湾し、脚端は尖り鋭利である。なお（12）は先端部を欠損している。

（6）A-4区の遺構と出土遺物

グリッド北側に第9号配石の一部が掛り、南側に第10号配石が検出されている。遺物の大部分も配石内、またはその周辺に集中し出土をみる（第91図）。



第91図 A-4区出土遺物平面、垂直分布実測図

第10号配石（第92図）

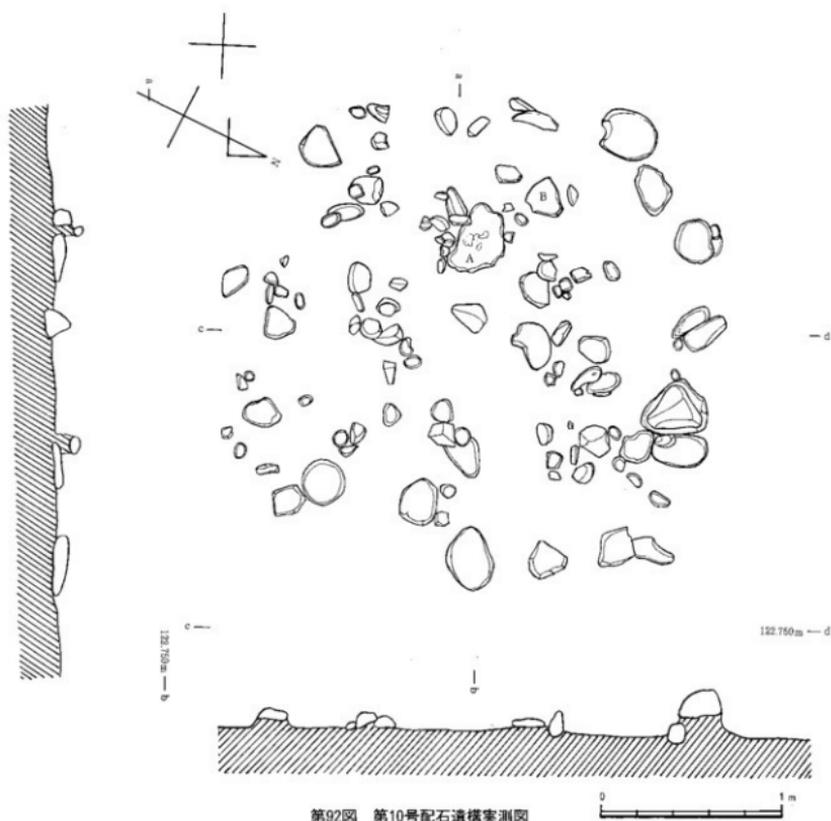
直径約2.8mで環状を呈し、外周を囲む自然石は直径25cm～30cm前後の円形、楕円形を呈する扁平礫約20個で取り巻かれている。ただし、これらの礫は密に並べられているのではなく、間隔を開けて配置され、全体形も厳密には不整形形を呈する。20cm前後の礫約40個も内部に散在し、中央よ



第91図 A-4区出土遺物平面、垂直分布実測図

第10号配石 (第92図)

直径約2.8mで環状を呈し、外周を囲む自然石は直径25cm～30cm前後の円形、楕円形を呈する扁平礫約20個で取り巻かれている。ただし、これらの礫は密に並べられているのではなく、間隔を開けて配置され、全体形も厳密には不整形円形を呈する。20cm前後の礫約40個も内部に散在し、中央よ



第92図 第10号配石遺構実測図

り幾分か西方に寄った個所に本配石中、最大の長径約40cm、最大幅30cmの扁平礫（A）が配置されている。この石面中央は火に焼け赤褐色を呈し、その周辺は黒ずみ、部分的には火熱によって表面が薄く剥落している。すぐ北側に接する礫（B）も、（A）礫同様、火熱を受け表面が赤褐色に変色している。他に本配石内からは、直径3cm～5cm前後の卵形をなすもの、球形となる砂岩礫が多く出土し注目される。

本配石内からの遺物は土器、石器共に多く、散在的にはあるが、ほぼ満遍なく分布出土している。まず土器では第4D類、第5A・B・C類が最も多く、他に少数ではあるが第4B類や第4C類がみられる。また、中には第4A類や第6B類土器の出土も確認され時期幅を持つ内容となっている。石器は、それぞれ1～2点ではあるが石鏃、石錘、叩石、石材核などの出土が明らかである。

土器 (第93図～第97図)

第4 A類 (第93図1)

1点の出土で深鉢の胴部片で、胴部は張り強く器壁はやや厚い。外面には2条単位の沈線で横位に描き、その下位に沈曲線が斜めに下り、沈線間には幅広い縄文RLが磨削縄文手法によって施文されている。

第4 B類 (第93図2～4・6、第94図5)

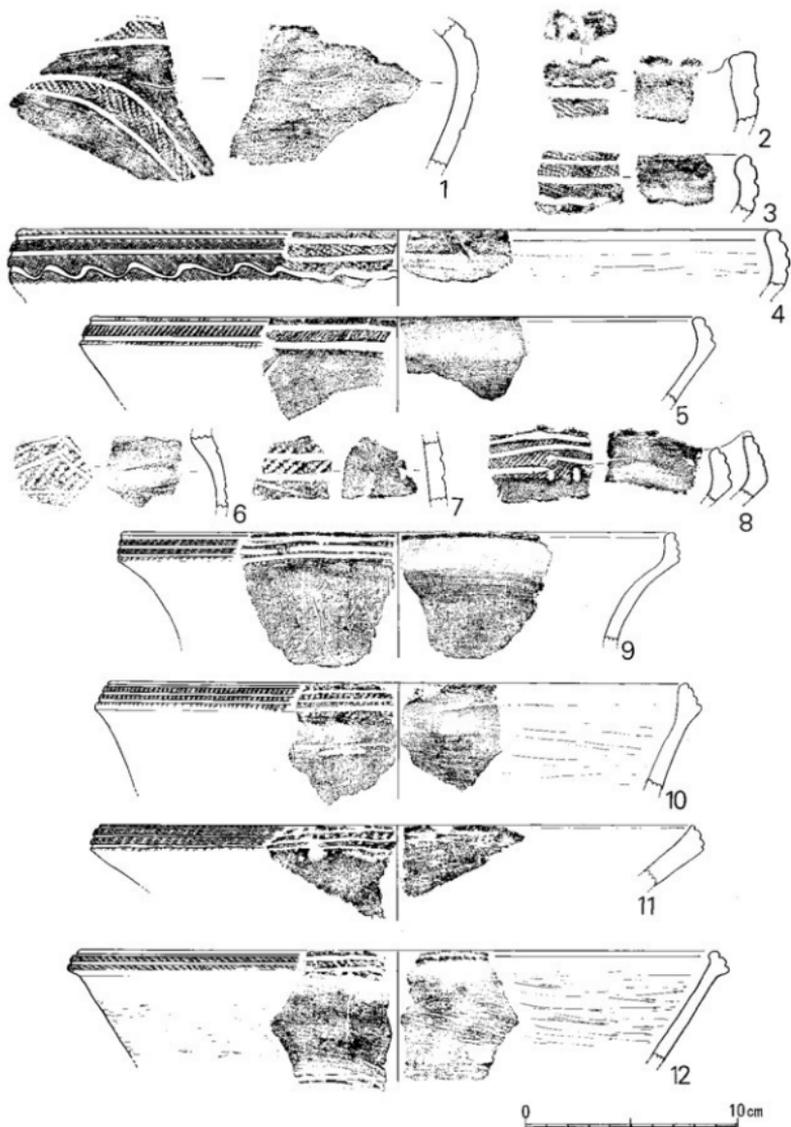
深鉢と浅鉢がみられ、その口縁と胴部片である。(2)は波状口縁をなす波頂部片で、分厚な器壁は内傾気みに立ち上がり、端部には「∞」字状を呈する粘土紐貼付文が施されている。外面には縄文RLとなる面に横走る1条の太い沈線が巡らされている。(3・4)は平口縁をなすもので、口縁は緩く「く」字状に内折し、端部は少し肥厚させ丸みをなす。外面には口縁に平行し2条の沈線が巡り、その直下に1条沈線で波状文を描き文様構成している。共に縄文はRLである。(6)は胴上部片で、外面には縄文LRとなる面に本類で特徴とする逆三角形文を描く文様の一部が残る。第94図(5)の浅鉢は口縁が緩く内湾気みに立ち上がり、外面には縄文LRが施され、その面には上段3条、下段2条単位の平行沈線を巡らし、その中間を2条単位の沈線を斜行させている。この斜行沈線は、逆三角形文を描いていたものと思われる。

第4 C類 (第93図5・7・8)

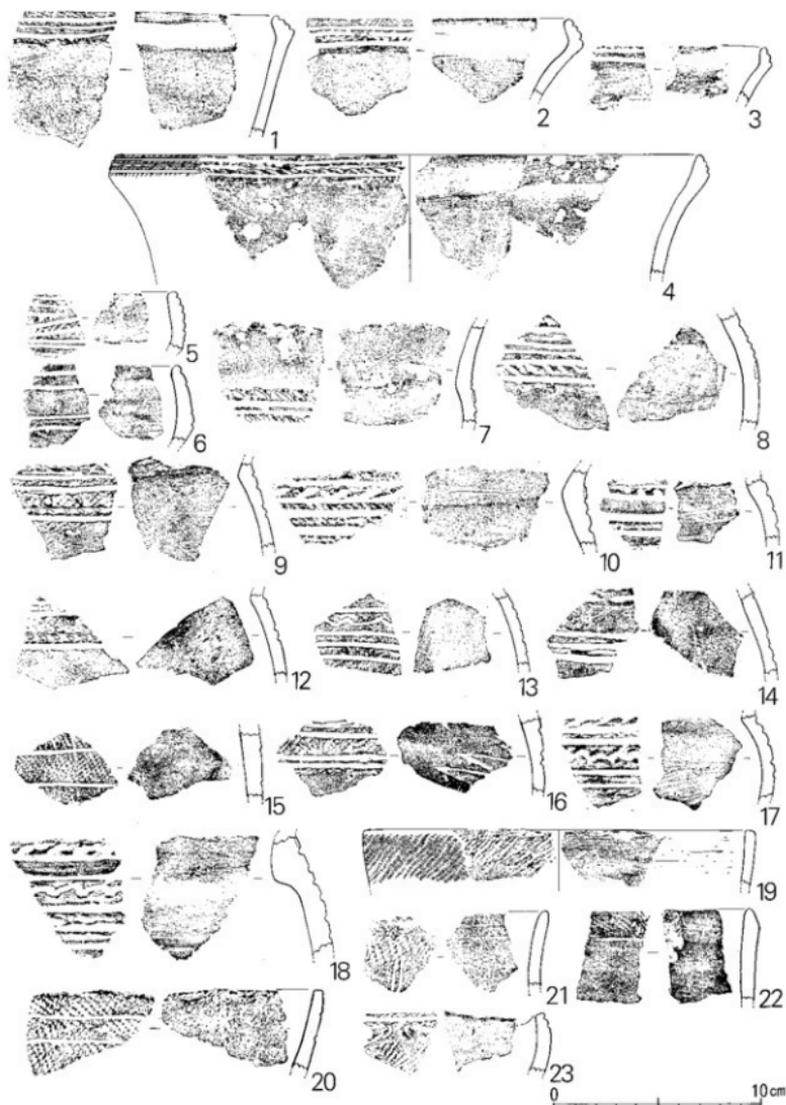
絶で深鉢で、平口縁(5)は長い頸部から緩く「く」字状に内折する口縁部へと移行し、その口縁は内傾気みに立ち上がり端部は丸みをなす。外面には縄文LRとなる面に直接筋の太い沈線2条が巡る。(8)は緩い波状口縁を呈するもので、波頂部先端をわずかに破損している。器壁は「く」字状に内折し、やや長めに立ち上がり、端部は肉厚く丸みをなす。外面は縄文LRを地文とし、その面に直接口縁に平行する2条沈線を巡らし、その下位に1条沈線を描き、波頂部直下で沈線の末端に小さな縦位の短直線を左右対向させて文様集約部を形成する。(7)は胴部片で、縄文LRとなる面に2条の平行横直線を描き、その沈線に接して傾斜のやや緩い斜行沈線が描かれている。この沈線は逆三角形文を描いていたものと思われる。

第4 D類 (第93図9～12、第94図1～4・6～18)

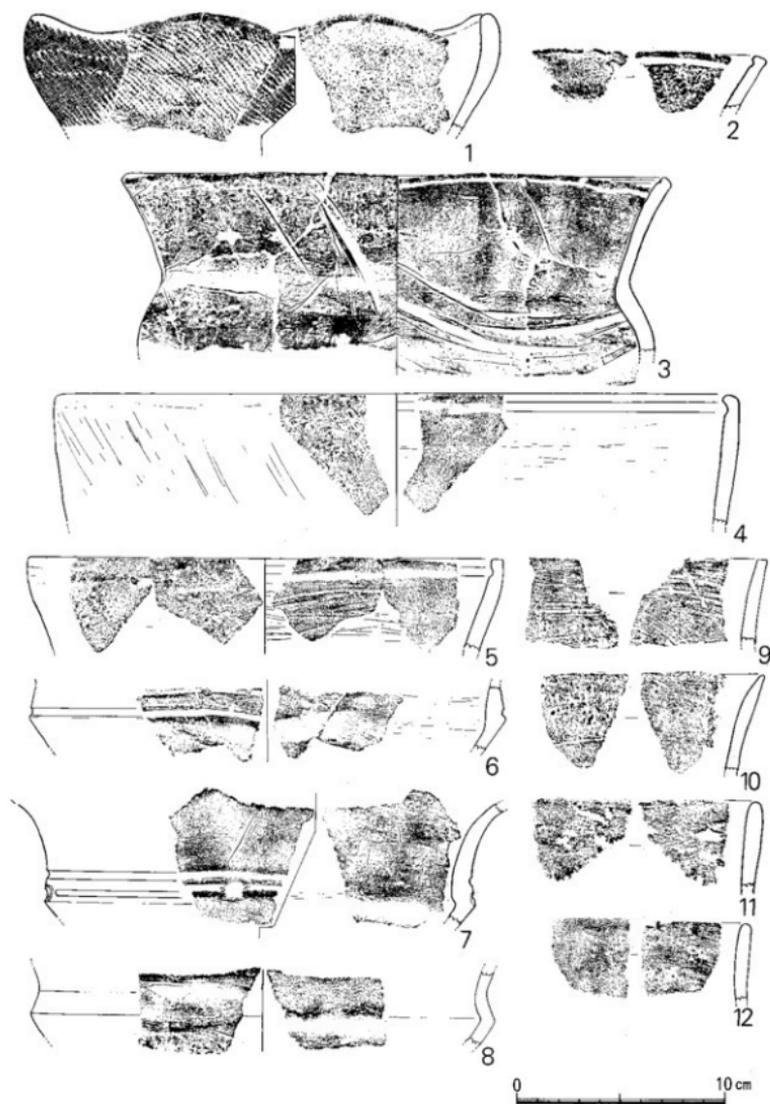
本地区主体の土器で、深鉢と浅鉢がみられる。深鉢は絶で平口縁で、長い頸部は弓状に外反するもの、直立気みに延び外傾さすものなどで、「く」字状に内折さす口縁は立ち上がり短く寸詰りとなり退化萎縮を示す。胴部は球状に膨らむもの、張りの弱いものなどがある。文様帯は口縁と胴上半部に持ち、口縁部では外面に2～3条の平行横直線を縄文を地文とする面に直接描く。それらの沈線間に小さな刺突文を対向さすもの、斜行刻目文を連続施文するなどの文様を見る。本地区出土資料の口縁外面には、斜行刻目文を施文する手法のものが少なく異例である。胴部第94図(7～18)は平行横直線4条を原則とするが、本資料中の(8・18)は5条巡らしている。胴部文様帯の中に斜行刻目文を連続施文するものも本類土器の特徴で(7・8・11・17・18)にはそれが施文されている。中でも(13・17・18)は共に、平行横直線の中に1条を波状に描いている。(9・12)は沈線の溝の中に穀粒状の列点刺突文が、(14)は横に引っぱり気みの列点文が施されている。口縁、胴部共に、地文とする縄文の撚りはRL、LRをみるものの、その数は幾分か後者が勝る。



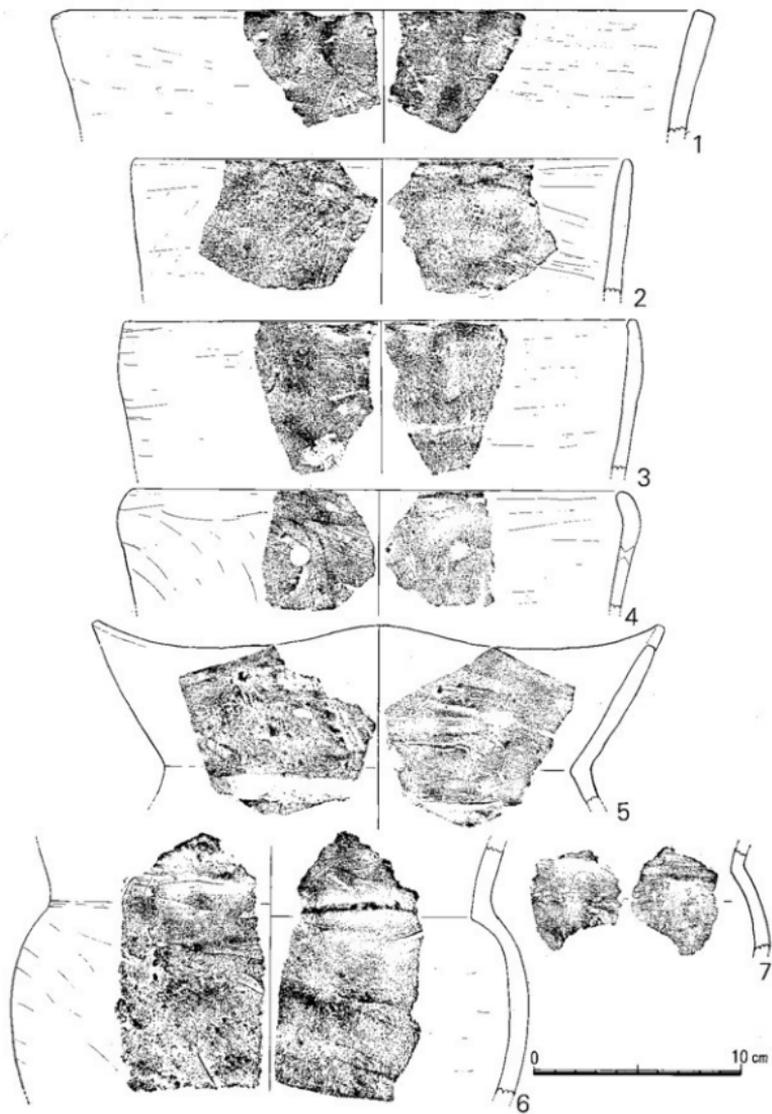
第93図 大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器



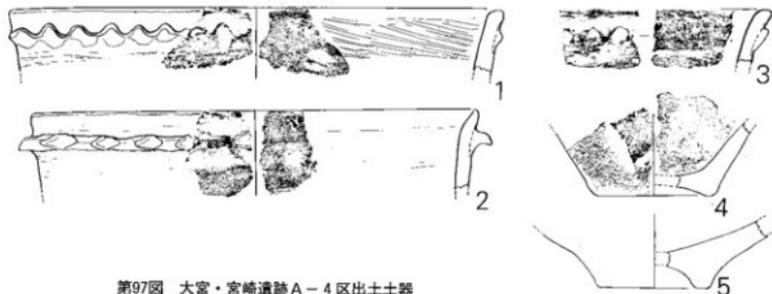
第94图 大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器



第95图 大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器



第96图 大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器



第97図 大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器

浅鉢（第94図6）、1点で口縁は緩く「く」字状に内曲し、端部は尖り気みに肉薄く丸みを呈する。外面に縄文はなく、無文地に2条単位の沈線を口縁に平行させ上下2段に描く。

第4E類（第94図19～23、第95図1）

深鉢、浅鉢がみられ、平口縁と波状口縁の2種をみる。深鉢平口縁（第94図19・21・22）は直立気みに外反するもの、直立するものなどで、端部は尖り気みとなるもの、丸くおさまるものである。口縁外面の縄文は（19）LR、（21・22）はRLで、（22）の縄文帯は幅狭い。

浅鉢（第94図20・23、第95図1）は平口縁と波状口縁とがある。平口縁（第94図20）は内湾気みに外傾し、端部は水平に篋削りされ平坦面を作出する。外面は幅広い縄文RL帯を持ち、その縄文地に2条の平行横直線を間隔を広く開け巡らしている。同図（23）は緩い波状口縁を呈し、器壁は緩く内湾し、外面には縄文LRを施し、その面に1条沈線を口縁に平行させ山形に1条沈線で描いたその末端に「C」字状文を左右に対向させ「〇C」文を形成する。第95図（1）も波状口縁を呈し、器壁は緩く内曲させ、口縁外側を若干肥厚させ、外面には縄文RLを幅広く施文している。

第5A類（第95図2～5）

総て平口縁を呈する深鉢である。（3）は口縁から胴上部をとどめ、長く延びる頸部は外傾し、端部は篋削でされ平坦面を持つ。これの内面には1条の沈線が口縁に平行し巡り、胴部は丸く膨脹させている。（2～4）は総て口縁部片で、（2）の器壁は強く外傾し、（4）は直立気みに立ち上がり、（5）は外傾するものの端部近くで緩く内湾させている。端部は（5）が平坦に仕上げられ、（2・4）は共に丸みを持ち、内面には口縁に平行する1条の凹線文が描かれている。

第5B類（第95図6・7）

2点は共に浅鉢で、頸部は弓状に外反し口縁は欠損している。胴部は稜がつき屈曲するもので、外面の屈曲部上側に（6）は1条、（7）は2条の凹線文が施文され、後者の凹線文間には巻貝による押点文が施されている。

第5C類（第95図8～12、第96図1～7）

深鉢を主体とし浅鉢1点が含まれている。深鉢は第96図（5）が波状口縁を呈し、他は総て平口縁である。それらの口縁は直立、内湾気みに直立、外傾、外反するものなどで、その端部は平坦面を持つもの、丸くおさまるもの、尖り気みとなるものなどである。胴部は第96（6・7）にみられるように丸く膨脹させている。

第6B類（第97図1～3）

3点は深鉢の口縁部片である。口縁は総て緩く外反し、その端部は(1・3)が丸く作出され、(2)は尖り気みに作られている。口縁外面にみる突帯は端部より下がった位置に1条貼付され、(1)は背の低い断面三角形、(2)は背が高く、(3)は下側から上方へと圧せられて背の低くなった突帯となっている。突帯上面にみる刻目はどれも太く深く鮮明に施されている。

底部 (第97図4・5)

底径5cm前後を測り、共に外底は弧状を描き上がる上げ底を呈する。

石器 (第98図～第100図)

石材核 (第98図1～3・5、第99図1)

頁岩の自然礫を素材とし、総ての両面、または片面の一部に自然面を残している。第98図(1)は小型の楕円形礫を素材とし、両側縁から集中的に剥片剥離がなされ、小型、横長の剥片剥離痕を両面にとどめている。同図(2)は長軸一辺に剥片剥離が集中し、両面にやや大型の縦長剥片剥離痕を残している。共に剥片剥離は交互剥離され、側面にはジグザグ状となった鋭利な稜線を形成している。同図(3)は楕円形礫の長軸一端に粗く剥片剥離が行われたのみで、原礫面を大部分にとどめている。同図(5)は剥片剥離が進行し、身は痩せ細り扁平化している。第99図(1)は、不整形三角形をなす三辺に剥片剥離が及び、大型の横長剥片を剥離した剥離痕をとどめている。

打製石斧 (第98図4)

やや幅広、寸詰まりで全体形は撥形を呈し、周辺部には打ち欠きによる調整痕を残す。特に、その打調は片面に入念で、一方の面は中央部に原礫面を幅広くとどめている。

叩石 (第99図2・3)

砂岩製で楕円形礫を素材とする。共に使用痕は側面に集中し、アバタ状痕をとどめるが、(2)は片面に刃傷状の痕跡を残している。

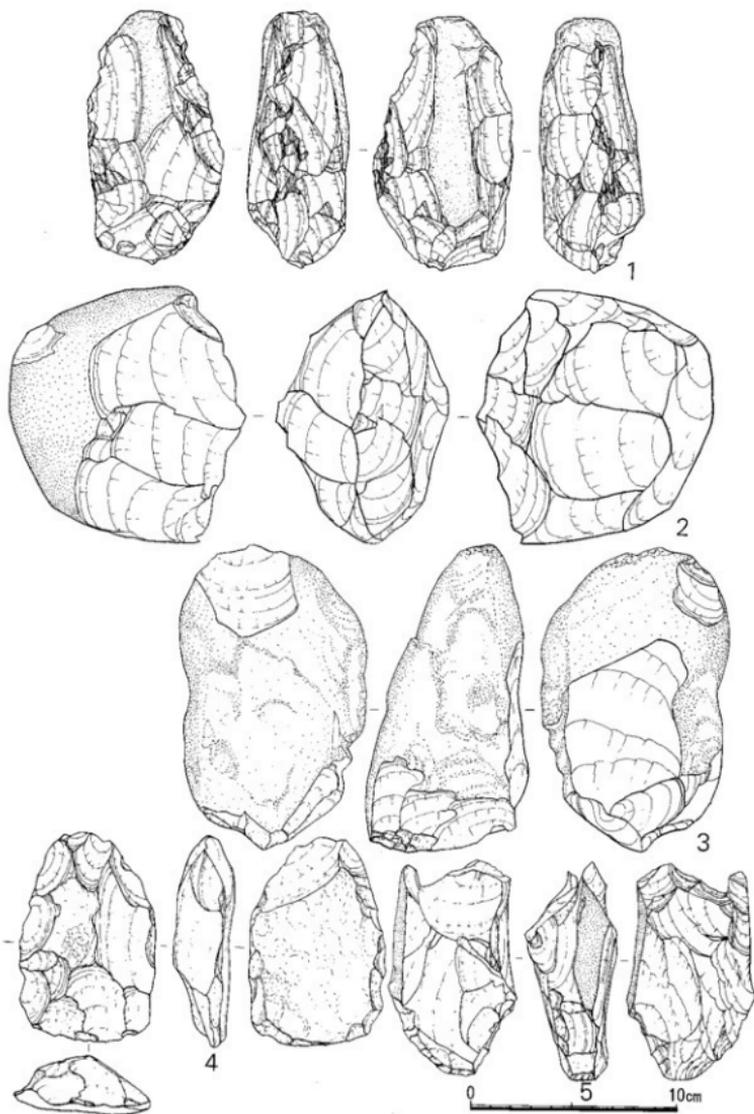
スクレイパー (第99図4～7、第100図6)

第99図(4)は大型のスクレイパーで、横長剥片を素材とし、長軸一辺の中央部に長さ7cmにわたり押圧剥離を両面より加え鋭利な刃部を作出している。なお、この片面は自然面をそのまま残している。同図(5・6)は、三角形をなす横長剥片素材で、その長軸一辺に押圧剥離を(5)は粗く、(6)は密に加え直線的な刃部を作出している。同図(7)も横長剥片素材であるが、これは分厚く、刃部は長軸一辺に押圧剥離を片面より粗く加え作出している。第100図(6)はサマカイトの横長剥片素材で、長軸の一辺に両面より細密に押圧剥離を加え緩く外湾する鋭利な刃部を作出している。

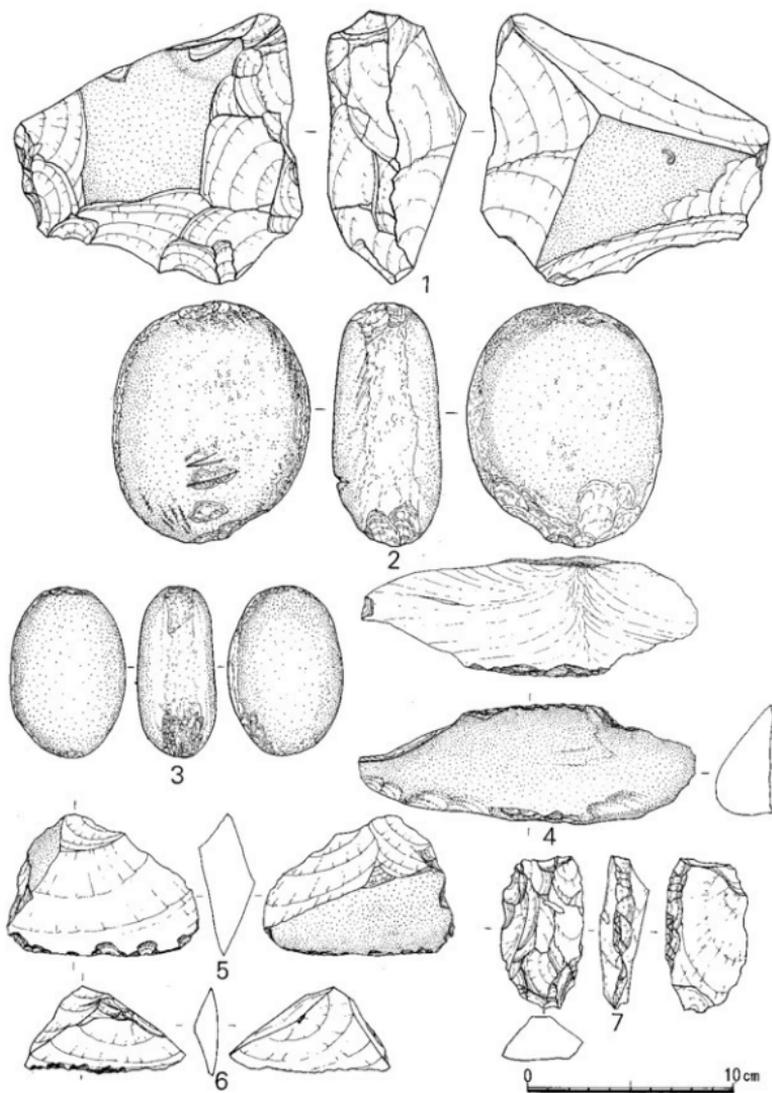
石鏃 (第100図1～5)

5点の石鏃は形態、大きさなど変化に富む。特徴から2種に大別できる。

- ・基部に抉入を持つ二等辺三角形鏃 (第100図1・2)。(1)は先端部を欠損するが、本来の長さは3cmほどのものとなる。押圧剥離はやや粗いが両面にわたりなされ、基部は山形状に深く抉られ左右に開く脚部は直線的に延び脚端は尖る。(2)は1.5cm前後の小型鏃で、完形品。押圧剥離



第98図 大宮・宮崎遺跡A-4区出土石器



第99图 大宮・宮崎遺跡A-4区出土石器

大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器観察表(第24表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第93図1	6	深鉢胴部	47	灰白色、窳研磨、縄文RL	灰白色 窳撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
2	表採	深鉢口縁部	23	黄褐色 縄文RL	黄褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	38	黒褐色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
4	134	深鉢口縁部	36	黄赤褐色 縄文RL	黄赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
5	162	深鉢口縁部	29	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
6	96	深鉢胴部	27	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
7	ベルト内	深鉢胴部	23	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細金雲母	粒粒 良好
8	ベルト内	深鉢口縁部	21	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
9	142	深鉢口縁部	26	黄赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黄赤褐色 横撫で滑らか	細砂	粒 良好
10	122	深鉢口縁部	28	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	長金雲母	粒粒 良好
11	53	深鉢口縁部	28	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	長金雲母	粒粒 不良
12	56	深鉢口縁部	30	暗茶褐色、縄文RL、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂	粒 良好
第94図1	表採	深鉢口縁部	27	暗赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	細砂	粒 良好
2	表採	深鉢口縁部	23	暗赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	細金雲母	粒粒 良好
3	表採	深鉢口縁部	23	赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂	粒 不良
4	73	深鉢口縁部	28	黄灰茶色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	長細砂	粒粒 不良
5	119	浅鉢口縁部	21	黒褐色 縄文LR	黒褐色 窳研磨	細砂	粒 良好
6	ベルト内	浅鉢口縁部	21	灰白色 横撫で滑らか	灰白色 横撫で滑らか	細砂	粒 良好
7	表採	深鉢頸部 胴部	36	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒 不良

大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器観察表(第25表)

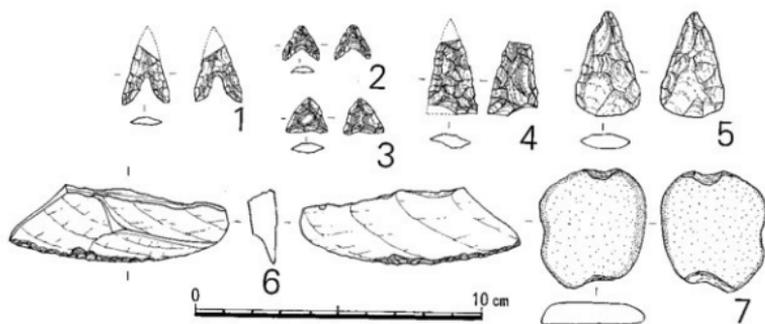
図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第94図8	表採	深鉢胴部	21	暗茶褐色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	86	深鉢胴部	29	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	62	深鉢胴部	42	淡黄色 縄文RL	淡黄色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
11	表採	深鉢胴部	25	黄赤褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	135	深鉢胴部	22	黒褐色 縄文RL	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	61	深鉢胴部	28	黄褐色 縄文LR	黄褐色 縦撫で滑らか	細砂粒	良好
14	ベルト内	深鉢胴部	27	茶褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
15	ベルト内	深鉢胴部	23	赤褐色 縄文RL	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
16	ベルト内	深鉢胴部	25	黒褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
17	120	深鉢胴部	18	暗茶褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
18	20	深鉢胴部	33	灰茶色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 黒雲母粒	良好
19	3	深鉢胴部	19	灰茶色 縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
20	ベルト内	深鉢口縁部	28	灰茶色 縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
21	77	深鉢口縁部	26	灰茶色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
22	ベルト内	深鉢口縁部	27	黒褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
23	表採	浅鉢口縁部	30	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第95図1	75	深鉢口縁部	23	灰黒色 縄文RL	灰黒色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	ベルト内	深鉢口縁部	24	白灰色 横撫で滑らか	黒灰茶色 横撫で滑らか	大粒砂	良好
3	64	深鉢口縁部 胴部	26	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	13	深鉢口縁部	33	黒褐色、スス付着、 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-4区出土土器観察表(第26表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第95図5	4	深鉢口縁部	23	黒褐色 横撫で滑らか	灰白色 横撫で滑らか	細長 砂粒	良好
6	133	浅鉢口縁部	23	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細黒雲母 砂粒	良好
7	1	深鉢頸部 胴部	21	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細長 砂粒	良好
8	2	浅鉢胴部	22.5	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	76	浅鉢口縁部	23	黒褐色、スス付着、横位条痕	黒褐色 横位条痕	細砂粒	良好
10	18	深鉢口縁部	24	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
11	66	深鉢口縁部	25	茶褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細金雲母 砂粒	良好
12	77	深鉢口縁部	26	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第96図1	128	深鉢口縁部	32	茶褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細金雲母 砂粒	良好
2	99	深鉢口縁部	99	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細長 砂粒	良好
3	129	深鉢口縁部	25	灰茶色 横撫で滑らか	灰白色 横撫で滑らか	細砂粒	不良
4	141	浅鉢口縁部	24	灰茶色、スス付着、横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
5	74	深鉢口縁部	28	赤褐色、スス付着、横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長 砂粒	良好
6	54	深鉢胴部	25	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	18	深鉢胴部	28	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂粒	良好
第97図1	87	深鉢口縁部	23	灰白色 横撫で滑らか	灰色、斜行撫で滑らか	細長 砂粒	良好
2	19	深鉢口縁部	20	淡白黄色 横撫で滑らか	淡白黄色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	31	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	118	底部	6	赤褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細長 砂粒	良好
5	68	底部	5	赤褐色 横撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細長 砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-4区出土石器観察表(第27表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第98図1	42	石材核	12.3	6.6	14.8	450	頁岩	青黒色、両面中央に自然面残す
2	表採	石材核	12.4	11.5	8.3	1190	頁岩	灰黒色、片面の一部に自然面残す
3	103	石材核	14.8	9.0	7.8	1270	頁岩	青黒色、両面に自然面幅広く残す
4	表採	打製石斧	10	6.5	2.8	210	頁岩	灰黒色、片面に幅広く自然面残す
5	135	石材核	10.5	5.0	4.5	280	頁岩	青黒色、両側面に自然面残す
第99図1	表採	石材核	13.5	13.4	6.5	1200	頁岩	灰黒色、両面中央に自然面残す
2	106	叩石	11.7	9.5	5.2	760	砂岩	黄茶色、側面に使用痕顯著
3	表採	叩石	8.2	5.5	3.7	250	砂岩	黄茶色、側面に使用痕残す
4	表採	スクレイパー	10.3	5.8	2.6	240	頁岩	青黒色、縦長剥片、片面全面に自然面残す
5	表採	スクレイパー	9.2	6.8	2.4	120	頁岩	青黒色、肉厚横長剥片素材
6	表採	スクレイパー	7.7	3.85	1.1	30	頁岩	青黒色、横長不定形剥片素材
7	表採	スクレイパー	7.3	4.0	2.0	60	頁岩	青黒色、肉厚横長剥片素材
第100図1	80	石鏃	2.1	1.6	0.2	0.5	頁岩	灰黒色、先端部欠損
2	79	石鏃	1.3	1.3	0.2	0.2	サスカイト	灰黒色、小型二等辺三角形鏃
3	表採	石鏃	1.4	1.4	0.3	0.4	サスカイト	小型二等辺三角形鏃、粗製
4	69	石鏃	2.6	1.7	0.4	1.7	サスカイト	灰黒色、先端、片欠損、大型
5	81	石鏃	3.7	2.2	0.5	4.0	頁岩	完形、大型二等辺三角形鏃
6	表採	スクレイパー	7.7	2.5	0.9	20	サスカイト	灰黒色、縦長剥片素材
7	表採	石鏃	4.1	3.8	0.8	20	砂岩	扁平自然面剥片素材



第100図 大宮・宮崎遺跡A-4区出土石器

による加工は両面に及び、基部の抉入は山形状を呈しやや浅い。

・基部に抉入を持たぬもの(第100図3~5)。(3)は1.5cm前後の小型三角形鏃で、押圧剥離による加工は雑で、形態もゆがみがあり全体的に粗製である。(4)は先端部を欠損するが、復元形は3.4cmの長さを測る大型二等辺三角形鏃となる。基部は直線的に調整されている。(5)も長さ3.5cmを測る大型二等辺三角形鏃で、これの基部は外に緩く膨らんでいる。押圧剥離による加工は粗く全体的に粗雑である。

石錘(第100図7)

砂岩の扁平礫を素材とし、長軸両端部に打ち欠きを加え、浅い凹みを作出し礫石錘としている。

(7) A-5区の出土遺物

本地区には配石遺構は検出されなかった。遺物は、本地区の西側に集中し、土器、石器共にみるものの、その量はあまり多くはない(第101図)。石器には良好な石皿と磨石の出土がある。

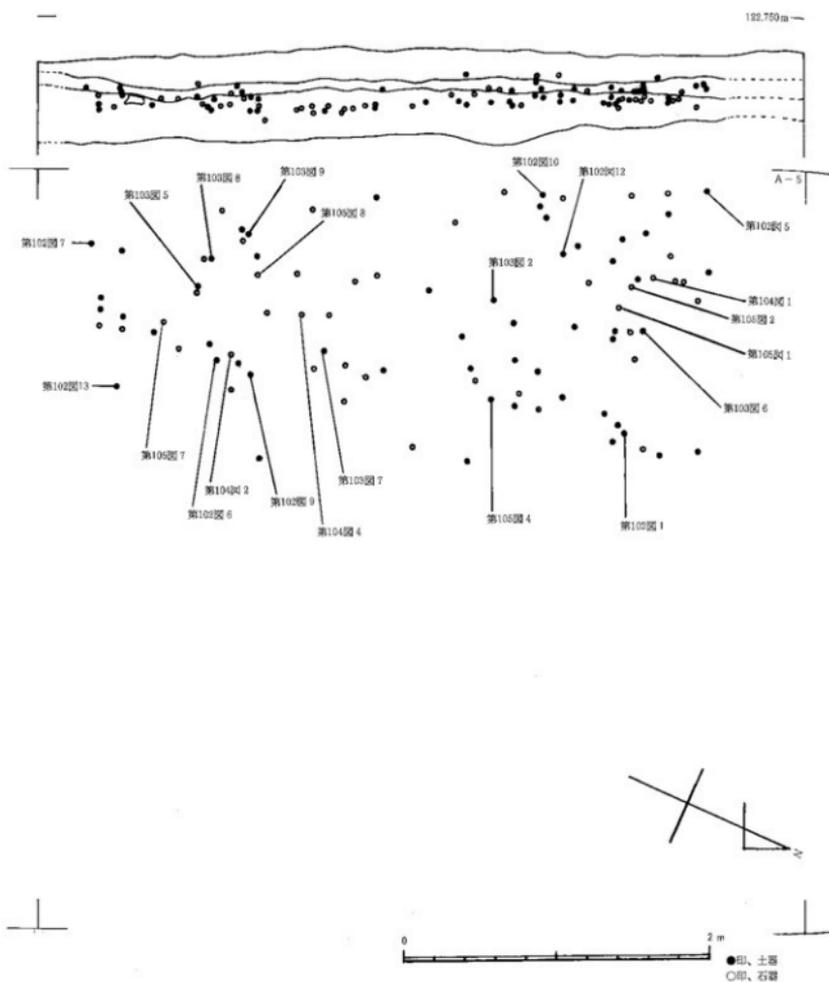
土器(第102図~第103図)

第4A類(第102図1)

深鉢の胴部片で、胴部は球状に膨張し、外面には2条単位の沈線で幅広い縄文帯が磨消縄文手法によって描出されている。

第4B類(第102図2~5)

深鉢と浅鉢がある。深鉢(第102図2~4)は、口縁部片と胴部片で、口縁部(2・3)は弓状に外反する頸部から緩く「く」字状に内折さす口縁へと移行する。口縁の立ち上がりは長く、その端部は丸みを持ち幾分か肥厚させている。(2)は瘤状突起を持ち、その外面に2条の短直線を垂下させ、左右には口縁に平行する2条沈線が縄文LRとなる縄文地に直接描かれている。(3)は平口縁で、外面には縄文RLとなる面に直接2条の平行横直線と1条を波状に描き文様構成する。胴部(4)は緩く膨らみ、外面には縄文LRが施され、その面に2条の平行横直線が引かれ、2条沈線に接して「の」字状文を垂下させている。浅鉢(5)は、口縁部片で端部をわずか欠損してい

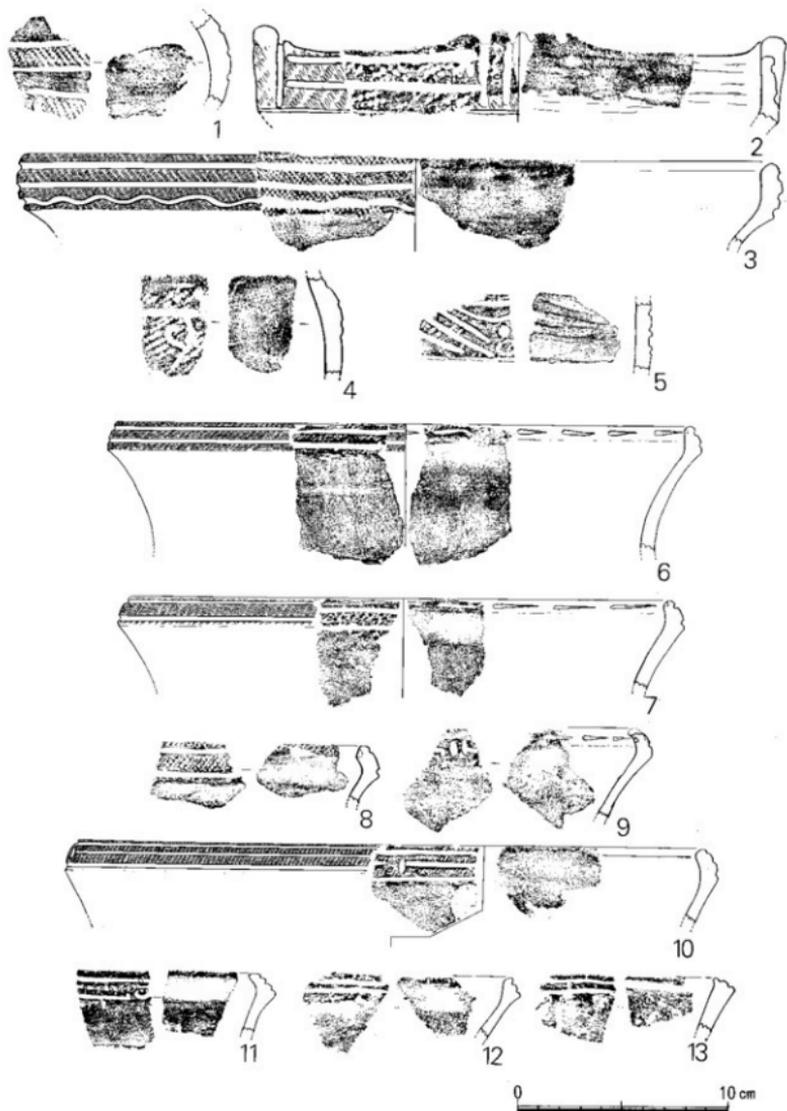


第101図 A-5区出土遺物平面、垂直分布実測図

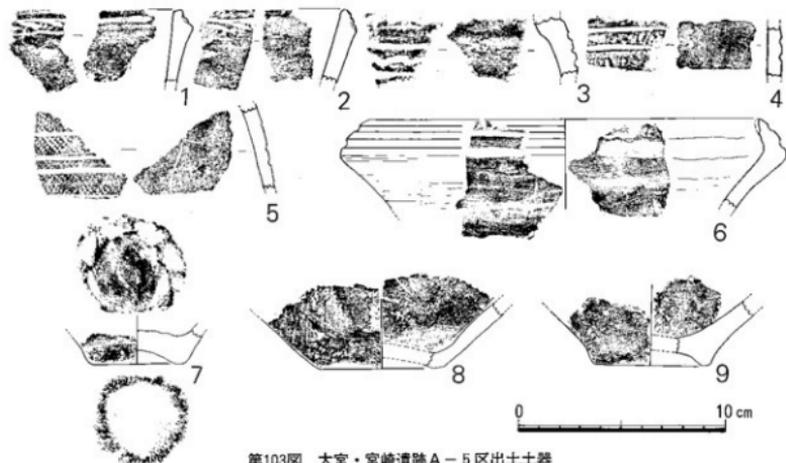
る。外面には縄文LRとなる地文に4条単位の沈線で逆三角形文が、その逆三角形文の中央に直径0.5cmの円形刺突文が施される。

第4 C類 (第102図6~10)

絶て平口縁となる口縁部片で、口縁は緩く「く」字状に内折させ、頸部は長く弓状に外反さす。



第102图 大宮・宮崎遺跡A-5区出土土器



第103図 大宮・宮崎遺跡A-5区出土土器

口縁の立ち上がりは先の第4 B類に比べやや萎縮を示し短くなるが、その端部は若干肥厚させ丸みをなす。(6~8)の口縁外面に施される縄文はLRで、その縄文地に直接2条単位の沈線が口縁に平行し描かれ、口縁内面にも押し引き状の刺突文が連続施文されている。(9・10)も口縁外面の縄文はLRとなり、その面に両者は2~3条の平行横直線を描き、(9)は沈線の末端に縦位の短直線を3条並べ文様集約部を形成し、(10)は1条の短直線を描く。なお(9)は口縁内面に押し引き状の刺突文を施している。

第4 D類 (第102図11~13、第103図1~5)

深鉢の口縁と胴部片である。頸部は外反、外傾させ、「く」字状に内折さす口縁の立ち上がりは萎縮退化し小さく寸詰まりとなり、その端部は尖り気みとなる。口縁外面には2~3条単位の沈線が描かれ沈線間に斜行刻目文を連続施文するもの(第103図1・2)、2条沈線のもの(第102図12・13)、3条沈線の中央の溝の中に穀粒状の列点刺突文を施し、小さく萎縮した短直線と「C」字文を描き集約文を形成する(第102図11)などをみる。胴部は上半部に文様帯を持ち、縄文を地文とする面に直接平行横直線を描く(4・5)。中には平行横直線と1条を波状に描く(第103図3)も含まれている。

第5 B類 (第103図6)

浅鉢形で、口縁は「く」字状に内折させ、頸部は長く緩く外反させている。口縁外面に2条の凹線文が描かれている。

底部 (第103図7~9)

推定底径5cm~6cmを測り、総て外底を弧状に上げる上げ底である。

石器 (第104図～第105図)

石材核を主体に打製石斧、石皿、磨石、スクレイパー、叩石などである。

石材核 (第104図 1～5)

5点の石材核は総て頁岩製で、大部分が自然礫を素材とするが、中には板状剥片素材のものも含まれている。(1)を除く4点は小型である。(1)は大型で四角形を呈する分厚な自然礫を素材とし、剥片剥離は一辺に集中的になされ、両面にやや大型の横長剥片剥離痕を鮮明に残す。(2)は剥片剥離が、ほぼ全面に及び、その剥片剥離も進行した資料で、本来の原形を大きく変えている。(3)は不整形を呈し、側縁より表、裏側と交互に剥片剥離がなされ、やや小型の剥片剥離痕を両面にとどめている。(4)は大型板状剥片素材の石材核で、周縁より剥片剥離がなされ、その剥離痕をとどめる。剥取された剥片は、剥離痕からやや小型の横長剥片であったとみられる。(5)は本石材核中、最小で、分厚な円礫素材で側面より剥片剥離がなされ、打面を表、裏と交互に転移しながら剥離作業がなされ側面にはジグザグ状となった鋭利な稜線をとどめている。

打製石斧 (第104図 6)

撮形を呈し、やや分厚である。片面の中央部に第一次剥離面を幅広くとどめ、周縁部に打ち欠きによる調整痕を残す。なお、これの一方の面には自然面を幅広く残している。

磨石 (第105図 1)

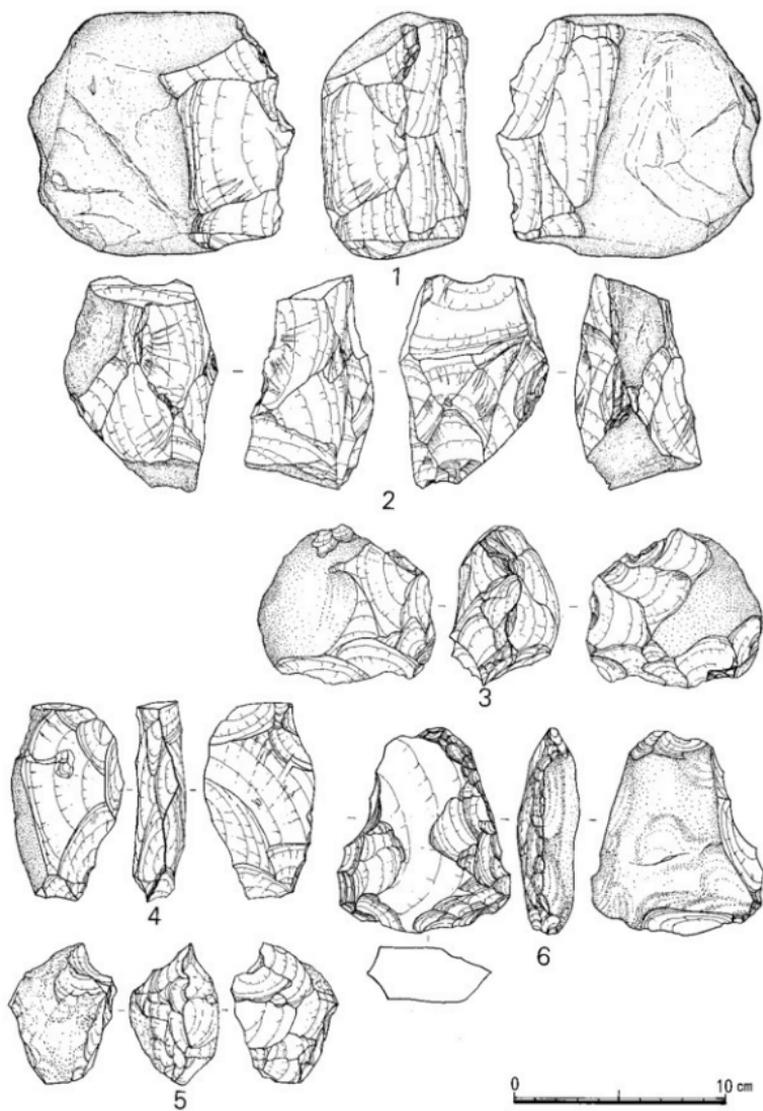
楕円形をなす砂岩礫を素材とし、長軸一端をわずか欠損している。使用痕は両面にみられ、片面は中央部の一部に平坦に磨耗した痕跡をとどめ、一方の面は研がれた状態を呈し全面磨耗し平坦面を形成している。

石皿 (第105図 2)

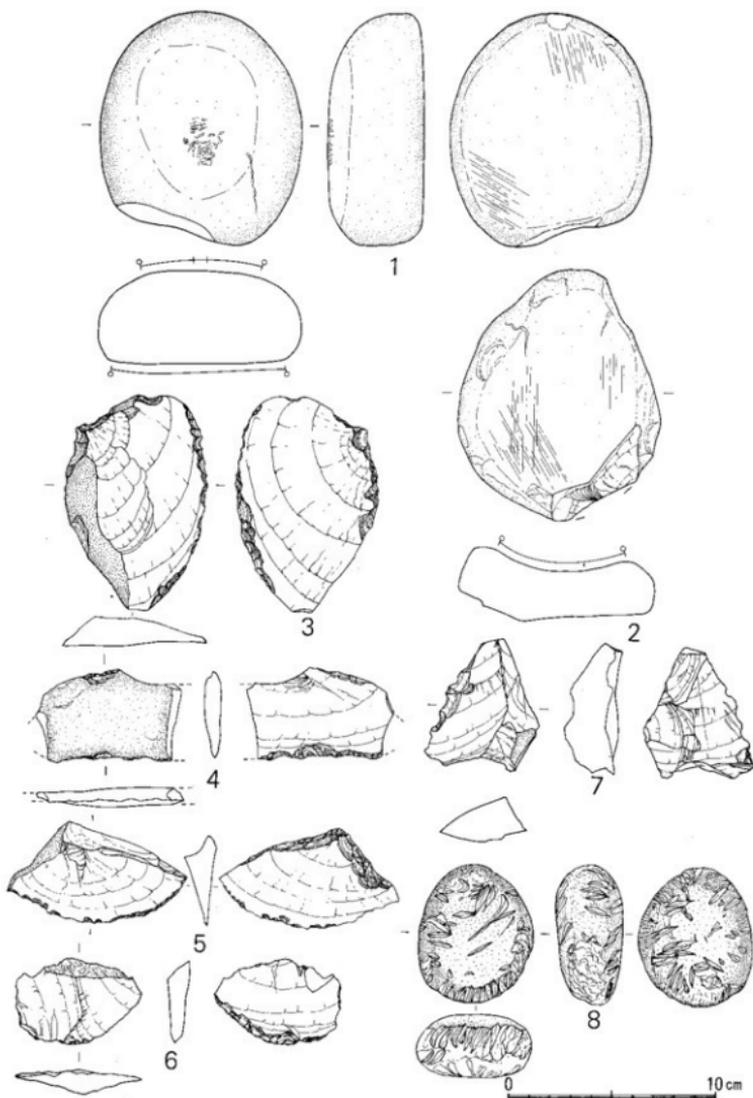
第105図(1)の磨石に近接し出土したもので、扁平な楕円形を呈する砂岩礫を素材としている。上面は深く凹み、最も深い箇所が深さ約0.9cmを測る。凹む内面には細密な線条痕が複雑に交錯し残る。なお、これの長軸一端が一部欠けている。

スクレイパー (第105図 3～7)

(3～6)は横長剥片素材で、(3・5)は背面に自然面を細長く残し、(3)はやや大型で共に長軸一辺に両面より押圧剥離を加え鋸歯状の外湾する鋭利な刃部を作出している。(4)は両端部を欠損し、片面に自然面を、一方の面に第一次剥離面をそのまま残し、長軸一辺に片面加工によって直線的な刃部を作出する。(6)は、やや小型で長軸一辺に外湾する刃部を、(7)は分厚な不定形剥片の片側面に共に粗く押圧剥離を加え刃部を作出している。



第104图 大宮・宮崎遺跡A-5区出土石器



第105図 大宮・宮崎遺跡A-5区出土石器

大宮・宮崎遺跡A-5区出土土器観察表(第28表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第102図1	9	深鉢胴部	36	灰黄白色 磨消縄文R L	灰黄白色 横撫で滑らか	長黒石粒 雲母粒	良好
2	表採	深鉢口縁部	25	茶褐色 縄文L R	茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	38	赤褐色 縄文R L	赤褐色 横撫で滑らか	長黒石粒 雲母粒	良好
4	表採	深鉢胴部	21	黄褐色 縄文L R	黄褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	不良
5	50	浅鉢胴部	40	灰白黄色 縄文L R	灰白黄色 匏撫で滑らか	細砂粒	良好
6	65	深鉢口縁部	28	黒褐色、縄文L R、 撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	64	深鉢口縁部	26	暗茶褐色、縄文L R、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長黒石粒 雲母粒	不良
8	表採	深鉢口縁部	25	黒褐色 縄文L R	黒褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
9	57	深鉢口縁部	27	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	長黒石粒 雲母粒	不良
10	48	深鉢口縁部	31	赤褐色 縄文L R	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
11	表採	深鉢口縁部	21	赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	60	深鉢口縁部	21	黒褐色 縄文L R	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
13	75	深鉢口縁部	28	黄灰色 縄文R L	黄灰色 横撫で滑らか	細黒雲母粒	良好
第103図1	表採	深鉢口縁部	23	黒褐色 縄文R L	黒褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
2	16	深鉢口縁部	不明	暗茶褐色 縄文R L	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	表採	深鉢胴部	23	黄茶褐色 横撫で滑らか	黄灰色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	表採	深鉢胴部	25	黒褐色 縄文L R	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
5	44	深鉢胴部	29	赤褐色 縄文R L	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
6	4	深鉢口縁部	19	灰黒色 匏撫で滑らか	灰黒色 匏撫で滑らか	細砂粒	良好
7	61	底部	5	灰茶褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	金雲母粒	不良
8	58	底部	6	黒褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
9	51	底部	6	黒褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好

大宮・宮崎遺跡A-5区出土石器観察表(第29表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第104図1	28	石材核	12.5	11.6	7.0	1266.66	頁岩	青黑色、自然面を両面中央に残す
2	38	石材核	10.1	7.1	6.1	397.37	頁岩	灰黑色、両面に幅広く自然面残す
3	表採	石材核	8.3	7.5	4.9	340	頁岩	青黑色、自然面を両面に残す
4	39	石材核	9.3	5.2	2.3	120	頁岩	青黑色、片面に幅広く自然面残す
5	表採	石材核	6.7	5.2	4.3	120	頁岩	青黑色、片面に幅広く自然面残す
6	ベルト内	打製石斧	9.6	7.8	2.3	230	頁岩	青黑色、片面に幅広く自然面残す
第105図1	72	磨石	11.25	9.8	4.5	811.93	砂岩	砂岩礫素材、両面研磨、光沢あり
2	71	石皿	12.2	9.4	3.5	410.16	砂岩	扁平砂岩礫素材、片面に顕著な摩擦痕残る
3	表採	スクレイパー	10.3	6.7	1.3	110	頁岩	横長剥片素材、両面加工による刃部形成
4	40	スクレイパー	7.1	4.5	0.8	30.61	頁岩	横長剥片素材、片面に自然面残す
5	ベルト内	スクレイパー	8.7	5.7	1.7	40	頁岩	青黑色、横長剥片素材。両面加工の刃部形成。
6	表採	スクレイパー	6.1	4.2	1.1	19.78	頁岩	横長剥片素材、片面加工刃部形成
7	74	スクレイパー	6.5	6.4	2.6	60.69	頁岩	肉厚不定形剥片素材
8	77	祭祀遺物?	6.8	5.5	3.2	140	砂岩	刻み目状の叩痕を側面と両面に残す。

叩石(第105図8)

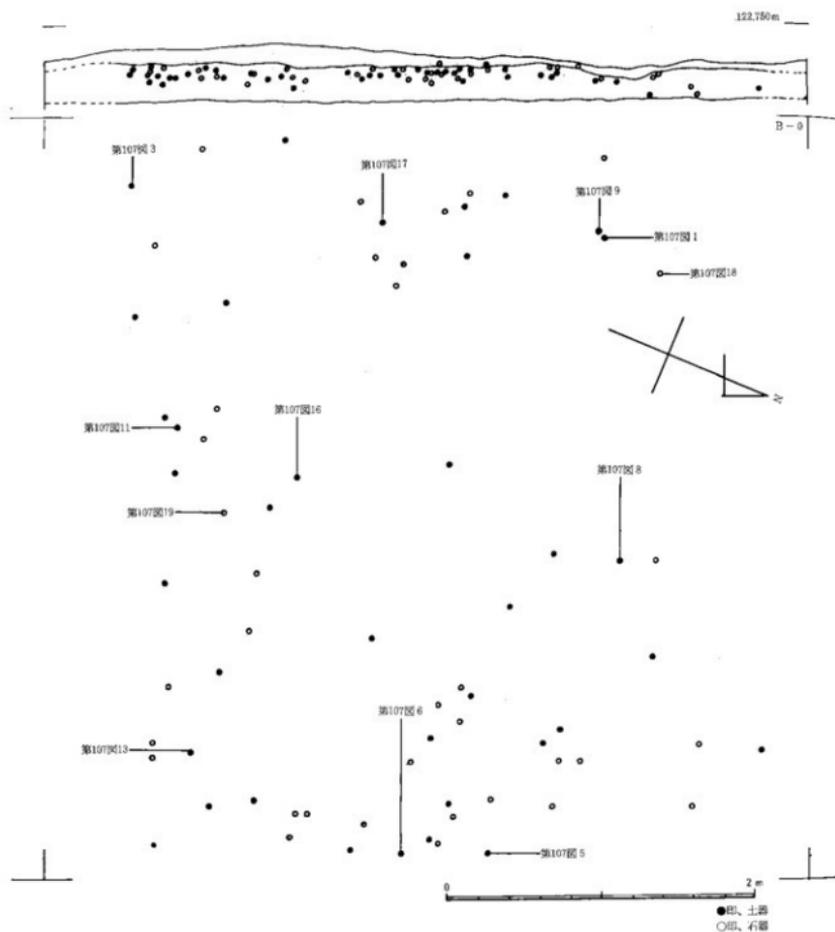
粗粒質の砂岩礫素材で、最大長6.8cm、最大幅5.5cm、最大厚3.2cmを測る小型で、側面の全周と上面に溝状となる痕跡を無数にとどめる。特に側面の痕跡は縦に密に刻む状態を呈し、しかも、その痕跡は側面全周に並び異様である。

(8) B-0区出土遺物

配石遺構の検出はなく、遺物は稀少で、本地区の全面に散在的ではあるが出土分布をみる(第106図)。遺物は土器、石器共にみられるが、その量はやや土器が勝る。

土器(第107図)

第2A類(第107図1)

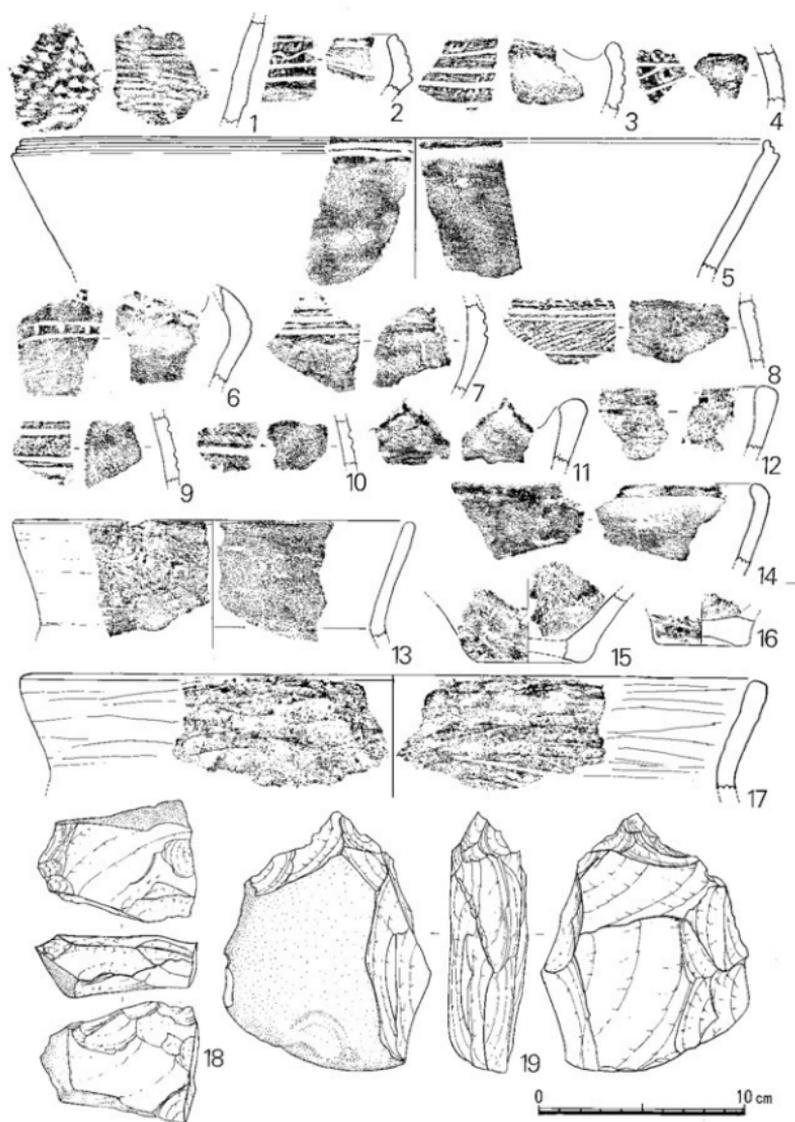


第106図 B-0区出土遺物平面、垂直分布実測図

深鉢の胴部片で、器壁は外傾し、器内はやや厚い。外面には本類で特徴とする爪形状の刺突文が施され、内面には器面調整のための横走る条痕が浅く残る。

第4B類 (第107図2~4)

深鉢の口縁と胴部片である。口縁(2)は「く」字状に内折させ、外面には口縁に平行する3条沈線と内1条を波状に描き文様構成している。(3)は緩い波状口縁を呈し、内湾気味に立ち上が



第107图 大宮・宮崎遺跡B-0区出土土器・石器

大宮・宮崎遺跡B-0区出土土器観察表(第30表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第107図1	43-1	深鉢胴部	?	灰茶褐色 爪形状刺突文	灰茶褐色 横位浅条痕	長石粒 雲母	良好
2	表採	深鉢口縁部	28	赤茶褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	12	浅鉢口縁部	26	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 雲母	良好
4	表採	深鉢胴部	?	赤褐色 縄文RL	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
5	13	深鉢口縁部	38	灰白茶色 横撫で滑らか	灰白茶色 横撫で滑らか	細砂粒 雲母	良好
6	8	深鉢口縁部	28	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒 石	良好
7	54	浅鉢口縁部	30	黒褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 石	良好
8	59	深鉢胴部	28	暗茶褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 雲母	良好
9	43-2	深鉢胴部	29	黄褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒 雲母	良好
10	表採	深鉢胴部	?	赤褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
11	39	深鉢口縁部	?	暗茶褐色、スス付着、撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 石	良好
12	表採	深鉢口縁部	?	黄褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 石	良好
13	22	深鉢口縁部	19	暗茶褐色、スス付着、撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 石	良好
14	50	浅鉢口縁部	31	茶褐色、スス付着、撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 石	良好
15	表採	底部	6	赤褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細砂粒 石	良好
16	44	底部	4.5	赤褐色 撫で滑らか	灰白茶色 撫で滑らか	細砂粒 石	良好
17	1	深鉢口縁部	36	黄灰色 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	大砂粒 石	良好

大宮・宮崎遺跡B-0区出土石器観察表(第31表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第107図18	32	石材核	7.9	5.5	3.0	160	頁岩	灰黒色、剥離面鋭利、一部に自然面残す
19	61	石材核	12.8	9.8	3.5	500	頁岩	灰黒色、剥離面鋭利、片面に広く自然面残す

る器壁は長く延び、その端部はわずかに肥厚させ丸みをなす。外面には縄文LRとなる面に3条の平行横直線を巡らしている。(4)は胴上部片で、外面には1条の平行横直線と、その沈線に接し2条の斜行沈線が描かれている。

第4D類 (第107図5~10)

深鉢と浅鉢があり、深鉢口縁部(5・6)は前者が平縁、後者は波状を呈する。前者の頸部は長く直線的に延び、「く」字状に内折さす口縁は短く萎縮し、外面には2条の平行沈線が口縁を巡る。後者の波状口縁は、その波頂部を欠損している。緩く内曲する口縁外面には2条単位の沈線が巡り、沈線間に間隔を開けた列点刺突文が施されている。(8・9・10)は胴上部片で、緩く膨らむ外面には縄文LRが施され、その面に2条単位の平行横直線を間隔を開けて上下2段に描く。それらの沈線の溝の中には列点刺突文を施すもの、斜行刻目文を連続施文するものなどをみる。浅鉢(第107図7)は、口縁端部を欠損している。器壁は緩く内曲し、口縁外面を若干肥厚させている。外面には縄文LRとなる面に3条単位の平行横直線文が描かれている。

第5C類 (第107図11~14・17)

深鉢のみで、平口縁と波状口縁のものをみる。(11)は波状口縁を呈し、波頂部は急斜させ尖る山形状をなす。これの器壁は外傾させ、端部は肥厚し丸く作出されている。(12~14・17)は平口縁を呈し、(12)は緩く内湾気みに立ち上がる口縁端部は肥厚させ丸みをなす。(13)は直線的に延びる頸部は外傾し、その端部は丸くおさまる。(14)も頸部は外傾し、端部は緩く内曲さす。(17)の器肉はやや厚く、頸部は外傾し、その端部は水平に調整され平坦面を持つ。

底部 (第107図15・16)

2点は共に外底を弧状に上げる上げ底である。推定底径は(15)が6cm、(16)は4.5cmを測り小型である。

石器 (第107図)

石材核 (第107図18・19)

(18)は小型で、板状剥片素材の石材核で両面中央には第一次剥離面を幅広く残し、剥片剥離は側面より小さくなされている。(19)はやや大型で、側面より剥片剥離がなされ、片面は全面に大型の横長剥片を剥取した剥離痕を残し、一方の面は幅広く自然面をとどめている。

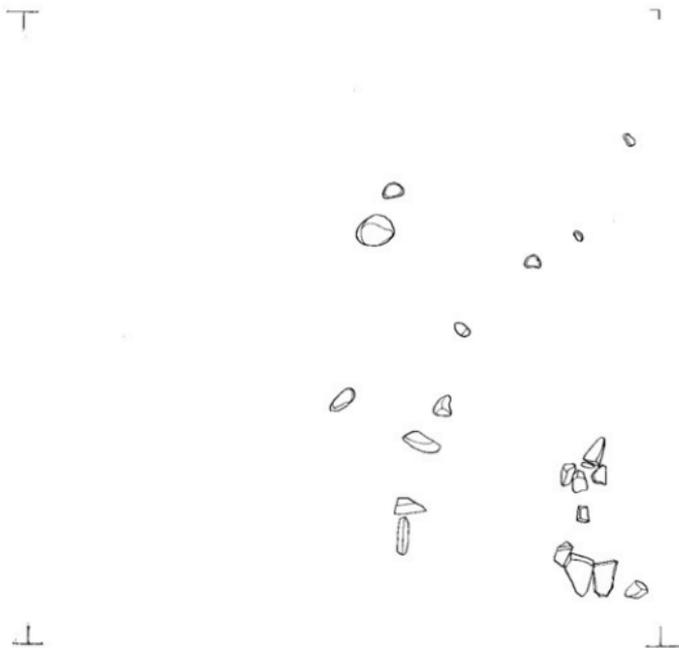
(9) B-1区出土遺物

自然礫の散在をみるものの、本地区には配石遺構と認められるものはなかった。遺物は本地区のほぼ全面に分布するものの密度は薄い(第108図)。遺物は少ないが、土器に比較的良質なものがみられ、表探ではあるが中に1点早期の押型文土器片が含まれている。

土器 (第109図~第110図)

第1類 (第109図1)

深鉢の胴部片で、器肉はやや厚く、胴部は「く」字状に屈曲し、頸部は緩く外反し延びる。外面

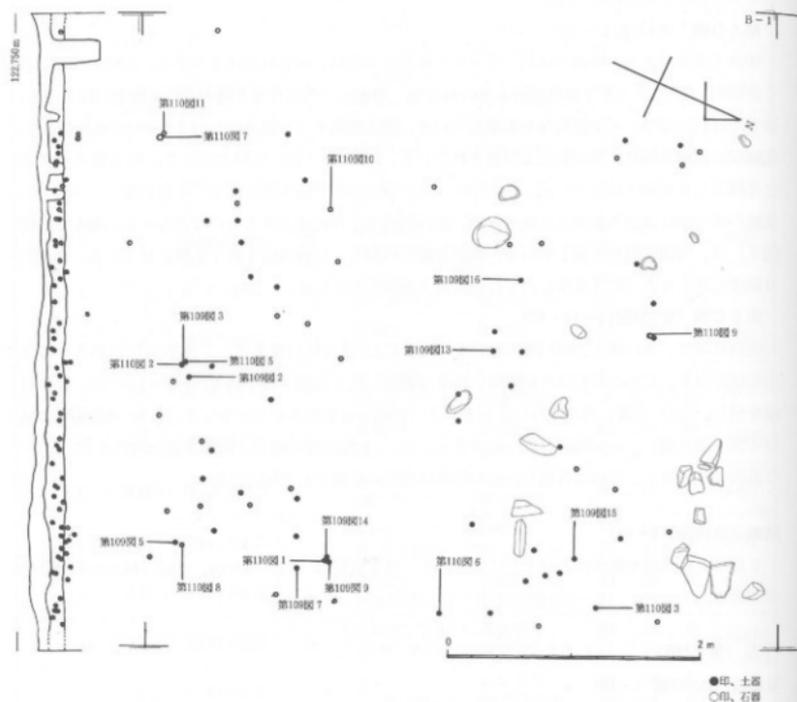


第108図 B-1区出土遺物平面、垂直分布実測図

には大型の山形文が縦位に押捺されている。なお、本土器の胎土中には植物繊維が混入され、その繊維痕が器面に残されている。

第4B類 (第109図2~12)

深鉢、浅鉢がみられる。深鉢は平口縁と波状口縁があり、波状口縁(2)は器壁が立ち上がり、端部は肥厚し丸みをなす。これの波頂部には粘土紐貼付文が施され、外面には1条の太い沈線を横走させている。深鉢(5・6)は平口縁をなし(5)は緩く「く」字状に内折さず口縁は長く立ち上がり、端部は肥厚さす。外面には縄文LRが施され、その面に口縁に平行させ1条の平行横直線と波状文、押し引き状の刺突文を組み合わせ文様構成し、内面にも押し引き状の連続刺突文をみる。(6)は口縁を「く」字状に内折さすが、立ち上がりはやや短い。外面には縄文LRが施され、



第108図 B-1区出土遺物平面、垂直分布実測図

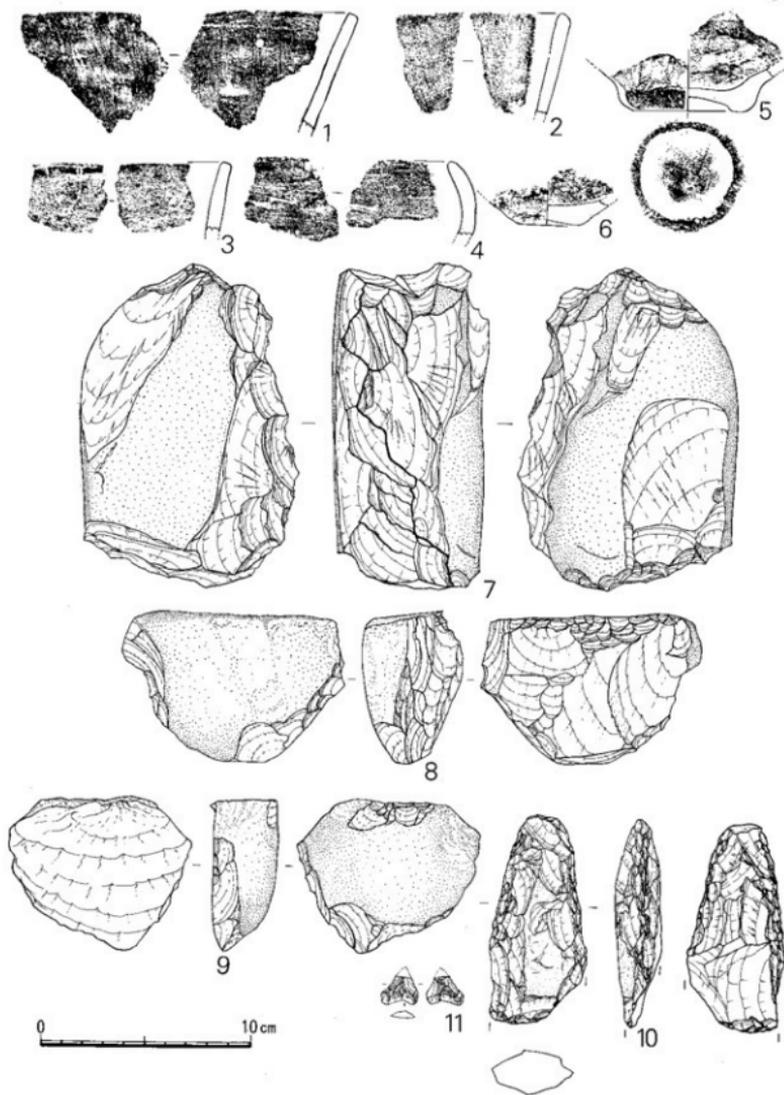
には大型の山形文が縦位に押捺されている。なお、本土器の胎土中には植物繊維が混入され、その繊維痕が器面に残されている。

第4B類 (第109図2~12)

深鉢、浅鉢がみられる。深鉢は平口縁と波状口縁があり、波状口縁(2)は器壁が立ち上がり、端部は肥厚し丸みをなす。これの波頂部には粘土紐貼付文が施され、外面には1条の太い沈線を横走させている。深鉢(5・6)は平口縁をなし(5)は緩く「く」字状に内折さす口縁は長く立ち上がり、端部は肥厚さす。外面には縄文LRが施され、その面に口縁に平行させ1条の平行横直線と波状文、押し引き状の刺突文を組み合わせ文様構成し、内面にも押し引き状の連続刺突文をみる。(6)は口縁を「く」字状に内折さすが、立ち上がりはやや短い。外面には縄文LRが施され、



第108图 大宮・宮崎遺跡B-1区出土土器



第110图 大宮・宮崎遺跡B-1区出土土器・石器

その面に口縁に平行する2条沈線が描かれ、その沈線間に1条を波状に描き構成している。

浅鉢(3・4)は共に口縁部片で、器壁は緩く内曲し、端部は丸みを持たせている。(3)の外面上には太い沈線3条が巡り、その沈線間に太い筋の短直線が縦位に施されている。(4)は縄文LRの面に2条沈線が口縁に平行して描かれ、それに斜行沈線が1条下がっている。第109図(7~12)は深鉢の胴部片で、器壁は緩く膨らみ、やや厚手となる外面には縄文LR、RL共にみられる。その上下に2~3条単位の平行横直線文を巡らし文様構成する。逆三角形文の中央に「S」字状文が描かれるのも本類土器の特徴の一つで(9)には、その「S」字状文の一部がみられる。

第4D類(第109図13)

深鉢の口縁部片で、「く」字状に緩く内折する口縁部は、立ち上がりが短かく、全体的に萎縮している。なお、本資料は、第4D類の無文タイプである。

第4E類(第109図14)

平口縁を呈する深鉢で、器内は薄く、頸部は緩く外反し口縁は内湾気みに立ち上がり端部は丸みをなす。口縁外面には幅広い縄文LRが施されている。

第5C類(第109図15・16、第110図1~4)

深鉢を主体とし、1点の浅鉢形をみる。深鉢はどれも平口縁を呈し、その口縁はほとんどが外傾し、端部は幅狭い平端面を持つ。第109図(16)は、口縁端部が尖り気みに内曲させている。浅鉢(第110図4)は、口縁が強く内曲し、その端部は尖り気みに丸みをなす。

底部(第110図5・6)

(6)は推定底径3cmを測る小型で、外底は弧状に浅く上げる上げ底。(5)は底径5.5cmを測り、外底は弧状に深く上がる上げ底である。

石器(第110図)

石材核、打製石斧、石鎌などである。

石材核(第110図7~9)

3点は総て頁岩製で、自然礫を素材とし、片面あるいは両面の一部に自然面を残している。(7)は分厚で大型礫の片側縁より激しく剥片剥離が行われている。剥離作業は表、裏面と打面を転移しながら交互剥片剥離技法によってなされ、側面にはジグザグ状となった鋭利な稜線をとどめている。(8・9)は小型で、前者は円礫の長軸一端に形成する自然の平坦面を打面とし、その縁辺から打撃を加え剥片剥離が行われ、後者は円礫を半裁し、第一次剥離面の鋭い縁辺を打面とし剥片剥離がなされている。共に片面には幅広く自然面をとどめている。

打製石斧(第110図10)

やや細身で撥形を呈し、刃部片端を欠損している。打調は周縁より細かく比較的入念になされ、その剥離痕を身の全面にとどめるが、一方の面の中央部にはわずかではあるが自然面をとどめている。

大宮・宮崎遺跡B-1区出土土器観察表(第32表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土		焼成	
				外面	内面				
第109図1	表採	深鉢頸部	21	黄灰色、縦文 大型山形文	黄灰色、撫で滑ら か、繊維痕あり	細長	砂石	粒粒	不良
2	65	深鉢口縁部	?	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
3	75	深鉢口縁部	21	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
4	表採	浅鉢口縁部	21	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
5	22	深鉢口縁部	29	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
6	表採	深鉢口縁部	20	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	金長	雲母 石	粒粒	不良
7	78	深鉢胴部	33	茶褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	石長	英石	粒粒	良好
8	ベルト内	深鉢胴部	24	暗茶褐色 縄文RL	黄茶褐色 横撫で滑らか	細金	砂雲 母	粒粒	良好
9	85	深鉢胴部	21	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	金長	雲母 石	粒粒	良好
10	21	深鉢胴部	?	灰茶色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
11	22	深鉢胴部	33	黒褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
12	ベルト内	深鉢胴部	18	茶褐色 縄文LR?	灰黒色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
13	6	深鉢胴部	34	赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
14	85	深鉢口縁部	22	灰茶色 縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
15	42	深鉢口縁部	28	暗茶褐色 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石	粒粒	良好
16	14	浅鉢口縁部	32	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
第110図1	ベルト内	深鉢口縁部	21	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
2	75	深鉢口縁部	30	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
3	7	深鉢口縁部	23	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
4	85	浅鉢口縁部	21	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-1区出土土器観察表(第33表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第110図5	75	底部	6.5	暗茶褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
6	17	底部	3.0	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	細砂粒	不良

大宮・宮崎遺跡B-1区出土土器観察表(第34表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第110図7	84	石材核	15.5	10.2	7.5	1450	頁岩	青黒色、自然面を両面に残す
8	50	石材核	10.3	7.3	4.8	390	頁岩	青黒色、自然面を片面に広く残す
9	33	石材核	8.7	7.4	3.2	250	頁岩	青黒色、自然面を片面に広く残す
10	48	打製石斧	10.0	4.7	23	95.40	頁岩	刃部片端欠損
11	84	石鏃	1.4	1.7	0.3	0.7	サヌカイト	先端部欠損

石鏃(第110図11)

二等辺三角形をなし、先端部を欠損している。押圧剝離による加工は大きめで、全体的には形態的に歪みのある粗製品である。これの基部は、山形状となる浅い抉入がみられる。

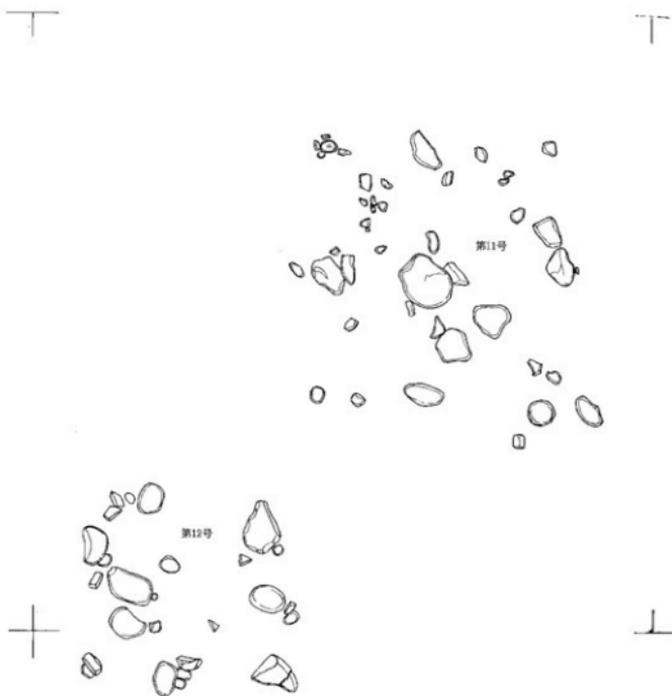
(10) B-2区の遺構と出土遺物

本区からは配石遺構2基が検出されている。中央部からやや西寄りに第11号配石が、東南隅に第12号配石が存在し、共に小型で円状に礫が配置されているものの形態に乱れのみられるものである。遺物は配石内と、その周辺、それに東北隅に集中し出土し、特に本区の配石内からは石棒の出土が確認されている(第111図)。

第11号配石(第112図)

中央に最大径45cm、最大幅38cm、最大厚10cmを測る扁平な楕円形礫が置かれ、それを中心に直径約2mに扁平礫大小合わせ約20個が不整円状に取り巻く。配置された礫で30cm前後の大きさを持つものは8個と少なく、しかもそれらは間隔を開けて置かれ、その間に小礫が雑然と配置されている。東北隅に少し離れて存在する礫は、本来、木配石を囲んでいたものとみられ、それが何らかの作用で移動したものであると思われる。本配石を形成する礫の中には、叩石1点が組み込まれている。

出土遺物としては土器、石器共にみられる。土器は第4B類深鉢胴部片が4点、第4E類深鉢胴部片1点、第4D類浅鉢口縁部片1点、第4C類深鉢胴部片1点、第5C類浅鉢口縁部片1点、他



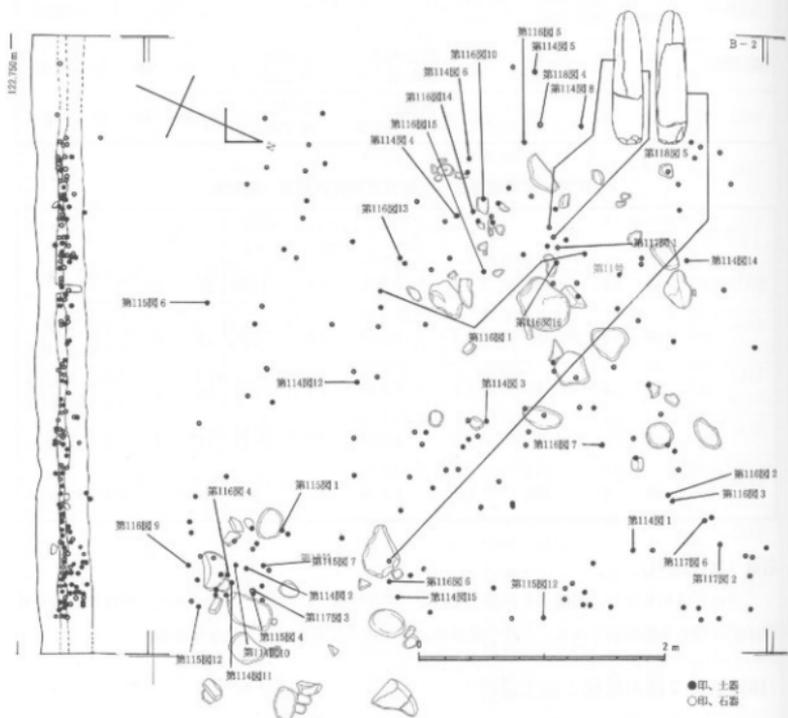
第111図 B-2区出土遺物平面、垂直分布実測図

に上げ底をなす底部片4点と注口土器の注口部片1点の出土がある。

石器では既述の石棒の出土をみるが、これは中央部にみられる大型扁平礫近くに出土したもので、破損した体部片2点である。他に石材核1点と、大型で完形の姫島産黒曜石製石鏃1点の出土がある。

第12号配石 (第113図)

拳大礫と30cm～40cm前後の扁平礫25個を直径1.8m前後に配置したもので、不整形を呈する。正確には大型礫は8個を数え、第11号配石同様、間隔を開けて配置されているこれの中央には礫は



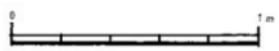
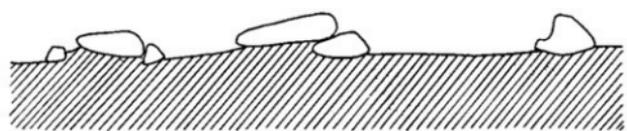
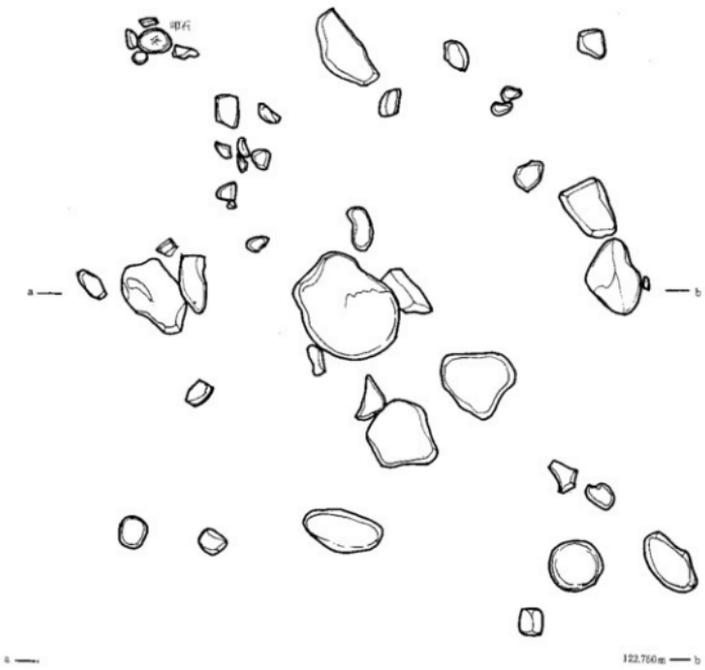
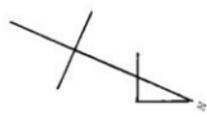
第111図 B-2区出土遺物平面、垂直分布実測図

に上げ底をなす底部片4点と注口土器の注口部片1点の出土がある。

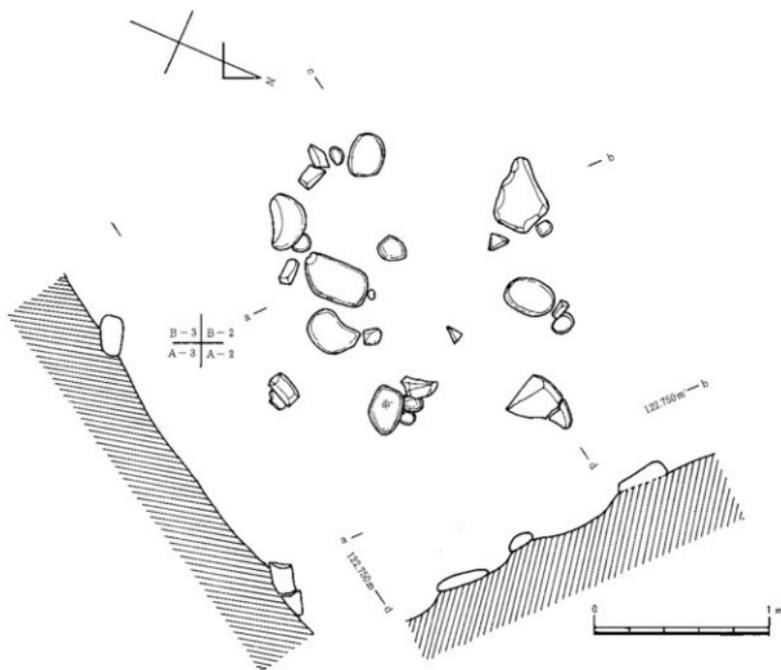
石器では既述の石棒の出土をみるが、これは中央部にみられる大型扁平礫近くに出土したもので、破損した体部片2点である。他に石材核1点と、大型で完形の姫島産黒曜石製石鎌1点の出土がある。

第12号配石 (第113図)

拳大礫と30cm～40cm前後の扁平礫25個を直径1.8m前後に配置したもので、不整形円形を呈する。正確には大型礫は8個を数え、第11号配石同様、間隔を開けて配置されているこれの中央には礫は



第112图 第11号配石遗痕实测图



第113図 第12号配石遺構実測図

なく狭小ながらも空間を形成する。内部からの遺物は土器、石器共にみられ、土器は第4 B類深鉢口縁部片1点、第4 C類深鉢口縁部片2点・胴部片1点、第4 D類深鉢口縁部片3点・胴部片1点、第4 E類深鉢胴部片1点、第5 A類深鉢口縁部片1点、第5 C類深鉢口縁部片1点などである。石器は石材核1点と、石棒の体部残片1点が出土している。石棒残片は、第11号配石に出土の石棒に接合するもので、直線距離にして3 m離れた出土である。

土器（第114図～第116図）

第4 B類（第114図1～8）

深鉢の口縁、胴部片で、平縁と波状口縁がみられる。波状口縁（1・3）は共に緩い波状をなし、（1）は波頂部に「W」字状の粘土紐貼付文が施されている。口縁は緩く「く」字状に内折し、端部は丸く肥厚さす。外面には縄文LRが施され、その面に2条の平行横直線を巡らし、その下位に1条沈線で波状文を描いている。（3）は緩く外反する無文の頸部から、口縁は外側をわずかに肥厚

させ内湾気みに立ち上がる端部は丸くおさまる。外面には縄文RLとなる面に直接、口縁に平行する3条沈線が間隔を開けて描かれ幅広い文様帯を形成する。平口縁(2)も外面の文様帯は幅広く、縄文LRとなる面に直接3条の平行横直線が描かれている。これの頸部は長く弓状に外反し、口縁は緩く「く」字状に内折させ端部は丸みを持たせ肥厚させている。胴部(4~8)は上半部片で、器壁はやや厚く緩く膨らみを持ち、外面には縄文LR4点、RL1点が施され、その面に直接2条単位の平行横直線と、その沈線に接し3条前後の沈線を斜行さす。この斜行沈線は逆三角形文を描いていたもので、本資料にはその一部が残されている。

第4C類(第114図9~17、第115図11)

深鉢のみで、平口縁と波状口縁がある。平口縁(9~11・13)は口縁外面に縄文LRを施し、その面に太い沈線2条を口縁に平行させ描かれる。(9)は沈線の末端に1条の短直線を置き、それを挟む形で短直線を左右対向させ文様集約部を形成する。これらの頸部は長く弓状に外反し、口縁は「く」字状に緩く内折させ、端部は丸くおさまる。波状口縁(12)は「く」字状に内折させた外面に3条沈線を巡らし、波頂部直下に渦巻入組文を小さく描き文様集約部を形成する。胴部(14~16、第115図11)は幾分か膨張させ、外面には縄文LRが施され、その面に太い沈線で平行横直線と斜行沈線を描き、緩い逆三角形文を形成する。(16)には斜行沈線がみられ、第115図(11)は傾斜の緩い逆三角形文が描かれていたであろう、その文様が描かれていた斜行沈線がみられる。

第4D類(第115図1~10・12、第116図1)

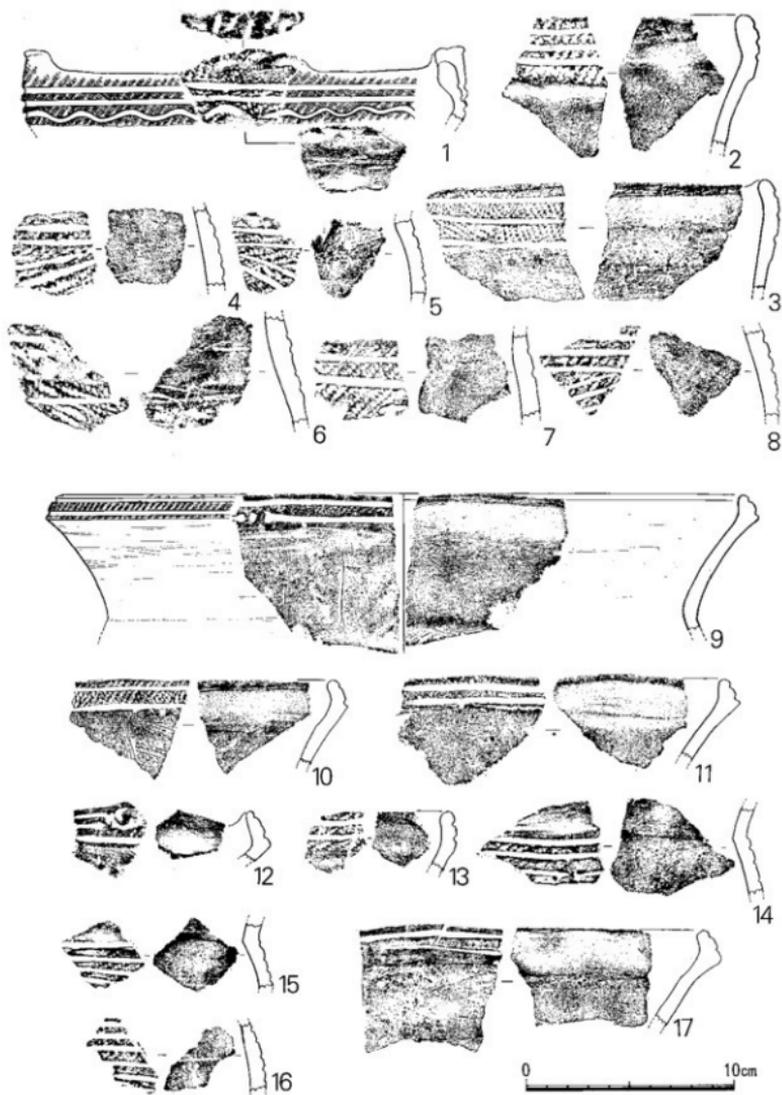
深鉢と浅鉢があり、平口縁を主体に波状口縁を若干みる。波状口縁(1)は長い頸部を持ち、その器壁は緩く外傾し、口縁は「く」字状に強く内折さす。外面には縄文RLが施され、その面に3条沈線が巡り、沈線間に列点文を左右対向させている。これの波頂部は「U」字状に切れ込みが施され、その外面直下には短直線を3条横位に描き文様集約部を形成する。平口縁(2~9)の頸部は、どれも長く弓状に外反し「く」字状に内折さす口縁は立ち上がり短く端部は尖り気みとなっている。口縁外面に描かれる文様は、2条単位の平行横直線を描く(3・7・8・9)、3条単位(2・4・5・6)などがみられ、前者の沈線間には大部分のものに斜行する連続刻目文が施されている。胴部(10~12)は、どれも膨らみが弱く、外面には平行横直線が3条描かれ、(10)には斜行刻目が連続施文されている。浅鉢(第116図1)、口縁部片で、緩く内曲する器形を呈し、端部は平坦気みに調整され、外面には3条の平行横直線が描かれている。

第4E類(第116図2~5)

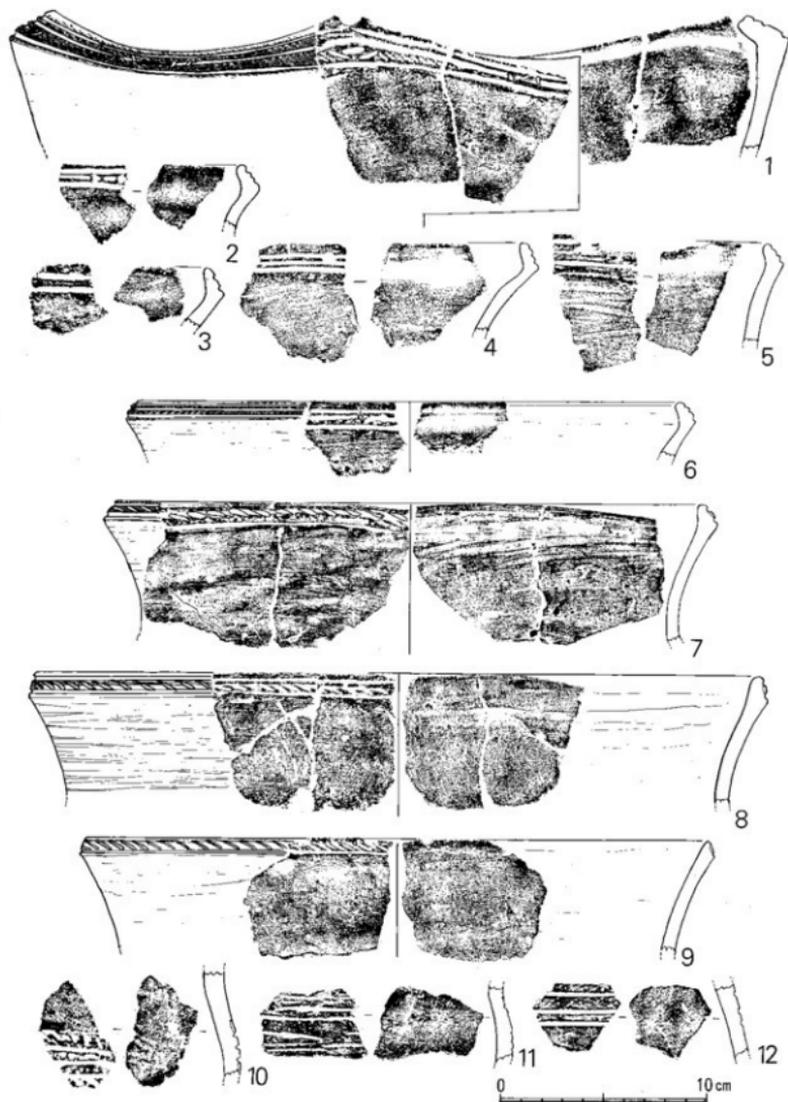
深鉢で平口縁を呈する。(2・3)は同一個体と思われるもので、直線的に延びる器壁は外傾し、口縁端部は内薄く尖り気みとなる。外面には貝殻疑似縄文が、内面には横走する貝殻条痕が残されている。(4・5)は胴上半部片で、緩く膨らむ胴部外面には(4)が縄文RLを幅広く、(5)は羽状に施文されている。

第5A類(第116図6・7)

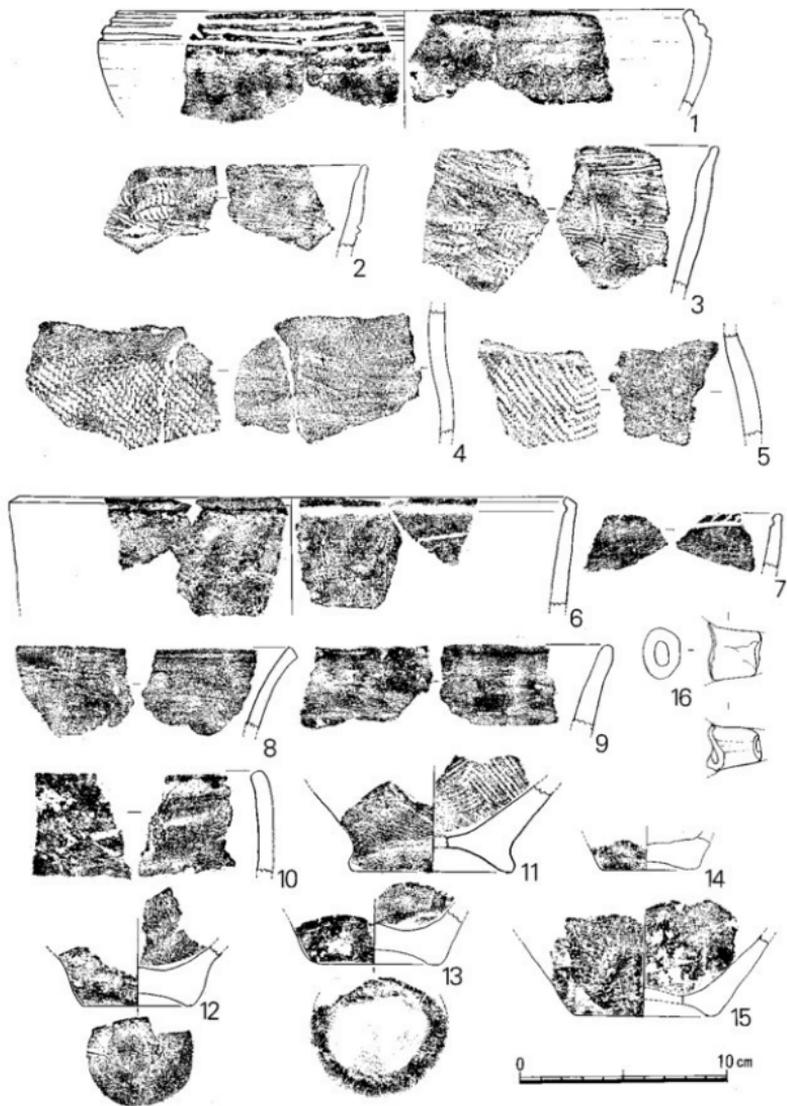
深鉢で直立気みに立ち上がる口縁はやや外傾させ、端部は水平に調整され平坦面を持つ。口縁にみる1条の沈線は(6)が太く、(7)は細い。これの内面には細線で斜線文が沈線に接し連続施文されている。



第114图 大宮・宮崎遺跡B-2区出土土器



第115图 大宮・宮崎遺跡B-2区出土土器



第116図 大宮・宮崎遺跡B-2区出土土器

第5 C類 (第116図8~10)

深鉢と浅鉢がみられ、総て平口縁を呈し、深鉢(7・8)は共に外反させ(8)は水平に調整された端部を持ち、(9)は尖り気みに丸くおさまる。浅鉢(10)の口縁は緩く内湾させ、端部は水平に調整され平坦面を持つ。

注口土器 (第116図16)

体部より剥落した注口部の残片で、先端部を破損している。器面は撫でによって調整され滑らかな肌を呈している。

底部 (第116図11~15)

5点は総て上げ底を呈するが、(11)は底部外縁が外側に張り出す特徴を持ち、内面には条痕を鮮明に残す。他の4点は底部外縁に張り出し部はない。外底はどれも弧状に上がる上げ底を呈する。推定底径は6cm前後を主とし、最大8cm、最小4.5cmである。

石器 (第117図~第118図)

石材核、叩石、スクレイパー、石鏃、石棒などである。

石材核 (第117図1~3)

(1)は大型で四角形をなし、側縁の一边に打面を持ち、大型横長剥片を剥取した剥離痕を両面に残し、他の大部分に自然面をとどめている。(2)は分厚な剥片を素材とし、その片側面に打面を持ち剥片剥離がなされている。これの片面には自然面を幅広く残す。(3)は不整四角形をなす自然礫の一边に打面を持ち、表、裏面と交互に打面を転移しながら剥片剥離が行われ、その剥離痕を両面にとどめる。本資料も(1)同様、大部分に原礫面を残している。

叩石 (第117図4~6)

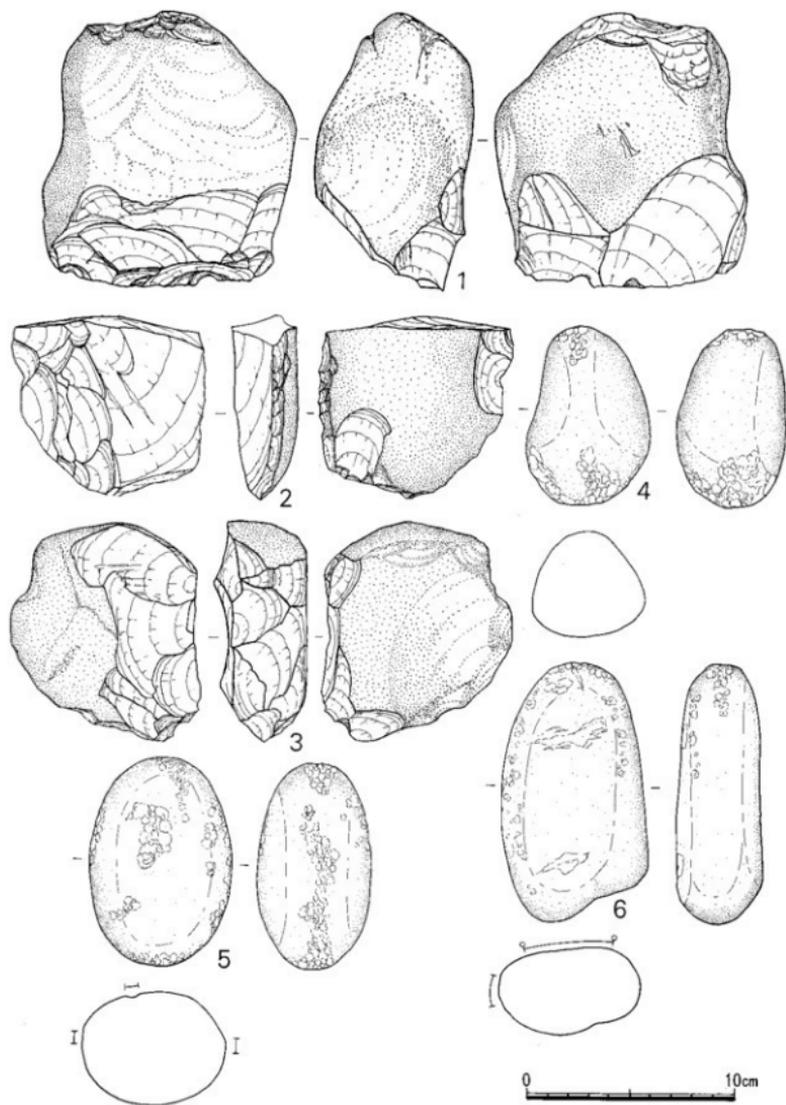
砂岩礫で、分厚な楕円形礫を素材とする。共に長軸両端面や側面に使用によるアバク状痕をとどめている。(5)は側面の他、上面にも打痕が認められ、その痕跡が凹みとなって残っている。

スクレイパー (第118図1~3)

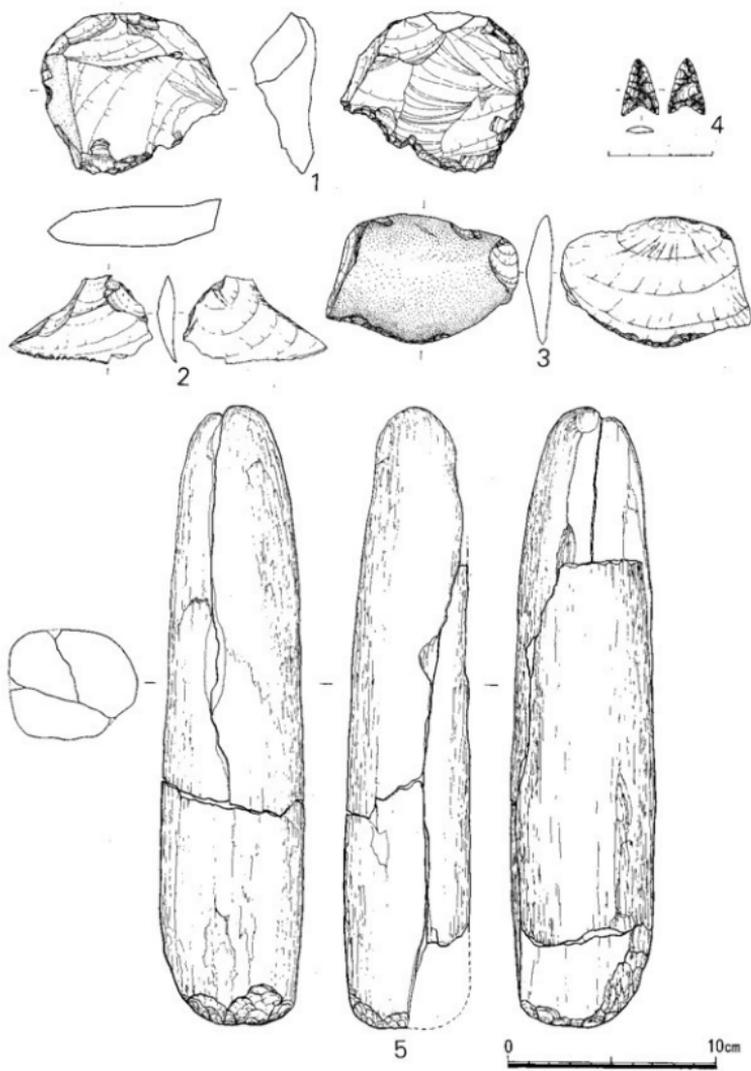
(1)は大型の分厚な不定形剥片を素材とし、長軸の一边に粗く押圧剥離を加え、ジグザグ状となる刃部を形成している。(2・3)は共に横長剥片素材で、前者は長軸一边に片面加工によって、後者は両面加工により緩く外湾する刃部を作出している。なお、前者は片端が鋭く尖り、後者は片面に自然面を幅広く残している。

石鏃 (第118図4)

姫島産黒曜石製で、一边の長さ2.9cmを測る長身鏃で、押圧剥離による加工は比較的に急で、両面に及び、基部は山形状に浅く抉られ、左右に開く脚端は鋭く尖っている。



第117図 大宮・宮崎遺跡B-2区出土石器



第118图 大宮・宮崎遺跡B-2区出土石器

大宮・宮崎遺跡B-2区出土土器観察表(第35表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第114図1	131	深鉢口縁部	20	暗茶褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	金雲母粒 長石粒	良好
2	166	深鉢口縁部	35	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石粒 石英粒	良好
3	168	深鉢口縁部	40	灰茶色、縄文RL、 撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	155	深鉢胴部	21	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
5	7	深鉢胴部	21	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
6	63	深鉢胴部	27	暗茶褐色 縄文RL	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
7	ベルト内	深鉢胴部	25	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
8	8	深鉢胴部	21	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
9	ベルト内	深鉢口縁部	36	赤褐色、スス付 着、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
10	165	深鉢口縁部	28	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
11	163	深鉢口縁部	27	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	金雲母粒 長石粒	良好
12	36	深鉢口縁部	28	黄褐色 縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	表採	深鉢口縁部	21	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
14	108	深鉢胴部	25	暗茶褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	金雲母粒 長石粒	良好
15	162	深鉢胴部	30	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
16	191	深鉢胴部	?	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
17	ベルト内	深鉢口縁部	32	赤褐色、スス付 着、撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第115図1	41	深鉢口縁部	38	黒褐色、スス付 着、縄文RL、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	黒雲母粒 細砂粒	良好
2	ベルト内	深鉢口縁部	25	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
3	表採	深鉢口縁部	?	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	金雲母粒 長石粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-2区出土土器観察表(第36表)

図番号	遺物記録No	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第115図4	171	深鉢口縁部	21	赤褐色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細金雲母粒	不良
5	表採	深鉢口縁部	22	暗茶褐色 縦撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
6	28	深鉢口縁部	26	茶褐色 縄文LR	茶褐色横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
7	169	深鉢口縁部	28	赤褐色、縄文RL、撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
8	ベルト内	深鉢口縁部	35	黄赤褐色 横撫で滑らか	黄褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	ベルト内	深鉢口縁部	30	赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
10	表採	深鉢胴部	?	灰黄褐色 縄文LR	灰黄褐色撫で滑らか	細長砂石粒	良好
11	40	深鉢胴部	19	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	13	深鉢胴部	21	赤褐色 縄文LR	赤褐色横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
第116図1	6 146	浅鉢口縁部	28	黒褐色、スス付着、横撫で滑らか	黒褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	164	深鉢口縁部	27	黒褐色、スス付着、縄文圧	茶褐色横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
3	156	深鉢口縁部	27	黒褐色、スス付着、縄文圧	茶褐色横位条痕	細長砂石粒	良好
4	158	深鉢胴部	29	淡黄色 縄文RL	灰茶色横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
5	167	深鉢胴部	33	黒褐色 羽状縄文	赤褐色横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
6	11	深鉢口縁部	26	黄茶褐色 横撫で滑らか	灰黄色横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	107	深鉢口縁部	31	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色横撫で滑らか	長黒雲母粒	良好
8	表採	深鉢口縁部	27	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	183	深鉢口縁部	28	赤褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
10	32	浅鉢口縁部	32	灰白茶色 横撫で滑らか	灰白茶色横撫で滑らか	細砂粒	良好
11	ベルト内	底部	8	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色斜行条痕	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-2区出土土器観察表(第37表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第116図12	ベルト内	底部	6	黄褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
13	20	底部	6.5	淡灰黄色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
14	29	底部	5	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
15	30	底部	7	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 撫で滑らか	長大石粒砂	良好
16	151	注口土器注口部	(外) 2.5 (内) 1.2	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-2区出土石器観察表(第38表)

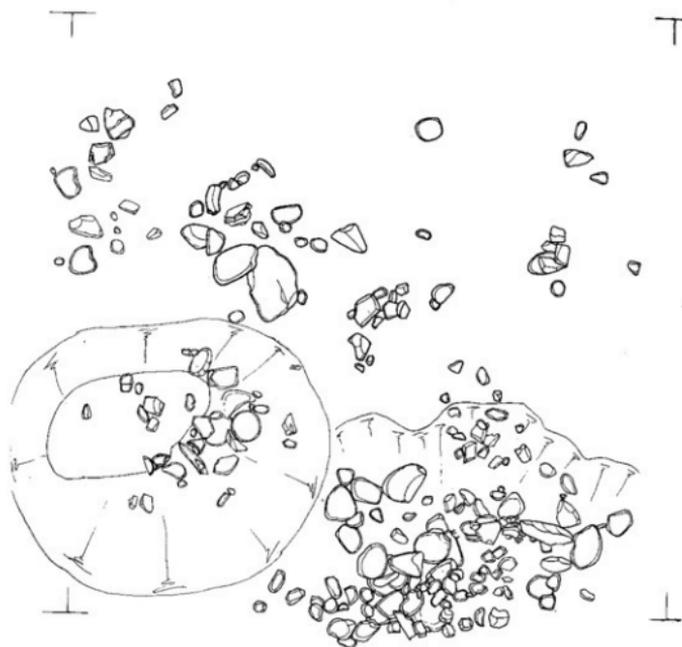
図番号	遺物記録No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第117図1	175	石材核	13.2	11.6	7.5	1570	頁岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利
2	79	石材核	9.3	8.7	3.1	290	頁岩	青黒色、片面に自然面幅広く残す
3	171	石材核	10.6	9.0	4.2	560	頁岩	両面に自然面残す。剥離面鋭利
4	193	叩石	8.6	6.0	5.1	334.74	花崗岩	楕円形礫素材、側面に使用痕残す
5	表採	叩石	10.1	6.9	5.5	482.91	砂岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利
6	100	叩石	12.5	7.1	4.25	524.17	砂岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利
第118図1	表採	スクレイパー	7.8	9.0	3.1	175.88	頁岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利
2	表採	スクレイパー	6.8	4.2	0.8	20	頁岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利
3	ベルト内	スクレイパー	8.3	6.3	1.2	70	頁岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利
4	172	石鏃	2.85	1.18	0.3	1.1	姫島産黒曜石	完形
5	71, 84, 121	石棒	30	7.0	6.1	1760	結晶片岩	青黒色、自然面を両面に幅広く残す。剥離面鋭利

石棒（第118図5）

淡緑色を呈する結晶片岩を素材とする無頭式の石棒で、節理に沿って3点が縦方向に破損し、2点は横位に折れて5点がそれぞれ離れて出土したもので、基部をわずか欠失している。断面は丸く調整され、頭部は尖り気みに細く作られ、その端部は丸く調整されている。頭部から基部に向けては徐々に幅を広め、最大幅7.0cmを基部に持つ。基部も頭部同様、入念な打ち欠きによって丸く整形されている。

(11) B-3区の遺構と出土遺物

本地区には直径20cm～30cm前後から拳大の扁平礫が雑然と多数散在し、中には長さ60cm、幅40cmの大型扁平礫1個も存在する。また、本区の東側寄りには緩傾斜し皿状に窪む箇所が南、北2箇所を確認され、南側の窪みには流れ込みの状態では自然礫約20個が散在し、これに接して北側の窪みには第13号配石が検出された。本配石の東側に接して直径15cm前後の自然扁平礫が30個ほど密集し、



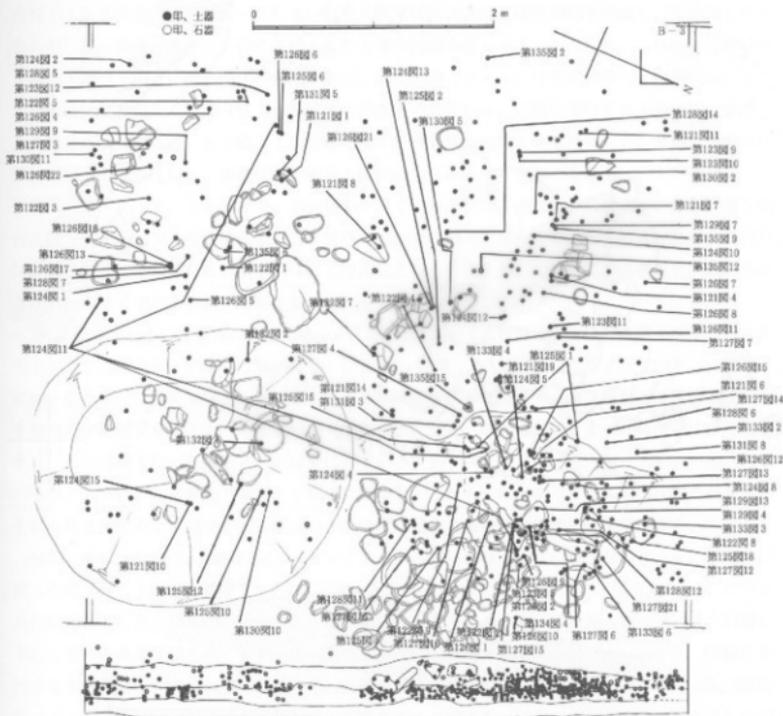
第119図 B-3区出土遺物平面、垂直分布測定図

石棒 (第118図5)

淡緑色を呈する結晶片岩を素材とする無頭式の石棒で、節理に沿って3点が縦方向に破損し、2点は横位に折れて5点がそれぞれ離れて出土したもので、基部をわずか欠失している。断面は丸く調整され、頭部は尖り気みに細く作られ、その端部は丸く調整されている。頭部から基部に向けては徐々に幅を広め、最大幅7.0cmを基部に持つ。基部も頭部同様、入念な打ち欠きによって丸く整形されている。

(11) B-3区の遺構と出土遺物

本地区には直径20cm~30cm前後から拳大の扁平礫が雑然と多数散在し、中には長さ60cm、幅40cmの大型扁平礫1個も存在する。また、本区の東側寄りには緩傾斜し皿状に窪む箇所が南、北2箇所を確認され、南側の窪みには流れ込みの状態でも自然礫約20個が散在し、これに接して北側の窪みには第13号配石が検出された。本配石の東側に接して直径15cm前後の自然扁平礫が30個ほど密集し、



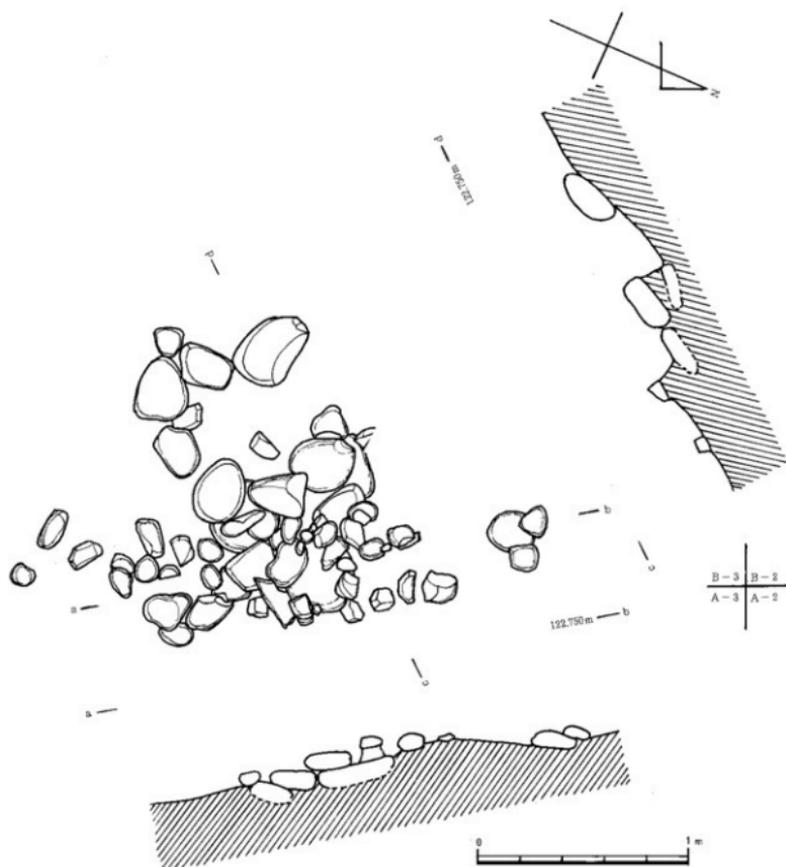
— 0 — 06 221

第119図 B-3区出土遺物平面、垂直分布実測図

それらの礫の下側にも人頭大の扁平礫数個が敷き込まれた状態で存在する。さらに北側には人頭大礫数個と、長さ約45cm、幅約10cmの棒状を呈する自然礫1個が横倒れとなった状態で出土している。遺物は、本区のほぼ全面に散在分布するが、特に配石遺構と、その周辺に密度が高い(第119図)。

第13号配石(第120図)

本配石は長さ20cm~30cm前後の円形、楕円形をなす扁平礫7個を「U」字状に配置したもので、一辺の長さ約90cmを測り、北側に開口している。内部には小礫数個をみるのみで、狭小な空間を形



第120図 第13号配石遺構実測図

成している。内部からの遺物は第4 D類浅鉢口縁部片と深鉢口縁部片、第5 C類深鉢口縁部片の他、同類の胴部片12点が出土している。配石開口部の前面からも多数の土器片が出土しているが、その大部分は第4 D類で、第4 B類と第4 C類がわずかに出土している。また、完形に近い打製石斧1点の出土もある。

土器（第121図～第131図）

第4 A類（第121図1）

深鉢の胴部片1点である。器壁は厚く、球状に膨らみ外面には横走さす沈線と2条単位の沈曲線が描かれ、沈線間は磨消手法によって幅広い縄文帯を形成する。

第4 B類（第121図2～20、第122図1～8）

深鉢と浅鉢がある。深鉢は波状口縁と平口縁とがみられる。平口縁（2～4）は、緩く「く」字状に内折させ、器壁は内湾気みに立ち上がり、端部は丸く肥厚させている。外面には2条の平行横直線と1条を波状に描く（2・3）と、渦巻入組文状に大きく文様集約部を形成し、その左右に3条の平行横直線と、さらに口縁に平行させた1条の沈線を描く（4）がみられ、これの平行横直線2条の末端は下向きに折れ曲げ特徴的である。波状口縁（5・6）は器壁が厚く、内湾気みに立ち上がる口縁端部は丸く肥厚させている。波頂部直下の外面には、口縁に平行する1条沈線と垂直した入組文を大きく描き、その横に1条沈線を垂下させ文様集約部とする（5）と、波頂部外面の口縁に平行する1条沈線と、単純化した渦巻入組文の描かれる（6）などをみる。

胴部（7～15）は、上半部片で、器壁はやや厚く、外面には2条沈線を横走させ、それに接し斜行沈線で逆三角形文を描き構成する。本資料には、その胴部文様の一部をとどめる。ただし（13）は2条沈線が縦位に描かれ、やや異なる文様構成となっているが、これは左右に長方形区画文を描き構成さすタイプとみられ、本類土器の中に見られるものである。

第122図（3・4）は本類の中では稀少タイプで、「く」字状に内折さす口縁は緩く内湾気みに立ち上がり、器壁は若干肥厚させ端部は丸くおさまる。頸部は長く弓状に外反させている。口縁外面には2条の平行沈線を間隔を開け横走させ、その沈線は波頂部直下で入組文を上下2段に形成し、その左右に蛇行文を垂下させ文様集約部を形成する。なお、これの蛇行文左右には1条沈線を横走させ、その沈線末端には縦位の短直線を付している（3）。（4）も波頂部外面に入組文が描かれているが、これは左右に間隔を開けて2箇所描かれ、しかも、口縁に平行する3条沈線の最上段にそれを見る。左右に入組文をみる間には1条沈線が横位に描かれ文様集約部を形成する。

浅鉢（第121図16～20、第122図1・2・5・6～8）平口縁と波状口縁とがあり、その口縁部は緩く内湾し立ち上がるタイプと、「く」字状に内曲さすもの、外反さすなど3種をみる。これらは共に端部は丸く作られるが、後者は若干尖り気みとなるものをみる。平口縁（16～18）は、口縁に平行し2～3条の沈線を巡らすもので、筋の太い沈線が特徴である。（19）も平口縁で、口縁に平行する1条沈線と、それに接し2条の平行沈線を斜行させ磨消縄文手法となっている。（20）、第122図（1・2・5）は口縁を「く」字状に内折さすタイプである。（20）は平口縁で外面には2条単位の沈線を間隔を開け上下2段に巡らし、その中間に縦位の沈線を2条描き、その沈線間には「C」

字状文を対向させて「C〇」文とした文様を縦に3段並べて文様集約部としている。なお、この口縁に平行する最上段の沈線には小さな円形刺突文が連続施文されている。第122図(1)は、平口縁を呈する口縁外面に6条の平行横直線が描かれ、その中間に半弧状文を2重に描き、それに押し引き状となる刺突文を3条垂下させ文様集約部を形成する。同図(2・5・8)は波状口縁を呈し、(2)は口縁外面に1条沈線を上下2段に間隔を開け巡らし、その沈線間に3条単位の沈線で逆三角形文を描き文様構成し、沈線の末端には勾玉状の刺突文が付されている。(5)は、口縁が強く内曲し、端部は肉薄く尖り気みとなる。外面には2条単位の沈線が口縁に平行し上下2段に巡らされ、その沈線末端に勾玉状の刺突文と「C」字状文を対向させた文様をみる。(8)は推定口径37cmを測る大型で、口縁は外傾し、傾斜の緩い波状口縁を呈する。外面には口縁に平行する1条沈線を間隔を開けて上下2段に巡らし、その沈線間に5条の斜行沈線で逆三角形文を描き、三角形文の波頂部に半弧文と円形刺突文を施し、さらに三角形文の中に1条の短直線を横位に描き文様構成している。胴部(6・7)の器壁は、前者が緩く湾曲し、後者はわずかに外傾する。前者は口縁近くの破片で、外面には2条の平行横直線と縦位の短直線を2条並べ、その左右に長方形区画文を描く文様をとどめている。後者は、2条の平行沈線を縦位に描き、片側に半弧文を縦位に連続描き、その中を縄文で飾り、沈線の溝の中に小さな円形刺突文を連続施文している。以上の第4B類は、縄文地に直接文様を描くのを原則とし、その縄文の撚りはLR20点、RL5点で圧倒的に前者が勝る。

第4C類(第122図9、第123図1~8)

深鉢と浅鉢があり、後者は波状口縁を呈する。深鉢(第122図9、第123図1~6)、総て平口縁で、頸部は長く弓状に外反させ、口縁部は緩く「く」字状に内折させ、その端部はわずかに肥厚させ丸く作られている。文様帯を口縁と胴上半部に持ち、口縁外面には縄文LRとなる面に直接、2条の平行横直線が巡らされる。中には口縁内面に押し引き状となる連続刺突文を施す第122図(9)や、口縁外面の2条沈線内に押し引き状の刺突文を連続施文する第123図(2)のようなものもみる。

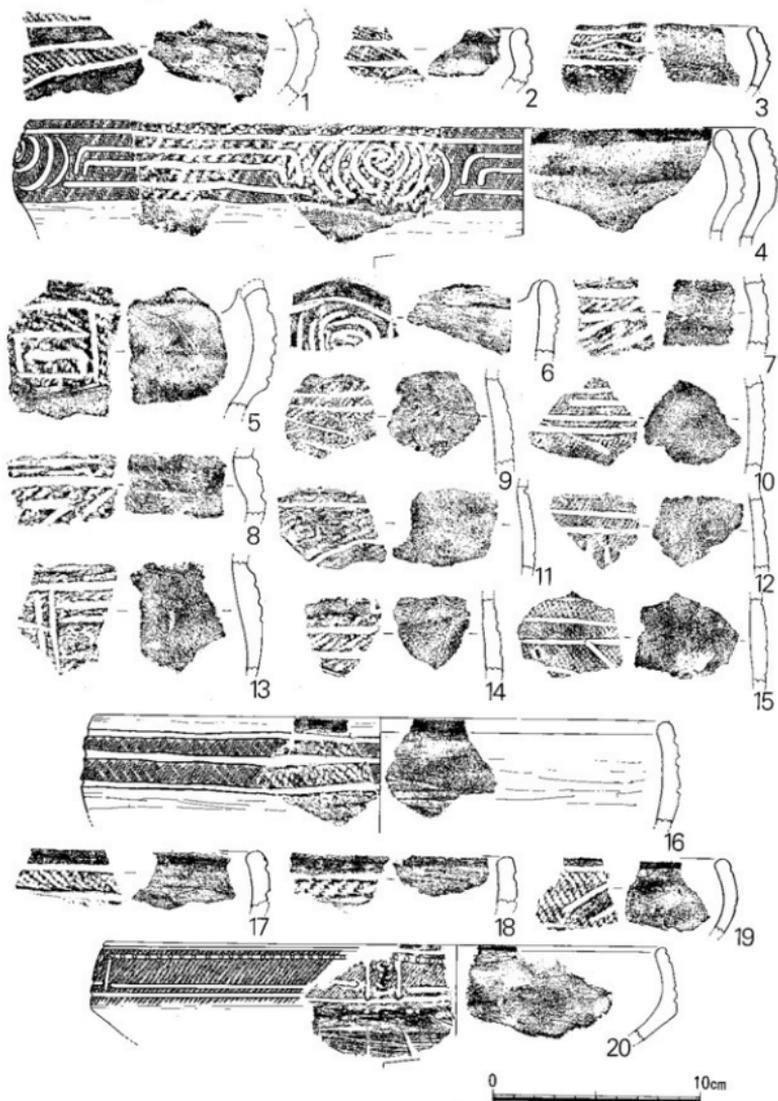
胴部(第123図4~6)は緩く膨らみ、外面には縄文LRを施す面に上段2条、下段1条の平行横直線を描き、その沈線間に傾斜の緩い逆三角形文を描き構成する。(4~6)の外面には、その文様の一部をとどめている。なお(5)の沈線末端には勾玉状の刺突文がみられ、(6)は無文地に直接文様が描かれている。

浅鉢(第123図7・8)、2点は共に緩く内湾する口縁器形を呈し、その端部は尖り気みとなっている。外面には、口縁端部からやや下った位置に2条単位の平行沈線が口縁に沿って巡らされ、沈線間に幅広い縄文帯を形成する。縄文は共にRLで、(8)の波頂部には押点が2個施されている。

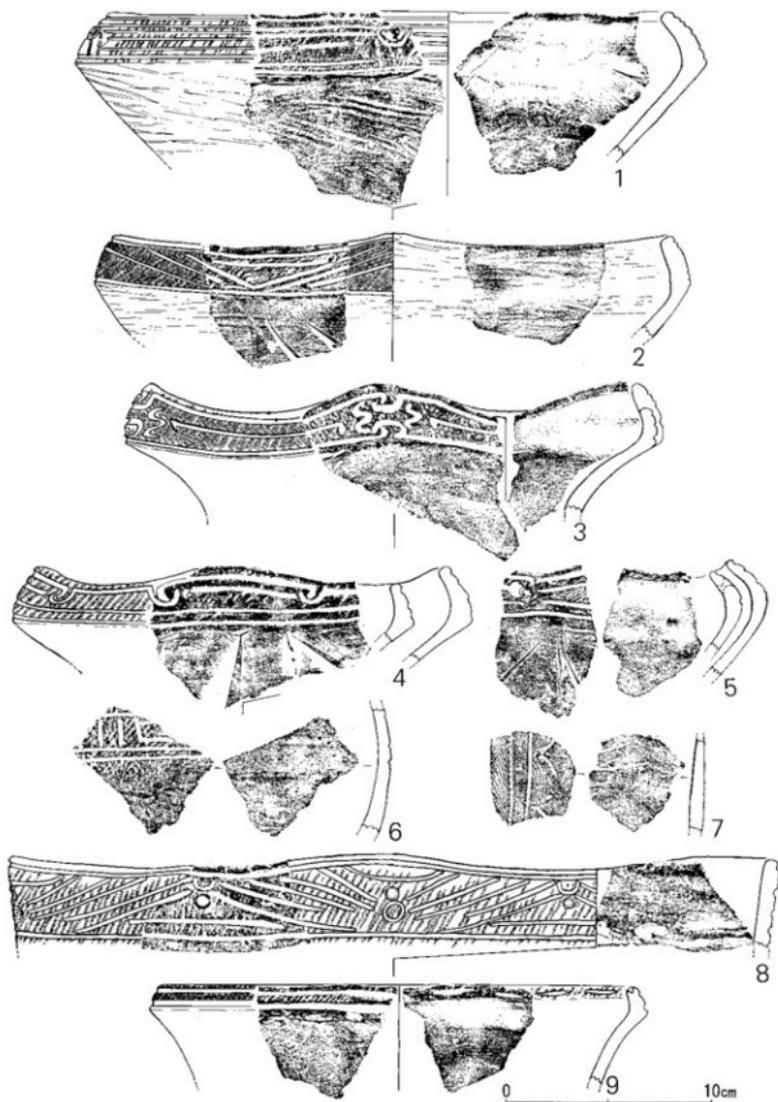
第4D類(第123図9~12、第124図1~16、第125図1~18、第126図1~22、第127図1~21)

本地区で主体となる土器群で、良好な資料が多数含まれている。器種としては深鉢を中心とし浅鉢がわずかみられる。深鉢は平口縁と波状口縁をみるが、その割合は前者が圧倒的多数である。

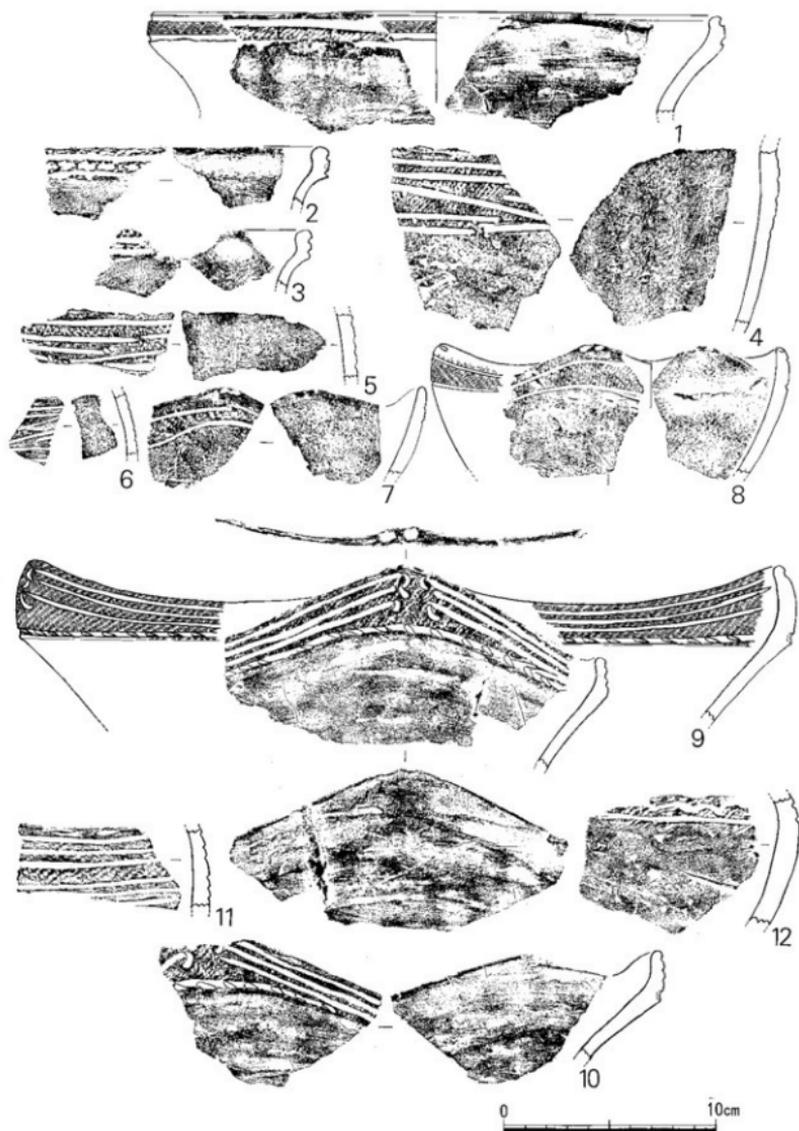
波状口縁(第123図9・10、第124図1・2・12)。波状口縁の傾斜はどれも強く、山形状に上がる波状をなし、第123図(9・10)は波頂部に円形の押点を2個有する。本資料は近接し出土したもので、土器質、色調、文様の特徴などから同一個体とみられる。外反する長い頸部を持ち、口縁



第121图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



第122图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



第123图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器

は「く」字状に内折し、端部は肉薄く尖り気みとなる。口縁外面には4条の平行横直線が廻り、上側から3条までは波頂部直下で沈線は跡切れ、その沈線末端に二日月状文を左右対向させ文様集約部を形成する。最下段の沈線の溝の中には斜行する刺突列点文が施されている。第124図(1・2)の口縁部片は、共に波頂部を欠失する。器形は外反する長い頸部から、「く」字状に内折する口縁部へと移行し、その端部は尖り気みとなる。外面には既述の資料同様、縄文LRが施され、その面に3条単位の平行沈線が廻り、(2)の沈線間には「C」字状文が太く描かれている。同図(12)も波頂部を破損し、外反する頸部から「く」字状文に緩く内折さす口縁を持ち、口縁の立ち上がりは短く寸詰まりとなっている。外面には口縁に平行する2条沈線が描かれ、沈線間には斜行する刺突列点文が連続施文されている。

平口縁(第124図3~11、13~16、第125図1~18、第126図1~7)

38点を図示したが、この内、口縁から胴部まで明らかな資料は第124図(11)、第125図(1・12)の3点を数える。まず第124図(11)、第125図(1)は「く」字状に内折さす口縁は小さく萎縮退化し、その端部は尖り、頸部は長く、前者は緩く、後者は強く外反させ、胴部は共に最大径を上半部に持ち底部へと緩くカーブを描き移行する。文様帯を口縁と胴上半部に幅狭く横帯状に持ち、口縁は外面に縄文LRを施し、その面に前者は直接1条の平行沈線とその下位に1条を波状に描く。胴部も地文に縄文LRを施し、その面に上下2段に間隔を開け平行横直線を1条ずつ描き、沈線間に2条を波状文に描く。後者の口縁外面には、縄文LRを施した面に2条の平行沈線を巡らし、その沈線間に斜行刻目文を連続施文している。胴部は4条の平行横直線を巡らした沈線間の上下2段に連続斜行刻目文を施し文様構成している。

第125図(12)は、推定口径14.5cmを測る小型で、「く」字状に内折さす口縁は小さく立ち上がり、頸部は弓状に外反し胴部は同図(1)同様、膨らみは弱い。口縁外面の縄文はRLで、この面に2条の平行沈線が描かれ、胴部は上半部に平行横直線を3条巡らし最上段の頸部と胴の境目に斜行刻目文を連続施文している。

他の大部々を占める口縁部片も、「く」字状に内折さす口縁器形は先の資料同様、総てに近くが小さく萎縮退化し、その端部は尖り気みとなる。頸部は外反、外傾させ、口縁外面に描かれる文様も縄文LRとなる面に2条単位の平行沈線を直接描き、その沈線間に斜行刻目文を連続施文し文様構成する。中には、口縁外面の沈線が3条となり、連続刻目文を持つもの(第124図5~7)、それを見ぬもの(同図3・4・9)、沈線の1条を波状に描く(同図10)、沈線の溝の中に刺突列点文を施すもの(同図8)、また2条沈線を描きながらも刻目文を見ぬもの(第125図3・7・8・10・11・13~18、第126図1~6)などをみるが、この2条沈線を描くタイプの中には沈線間に勾玉状の刺突文を左右対向させるものや、沈線の溝の中に刺突列点文を施文するものなどが取られる。稀には、1条沈線のみもの(第125図4)、1条沈線と押し引き状刺突文を連続施文する(同図6)、1条沈線の上側に連続斜行刻目文を施文する(同図9)なども含まれている。なお、口縁に2条沈線が描かれているタイプの中で第126図(3~6)は、無文地に描かれているタイプである。同図(7)は本類土器の無文タイプである。

深鉢胴部片（第123図11・12、第126図8～22、第127図1～14）。図示した資料は31点を数えるが、これら胴部は最大径を上半部に持つものの総体的に張りは弱く球状に膨らむものはない。文様帯を胴上半部に幅狭く横帯状に持ち特徴とする。地文とする縄文はL R、R L共にみられるが、その割合は前者が幾分か勝る。文様は3条～6条までの平行横直線を縄文地に直接描き、その沈線間に連続斜行刻目文を上下2段または1段施文し文様構成する。中には沈線間に斜行刻目文を全く持たず、勾玉状の刺突文（第127図3・5・7）、または「C」字文（同図4）を沈線末端に描き、左右対向させているものをみる。第123図（12）、第127図（13・14）は共に平行横直線の中に1条を波状に描き、第127図（13）の内面には稜を頸、胴部の境目に作出している。

浅鉢（第127図15～21）。7点は総て口縁部片で、口縁は緩く「く」字状に内折、内曲するものなどで、その端部は肉薄く尖り気みとなるもの、丸く作られるものなどをみる。外面には縄文L Rとなる面に3条単位の平行横直線を描くもの（17・18）、4条単位のもの（15・19～21）、それに（16）にみられるような2条の平行横直線とその沈線に接して斜行沈線を描き、その末端に「C」字状文を左右対向させ「X」字状文を描き構成するものなどをみる。（15・17）は沈線の溝の中に刺突列点文が、（19・20）には「C」字状文が付されている。

第4 E類（第127図22～24、第128図1～8）

11点は総て深鉢で口縁部片3点、他は胴部片である。口縁は緩く外傾、外反するものなどで、端部は（24）が尖り、他は平坦面を持つ。外面に施される縄文は総てR Lで、（23・24）が幅広く、（22）は幅狭い縄文帯となっている。胴部（第128図1～8）は、最大径を上半部に持ち、その個所に幅広く縄文が施文されている。（5）の貝殻疑似縄文を除く他は総て縄文R Lで、比較的大粒の縄文である。（9）は頸部をとどめる資料で、外反した長い頸部となっている。

第5 C類（第128図9～16、第129図1～14）

深鉢と浅鉢があり、深鉢（第128図9～16、第129図1～9）は口縁が外反、外傾し、端部は平坦面を持つもの、丸みをなすもの、尖るものなどで、その量は平坦面を持つタイプが多い。第128図（14）は口縁から胴上部をとどめる資料で、最大径を口縁に持ち、胴部は緩く膨らみ、そのまま底部へとすぼまるものである。第129図（6）は、口縁端部に縦刻みに刻む連続刻目文が施文されている。第129図（7～9）は頸部から胴部へと続く資料で、頸部は外傾し、胴部は丸く膨張させている。内面の頸、胴部の境目に稜をみる。

浅鉢（第129図10～14）。口縁部は「く」字状に緩く内曲するもの、内湾気みに立ち上がるものなどで、端部は丸く作られたものから尖るものをみる。（13・14）は、共にボール状の器形を呈する。

第5 A類（第129図15～16、第130図2～6）

深鉢の口縁部片で、器壁は直立気みに立ち上がるものをわずか見る他は総て外傾させ、端部は水平に調整され平坦面を持つものを主とし、少数、丸く作られたものをみる。口縁内面に描かれる1条の凹線文は、端部より少し下った位置にみる。

第5 B類（第129図17、第130図1）

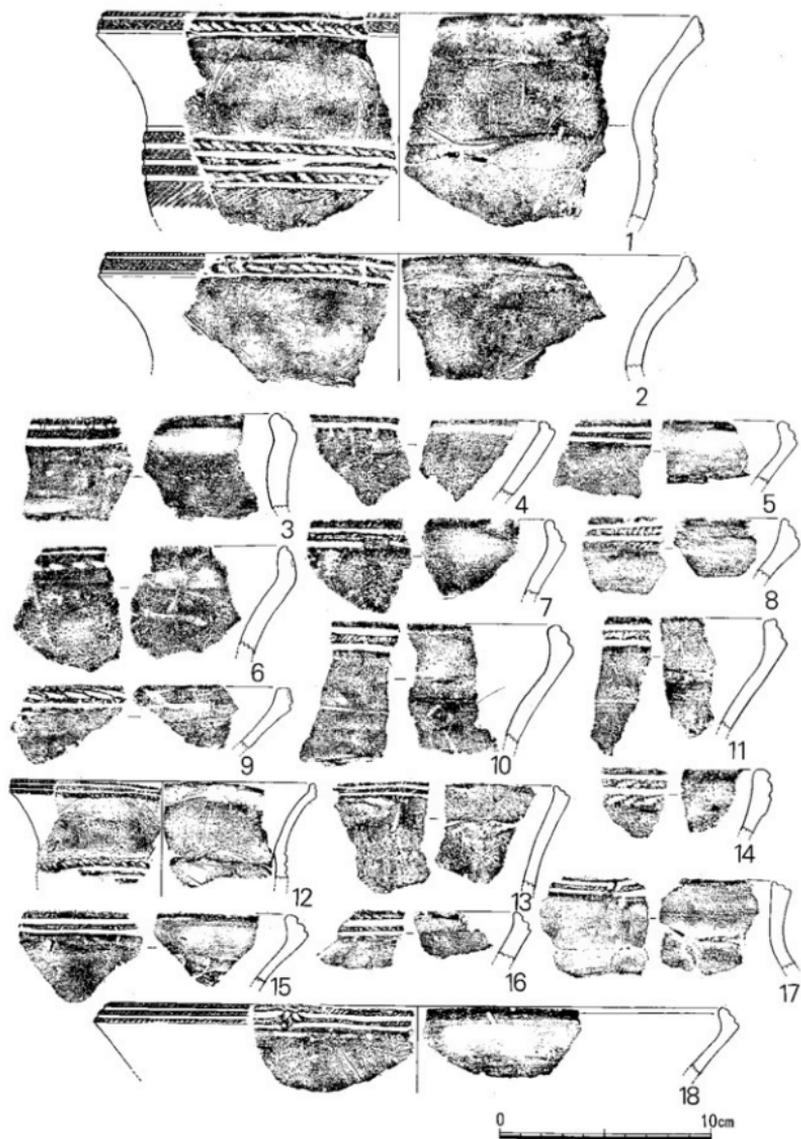
深鉢の口縁部片で、共に器壁は外傾し、端部は丸みをなす。これの口縁外面には端部から少し下った位置に1条の凹線文が施されている。

注口土器（第130図7～9）

（7・8）は土器質、器形、文様などの特徴から同一個体と思われる。強く内傾さす口縁は、器



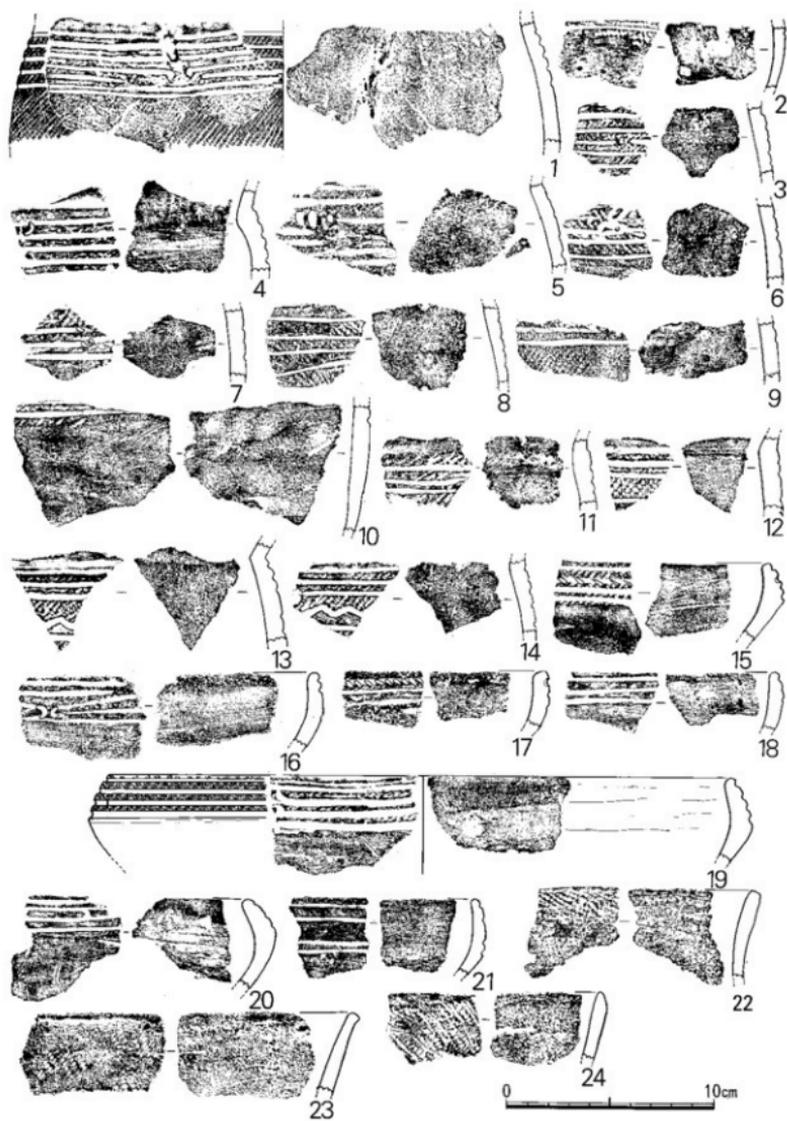
第124图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



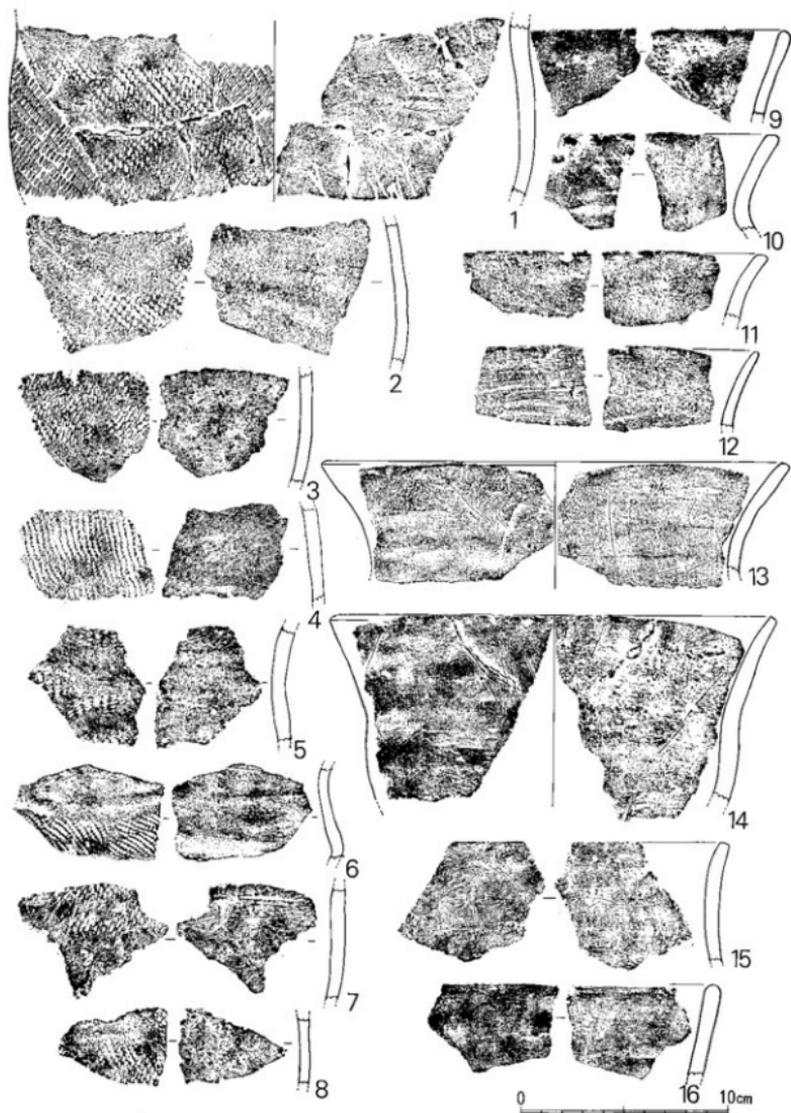
第126図 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



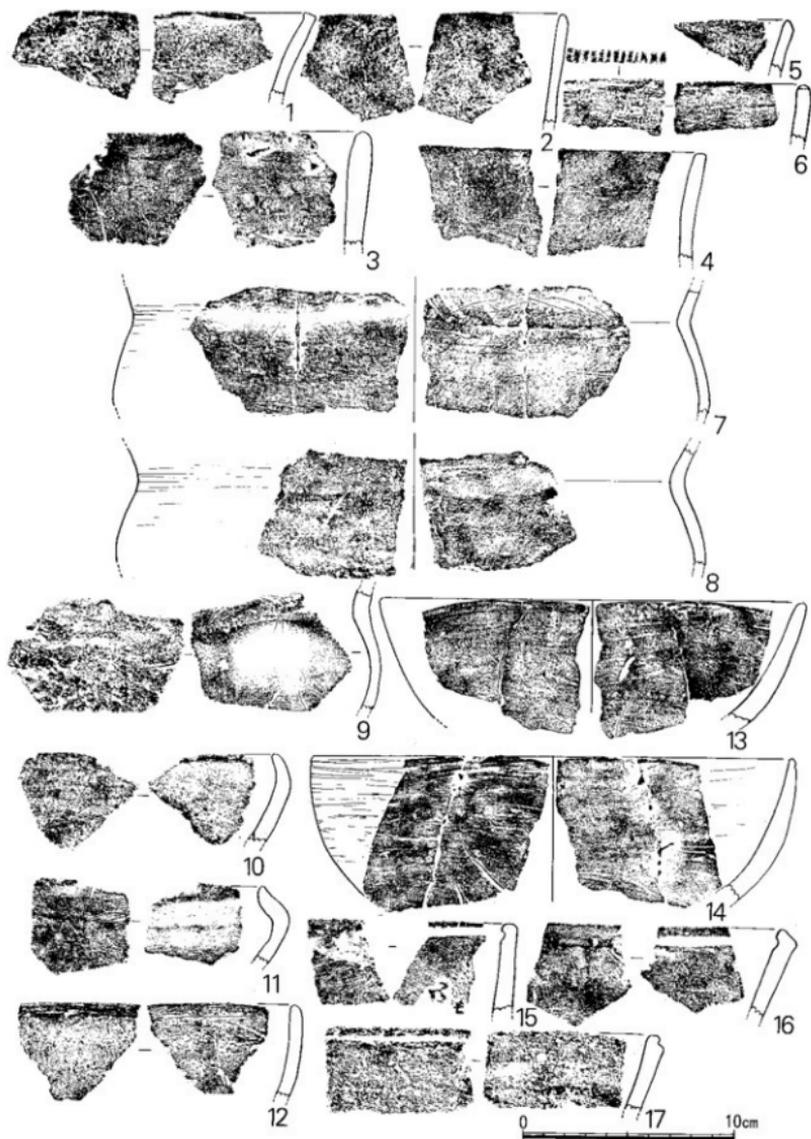
第126图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



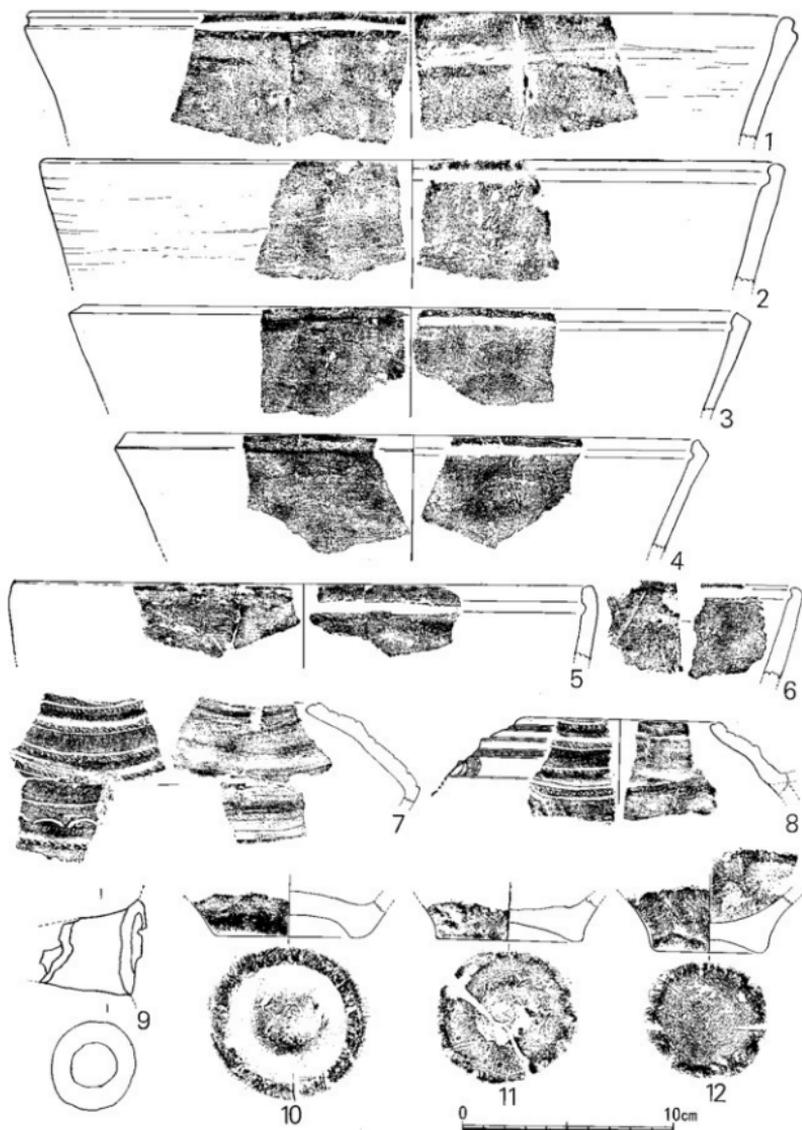
第127图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



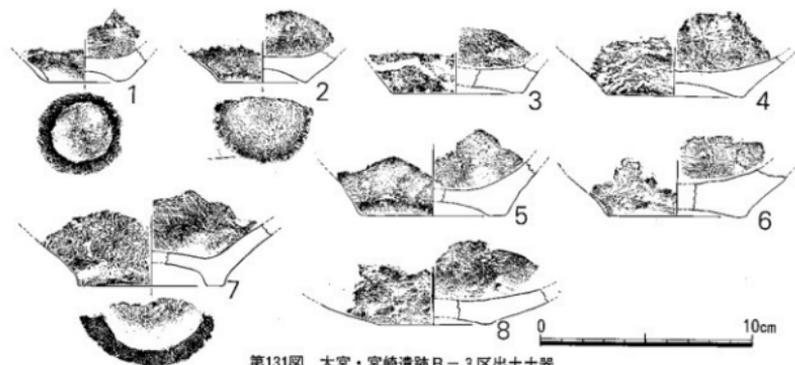
第128图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



第129図 大宮・宮崎通跡B-3区出土土器



第130图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器



第131図 大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器

壁が緩く内湾し、胴部で「く」字状に内屈させ、底部へと急にすばまると思われる。外面には、口縁に平行させ5条の筋の細い沈線が間隔を開けて巡り、その沈線に接して細線で斜行刻目文、円形刺突文を交互に連続施し、下段には緩い半弧文を横位に並べ、その上側にヘナタリによる貝殻疑似縄文を充填し、さらに胴部の内屈部も細線で連続刻目文を施し文様構成している。(8)には胴部の内屈部直上に注口部の剥落痕を残すが、この個所にも小さな円形刺突文が2重にみられる。この文様は、注口部根元を取り巻き飾っていたものと思われる。(9)は胴部から剥落した注口部で、先端部を欠損している。

底部 (第130図10~12、第131図1~8)

11点の底部は総て上げ底で、外底はほとんどが緩く弧状に上がるタイプで占められ、第131図(7)に限っては高台を持つタイプ。同図(8)は浅鉢の底部で浅い上げ底である。推定底径は6cm前後のものが主体をなし、最大7cm、最小は4cmを測る。

石器 (第132図~第135図)

石材核、叩石、磨石、打製石斧、スクレイパー、石錘、石鏃などで、主体をなすのは石材核で、石鏃も比較的多い。

石材核 (第132図1~4、第133図1~6、第134図1)

第132図(1)は大型の分厚い板状となった自然礫素材で、長軸一辺に粗く打ち欠かれた大型剥片剥離痕を残す。剥離痕は両面にみるが、原礫面も幅広く残している。(2)は分厚い円礫素材で、これも片側面に剥片剥離痕を両面にとどめる。剥片剥離は表、裏と打面を交互に転移しながらなされ、側面には鋭利な稜線を形成する。(3・4)は共に長さ6cm、幅4cm前後の小型で、前者は石材核のほぼ全面に剥片剥離痕を、後者は片面の全面にそれをとどめ、一方の面には自然面をそのま

ま残している。小型剥片剥取を目的としたものであろう。第133図(1~3・5・6)は、分厚な大型剥片素材で、片面に第一次剥離面を、一方の面には自然面を幅広くとどめている。これらの石材核にみる剥片剥離は鋭利な面を持つ縁辺よりなされ、その面に小型の横長剥片剥離痕を残している。同図(4)は、分厚な三角形をなす自然礫素材で、大部分に自然面をとどめ、剥片剥離は短軸一辺に粗くなされ、両面に横長剥片剥離痕を鮮明に残している。第134図(1)は長方形をなす自然礫素材で、断面三角形を呈し、平坦面をなす片面に縁辺より剥離された大きな剥片剥離痕を全面に残し、一方の面は自然面をそのままとどめている。本資料は石斧の未製品かもしれない。

叩石(第132図5、第134図2)

第132図(5)は楕円形、第134図(2)は円形を呈し、共に砂岩礫を素材としている。前者は長軸の両端部に使用痕をみるものの、片端部に激しく残し、後者は平坦面を持つ中央部にアバタ状となった使用痕をみる。

磨石(第134図3)

分厚な楕円形を呈する砂岩礫素材で、平坦面を有する両面に滑らかに磨耗した使用痕を残す。

打製石斧(第134図4)

頁岩製で、周縁より打ち欠きによって調整され全体形は撥形を呈する。この片面背部には幅狭く自然面を残し、一方の面の中央部には第一次剥離面を幅広くとどめ、直線的に整形された刃部は片端を欠損している。

スクレイパー(第135図1~5)

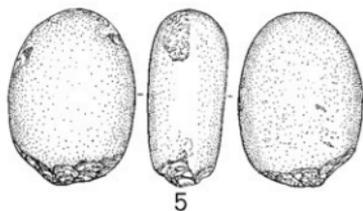
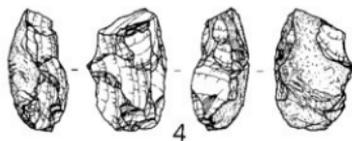
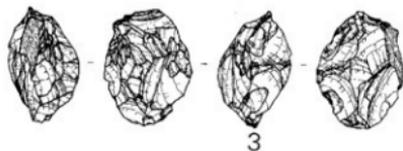
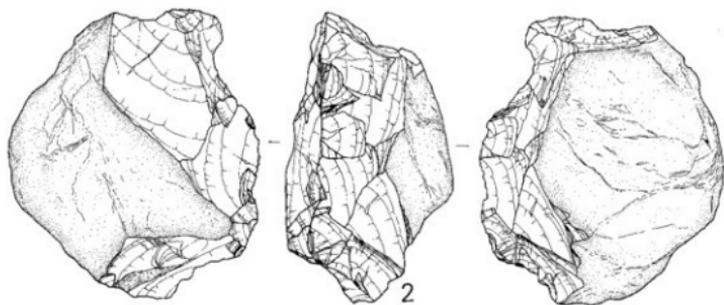
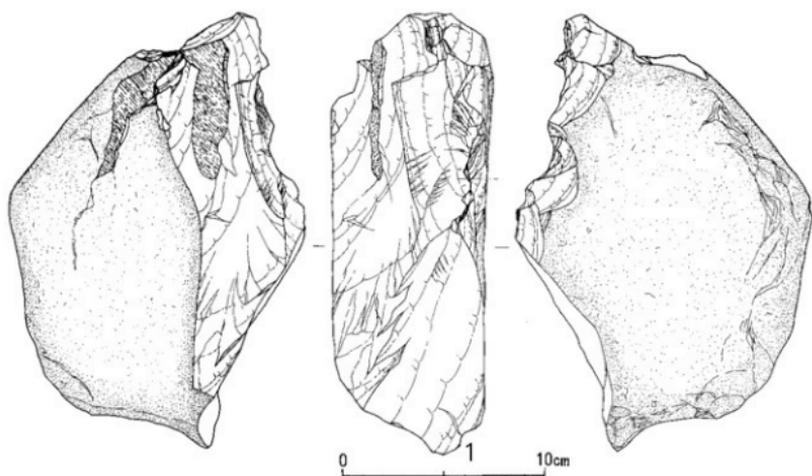
分厚な剥片素材で、(1)は三角形を呈する長軸一辺に直線的な刃部を形成し、(2)は縦長剥片素材で短軸一辺に緩く外湾する刃部を粗く、共に片面加工によって作出している。(3)も縦長剥片素材で、短軸一辺に粗く片面加工によって鋸歯状の刃部を作り出している。(4・5)は小型で、前者は縦長剥片素材で、片側縁に直線的な刃部を、後者は横長剥片を素材とし、長軸一辺に共に片面加工によって外湾する刃部を作出する。

石錘(第135図6)

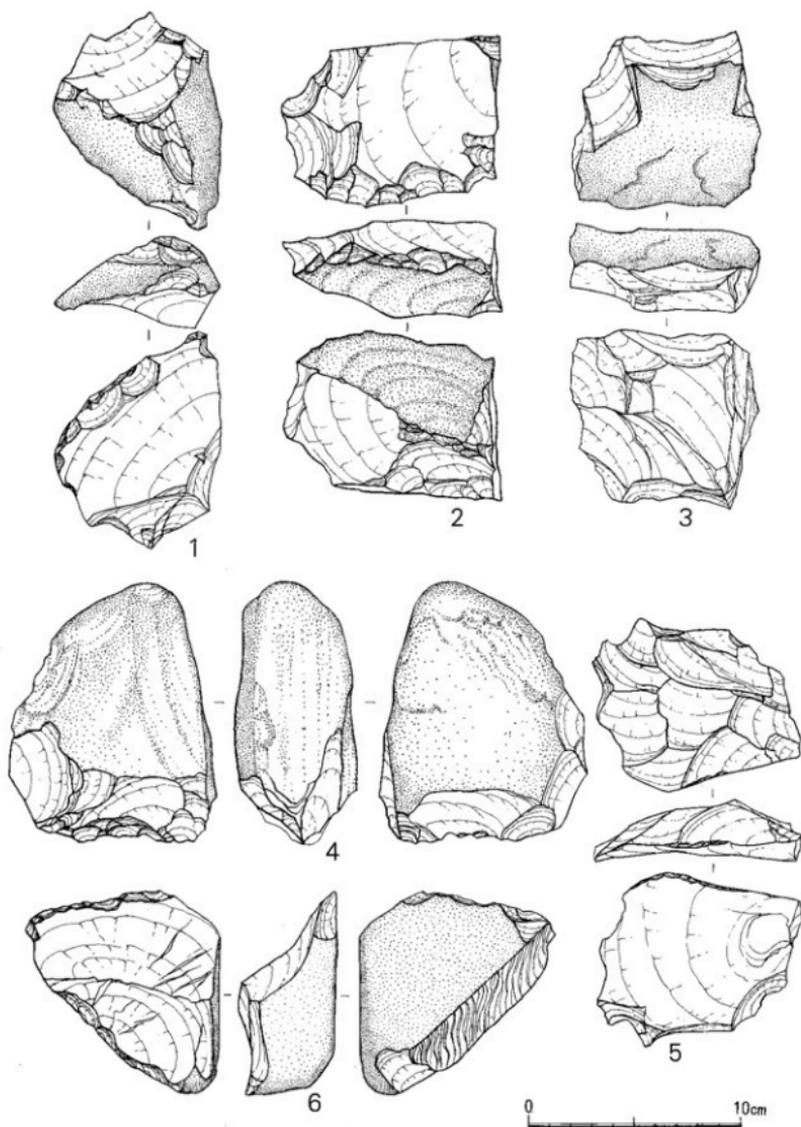
1点の出上で、楕円形をなす扁平砂岩礫素材で、長軸両端部に打ち欠きによって凹みを作り出し石錘としている。

石鏃(第135図7~15)

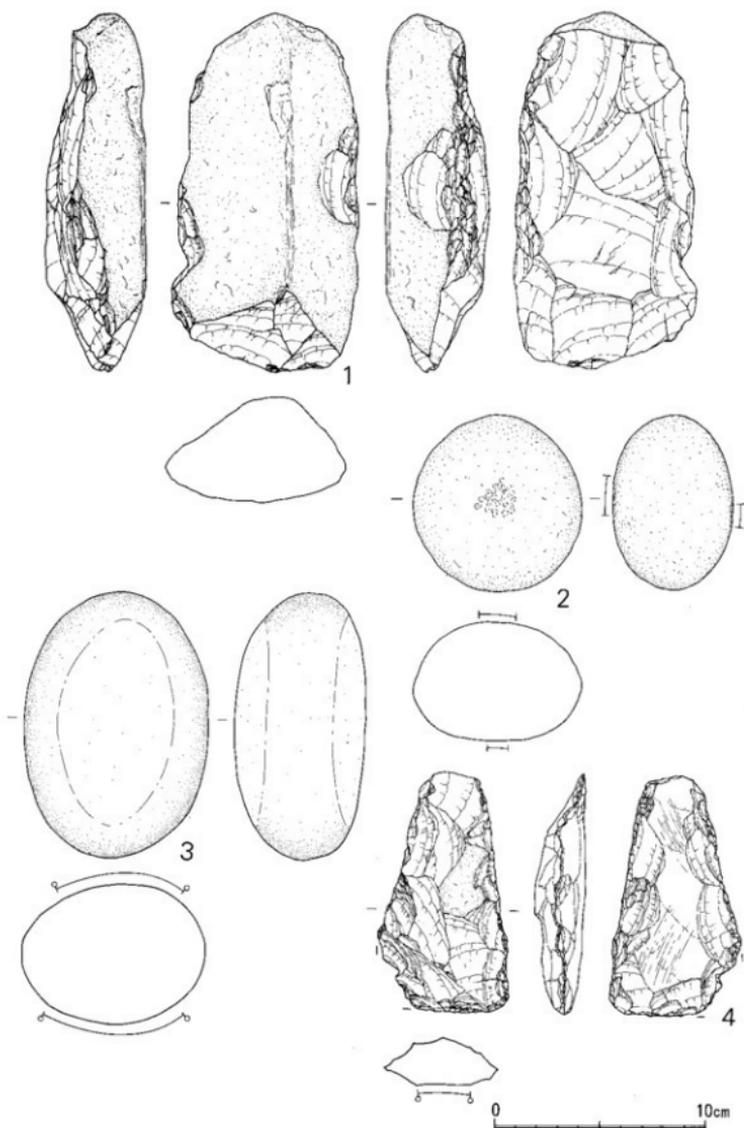
二等辺三角形を呈し、基部は山形状に挟入されたものである。(7~12)は、一辺の長さ2cm前後を測り、片脚や先端部を欠損するものを含み、完形品は(8・10・12)の3点である。どれも押し剥離による加工は粗く、また、形に歪みのある粗製品。(13~15)は一辺の長さ3cmを測る大型



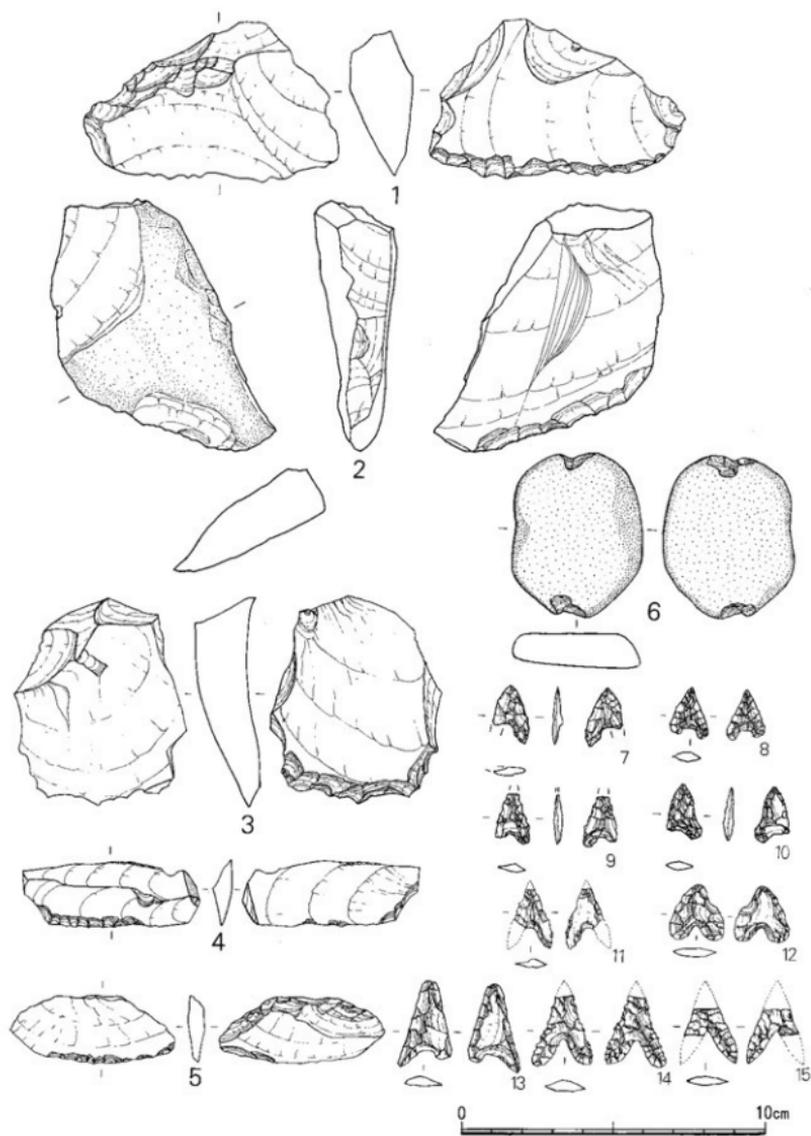
第132图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土石器



第133图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土石器



第134图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土石器



第135图 大宮・宮崎遺跡B-3区出土石器

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第39表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第121図1	89	深鉢胴部	38	淡灰黄色、磨 消縄文、R L	暗黄灰色 横撫で滑らか	長石 石英 粒粒	良好
2	表採	深鉢口縁部	21	黄褐色 縄文 R L	黄褐色 横撫で滑らか	長石 石英 雲母 粒粒	良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	18	暗黄褐色 縄文 R L	暗黄褐色 横撫で滑らか	長大 石 粒粒	不良
4	551	深鉢口縁部	46	暗茶褐色 縄文 L R	赤褐色 横撫で滑らか	長石 石英 粒粒	良好
5	328	深鉢口縁部	27	黄茶褐色 縄文 R L	黄茶褐色 横撫で滑らか	長石 石英 雲母 粒粒	良好
6	502	深鉢口縁部	24	暗茶褐色 撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好
7	12	深鉢胴部	27	黄茶褐色 縄文 L R	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好
8	21	深鉢胴部	24	暗茶褐色 縄文 L R	灰茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好
9	ベルト内	深鉢胴部	27	黒褐色 縄文 L R	黒褐色 横撫で滑らか	細長 砂 金 雲母 粒粒	良好
10	194	深鉢胴部	25	灰茶色 縄文 L R	灰茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好
11	583	深鉢胴部	21	黒褐色、スス付 着。縄文 L R	黒褐色 横撫で滑らか	細長 砂 金 雲母 粒粒	良好
12	表採	深鉢胴部	27	赤褐色 縄文 L R	赤褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好
13	ベルト内	深鉢胴部	19	黒褐色 縄文 L R	赤褐色 横撫で滑らか	長石 石英 雲母 粒粒	良好
14	525	深鉢胴部	34	黒褐色 縄文 L R	黒褐色 横撫で滑らか	長石 石英 雲母 粒粒	良好
15	表採	深鉢胴部	27	黒褐色 縄文 R L	黒褐色 横撫で滑らか	細長 砂 金 雲母 粒粒	良好
16	486	浅鉢口縁部	28	黒褐色 縄文 R L	赤褐色 横撫で滑らか	長石 石英 雲母 粒粒	良好
17	ベルト内	浅鉢口縁部	29	黒褐色 縄文 R L	黒褐色 横撫で滑らか	細長 砂 金 雲母 粒粒	良好
18	表採	浅鉢口縁部	35	赤褐色 縄文 L R	赤褐色 横撫で滑らか	細長 砂 金 雲母 粒粒	良好
19	130	浅鉢口縁部	22	黒褐色、磨消 縄文 R L	黒褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好
20	表採	浅鉢口縁部	27	赤褐色 縄文 L R	赤褐色 横撫で滑らか	細長 砂 石 粒粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第40表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第122図1	478	浅鉢口縁部	27	赤褐色、縄文LR、 スス付着	赤褐色 横撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
2	390	浅鉢口縁部	27	灰黄茶色 縄文LR	灰黄茶色 横撫で滑らか	細 砂	粒粒 良好
3	656	深鉢口縁部	19	黒褐色、スス付 着、縄文RL	赤褐色 横撫で滑らか	金雲母 石	粒粒 良好
4	172	深鉢口縁部	20	灰黄褐色、スス 付着、縄文LR	灰茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
5	482	浅鉢口縁部	21	赤茶褐色、篋研 磨、縄文LR	赤茶褐色 篋研磨	細 砂	粒粒 良好
6	表採	浅鉢胴部	17	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
7	556	浅鉢胴部	?	黄褐色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細 砂石	粒粒 良好
8	431	浅鉢口縁部	40	淡黄褐色、篋撫 で、縄文LR	淡黄茶色 篋撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
9	68	深鉢口縁部	23	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細 砂	粒粒 良好
第123図1	表採	深鉢口縁部	27	赤褐色、篋撫で滑 らか、縄文LR	灰茶褐色 篋撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
2	13	深鉢口縁部	32	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細 砂石	粒粒 良好
3	表採	深鉢口縁部	22	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細 砂	粒粒 不良
4	表採	深鉢胴部	28	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
5	507	深鉢胴部	30	黒褐色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細長 砂石	粒粒 良好
6	ベルト内	深鉢胴部	?	赤褐色 撫で滑らか	赤茶褐色 撫で滑らか	細 砂	粒粒 良好
7	ベルト内	浅鉢口縁部	17	灰茶色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細 砂	粒粒 良好
8	ベルト内	浅鉢口縁部	17	灰茶色、縄文RL、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細 砂	粒粒 良好
9	527	深鉢口縁部	30	赤褐色、スス付 着、縄文LR	赤褐色 篋撫で滑らか	金雲母 石	粒粒 良好
10	527	深鉢口縁部	30	赤褐色、スス付 着、縄文LR	赤褐色 篋撫で滑らか	金雲母 石	粒粒 良好
11	105	深鉢胴部	27	赤褐色 縄文LR	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒・長石 金雲母	粒粒 良好
12	180	深鉢胴部	20	赤褐色 縄文LR	黒褐色 撫で滑らか	長細 砂石	粒粒 良好
第124図1	169	深鉢口縁部	28	黒褐色、スス付着、 縄文LR、篋撫で	暗茶褐色 篋撫で滑らか	金雲母 石	粒粒 良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第41表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第124図2	368	深鉢口縁部	29	暗茶褐色、縄文RL、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石 雲母粒	良好
3	表採	深鉢口縁部	25	暗茶褐色 縄文LR、撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	表採	深鉢口縁部	21	赤褐色、スス付 着、縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 雲母粒	良好
5	460	深鉢口縁部	21	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
6	ベルト内	深鉢口縁部	27	赤褐色、スス付着、 縄文LR、撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	ベルト内	深鉢口縁部	27	黄赤褐色 縄文RL	黄赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
8	461	深鉢口縁部	21	赤褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	長石 細砂粒	良好
9	表採	深鉢口縁部	29	灰茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	14	深鉢口縁部	30	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂石粒	良好
11	45・445 187・180	深鉢口縁部 胴部	21.5 21.5	赤茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 飽撫で滑らか	細砂粒	良好
12	164	深鉢口縁部	23	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	50	深鉢口縁部	27	灰茶褐色、スス付 着、横撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
14	46	深鉢口縁部	28	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細長 砂石粒	不良
15	194	深鉢口縁部	24	黄褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	大粒砂	不良
16	322	深鉢口縁部	33	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第125図1	116 69	深鉢口縁部 胴部	28 24	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長石 石英粒	良好
2	52	深鉢口縁部	27.5	赤茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石 石英粒	良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	27	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	表採	深鉢口縁部	30	赤褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細長 砂石粒	良好
5	156	深鉢口縁部	25	茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第42表)

図番号	遺物記録No	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第125図6	303	深鉢口縁部	36	灰茶色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	358	深鉢口縁部	30	黄灰茶色、縄文LR、 撫で滑らか	黄灰茶色 横撫で滑らか	長石 石英粒	良好
8	ベルト内	深鉢口縁部	21	黒褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
9	ベルト内	深鉢口縁部	26	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
10	48	深鉢口縁部	25	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
11	表採	深鉢口縁部	?	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
12	168	深鉢口縁部	14	灰茶褐色、縄文RL、 撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	ベルト内	深鉢口縁部	26	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細長砂粒	良好
14	表採	深鉢口縁部	26	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石 金雲母粒	良好
15	69	深鉢口縁部	25	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
16	表採	深鉢口縁部	30	淡黄茶色 縄文RL	淡黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
17	表採	深鉢口縁部	21	赤褐色、縄文LR、 鏡研磨	赤褐色 鏡撫で滑らか	長石 金雲母粒	良好
18	434	深鉢口縁部	29	暗赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第126図1	492	深鉢口縁部	25	暗茶褐色、ス付着、 縄文LR、滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
2	表採	深鉢口縁部	38	黄褐色 撫で滑らか	暗灰茶色 撫で滑らか	細黒雲母粒	良好
3	367	深鉢口縁部	19	灰茶褐色 鏡研磨	灰茶褐色 鏡研磨	細長砂粒	良好
4	表採	深鉢口縁部	23	灰茶色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細黒雲母粒	良好
5	307	深鉢口縁部	37	灰茶褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細黒雲母粒	良好
6	303	深鉢口縁部	40	暗茶褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細黒雲母粒	良好
7	165	深鉢口縁部	27	赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第43表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土			焼成
				外 面	内 面	細	砂	石	
第126図8	108	深鉢胴部	32	暗茶褐色、スス付着、 縄文L.R.、撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
9	395	深鉢胴部	37	茶褐色 縄文R.L.	茶褐色 横撫で滑らか	長大	石	粒砂	良好
10	132	深鉢胴部	32	暗赤褐色 撫で滑らか	暗赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
11	130	深鉢胴部	28	黄赤褐色 撫で滑らか	黄赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
12	408	深鉢胴部	38	黒褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細黒	砂	雲母粒	良好
13	369	深鉢胴部	31	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
14	181	深鉢胴部	?	赤褐色、縄文L.R. 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
15	43	深鉢胴部	30	赤褐色 縄文R.L.	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
16	46	深鉢胴部	27	赤褐色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
17	369	深鉢胴部	33	暗茶褐色 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
18	369	深鉢胴部	33	暗茶褐色 横撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
19	表採	深鉢胴部	20	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
20	ベルト内	深鉢胴部	21	黄茶色、スス付着、 撫で滑らか	黄茶色 撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
21	50	深鉢胴部	27	黄褐色 縄文L.R.	灰茶色 撫で滑らか	細	砂	粒	良好
22	470	深鉢胴部	31	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細黒	砂	雲母粒	良好
第127図1	ベルト内	深鉢胴部	26	暗茶褐色 縄文L.R.	暗茶褐色 横撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好
2	396	深鉢胴部	11	暗茶褐色、スス付着、 貝殻疑似縄文	暗茶褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
3	374	深鉢胴部	25	茶褐色 縄文L.R.	黒褐色 横撫で滑らか	長細	石	砂粒	良好
4	136	深鉢胴部	21	灰茶褐色 縄文L.R.	灰茶褐色 横撫で滑らか	細	砂	粒	良好
5	356	深鉢胴部	25	暗茶褐色 撫で滑らか	黄茶褐色 撫で滑らか	細長	砂	石粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第44表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第127図6	547	深鉢胴部	21	黄褐色 縄文RL	黄褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
7	104	深鉢胴部	20	赤褐色 縄文LR	赤褐色 撫で滑らか	細金雲母粒	良好
8	192	深鉢胴部	21	黄茶褐色 縄文RL	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	112	深鉢胴部	32	黒褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	105	深鉢胴部	29	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母	良好
11	355	深鉢胴部	29	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母	良好
12	572	深鉢胴部	30	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	560	深鉢胴部	24	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
14	46	深鉢胴部	21	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
15	390	浅鉢口縁部	24	黒褐色、縄文 LR、篋研磨	黒褐色 篋研磨	細砂粒	良好
16	154	浅鉢口縁部	29	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細長砂粒	良好
17	349	浅鉢口縁部	24	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細長砂粒	良好
18	表採	浅鉢口縁部	25	黄茶褐色 撫で滑らか	黄茶褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
19	表採	浅鉢口縁部	30	黒褐色 縄文LR	黒褐色 篋撫で滑らか	細長砂粒	良好
20	ベルト内	浅鉢口縁部	23	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 篋撫で滑らか	細砂粒	良好
21	506	浅鉢口縁部	32	淡黄色 篋研磨	淡黄色 篋研磨	細砂粒	良好
22	ベルト内	深鉢口縁部	14	黒褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
23	481	深鉢口縁部	32	赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
24	表採	深鉢口縁部	25	黒褐色、縄文RL、 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
第128図1	ベルト内	深鉢胴部	25	黄褐色、スス付 着、縄文RL	灰黄色 撫で滑らか	金雲母粒 長石	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第45表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外 面	内 面		
第128図2	507	深鉢胴部	32	淡黄色、甌文RL、 撫で滑らか	黄灰色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	331	深鉢胴部	18	灰黄茶、甌文RL、 撫で滑らか	灰黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	346	深鉢胴部	28	灰茶色 縦文RL	灰茶色 横撫で滑らか	長細石粒	良好
5	477	深鉢胴部	24	黄茶色、甌文RL、 撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
6	110	深鉢胴部	20	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
7	321	深鉢胴部	25	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
8	479	深鉢胴部	17	黒褐色、甌文RL、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細金雲母粒	良好
9	352	深鉢口縁部	23	茶褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
10	ベルト内	深鉢口縁部	20	黒褐色、スス付着、 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
11	155	深鉢口縁部	20	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	508	深鉢口縁部	19	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	ベルト内	深鉢口縁部	15	淡灰黄色、スス付着、 横撫で滑らか	白茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
14	24	深鉢口縁部 胴部	21	淡灰黄色 横撫で滑らか	淡灰黄色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
15	ベルト内	深鉢口縁部	16	淡白色 横撫で滑らか	淡白色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
16	表採	深鉢口縁部	28	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第129図1	表採	深鉢口縁部	40	茶褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細長石粒	良好
2	158	深鉢口縁部	24	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
3	表採	深鉢口縁部	26	黄赤褐色 横撫で滑らか	黄赤褐色 横撫で滑らか	長細石粒	良好
4	45	深鉢口縁部	34	灰茶色、横撫 で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長金雲母粒	良好
5	128	深鉢口縁部	25	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第46表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成	
				外面	内面			
第129図6	25	深鉢口縁部	25	黄茶褐色 横撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石	粒粒	良好
7	545	深鉢胴部	28	黄茶色、ス付着、 横撫で滑らか	淡赤褐色 横撫で滑らか	細石	砂英粒	良好
8	表採	深鉢胴部	24	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細長	砂石粒	良好
9	171	深鉢胴部	13	赤褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細	砂粒	良好
10	表採	浅鉢口縁部	30	黄褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細	砂粒	良好
11	表採	浅鉢口縁部	15	暗茶褐色 横撫で滑らか	黄茶色 横撫で滑らか	長金雲母	石粒	良好
12	ベルト内	浅鉢口縁部	21	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細	砂粒	良好
13	496	浅鉢口縁部	20	暗灰色 鏡研磨	暗灰色 鏡研磨	細	砂粒	良好
14	398	浅鉢口縁部	22	赤茶褐色 鏡研磨	赤茶褐色 鏡研磨	細	砂粒	良好
15	89	深鉢口縁部	27	黒褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細黒雲母	砂粒	良好
16	表採	深鉢口縁部	26	赤褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長黒雲母	石粒	良好
17	表採	深鉢口縁部	30	赤褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細長	砂石粒	良好
第130図1	ベルト内	深鉢口縁部	28	茶褐色 横撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細	砂粒	良好
2	15	深鉢口縁部	35	暗茶褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長	砂石粒	良好
3	ベルト内	深鉢口縁部	32	黒褐色 横撫で滑らか	白黄色 横撫で滑らか	黒雲母	砂粒	良好
4	347	深鉢口縁部	27	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細長	砂石粒	良好
5	44 50	浅鉢口縁部	27	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細長	砂石粒	良好
6	334	浅鉢口縁部	34	暗茶褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	大	粒砂	良好
7	ベルト内	注口土器 口縁部	9	黒灰色、鏡研磨、 貝殻疑似縄文	灰色 横撫で滑らか	細	砂粒	良好
8	ベルト内	注口土器 口縁部	9	黄灰茶色、鏡 研磨光沢あり	灰色 横撫で滑らか	細	砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第47表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第130図9	ベルト内	注口土器 外径 注口部 内径	4.3 2.1	黄茶褐色 撫で滑らか	黄茶褐色 撫で滑らか	細長砂石	粒粒 不良
10	163	底部	7.5	赤褐色 撫で滑らか	黄灰色 撫で滑らか	細砂	粒粒 良好
11	201	底部	7.0	赤褐色 撫で滑らか	黄灰色 撫で滑らか	細砂	粒粒 良好
12	ベルト内	底部	5.5	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
第131図1	ベルト内	底部	4.0	黄灰色 撫で滑らか	黄灰色 撫で滑らか	細砂	粒粒 良好
2	ベルト内	底部	4.0	黄褐色 撫で滑らか	灰茶黑色 撫で滑らか	細砂	粒粒 良好
3	51	底部	6.5	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂	粒粒 良好
4	41	底部	6.5	淡黄茶色 撫で滑らか	淡黄茶色 撫で滑らか	長大石	粒粒 砂砂 良好
5	302	底部	7.0	赤褐色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
6	表採	底部	6.5	淡黄茶色 撫で滑らか	淡黄茶色 撫で滑らか	大粒	砂砂 良好
7	580	底部	7.0	赤褐色、スス付着、撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石	粒粒 良好
8	121	底部	5.5	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	長石 石英	粒粒 良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第48表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第132図1	499	石材核	21.5	14.8	8.0	2,893	頁岩	中央両面に自然面残す。剥離面剥離。
2	315	石材核	13.7	11.6	7.9	1,179	頁岩	中央両面に自然面残す。剥離面剥離。
3	表採	石材核	5.5	4.2	3.4	64.12	頁岩	小型自然礫素材、自然面残す。
4	ベルト内	石材核	5.8	3.2	2.7	59.35	頁岩	小型自然礫素材、自然面残す。
5	ベルト内	叩石	8.3	6.0	3.2	45.12	砂岩	自然礫素材、黄茶色風化変色。

大宮・宮崎遺跡B-3区出土石器観察表(第49表)

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第133図1	360	石材核	10.4	7.6	3.4	210.00	頁岩	青黑色、自然面残す、剥離面鋭利
2	110	石材核	9.9	7.3	4.6	370.00	頁岩	青黑色、自然面を片面に残す、剥離面鋭利
3	92	石材核	8.9	8.1	3.6	310.00	頁岩	青黑色、片面に自然面残す、剥離面鋭利
4	421	石材核	12.2	8.6	5.7	860.00	頁岩	灰黑色、両面に自然面残す、剥離面鋭利
5	340	石材核	9.2	8.1	2.8	200.00	頁岩	青黑色、肉厚剥片素材、剥離面鋭利
6	432	石材核	10.4	9.2	3.9	380.00	頁岩	青黑色、片面に自然面残す、剥離面鋭利
第134図1	ベルト内	打製石斧 未製品	16.9	8.8	4.8	831.84	頁岩	片面に幅広く自然面残す
2	57.5	叩石	8.4	8.0	5.6	505.27	砂岩	自然円礫素材、両面中央に打痕あり
3	表採	磨石	12.6	8.6	6.6	966.82	砂岩	楕円形礫素材、両面中央に研磨痕残る
4	141	打製石斧	11.4	6.2	1.4	144.77	頁岩	撥形、刃部片端欠損
第135図1	表採	スクレイパー	8.2	5.2	2.1	9.50	頁岩	肉厚縦長剥片素材
2	148	スクレイパー	8.3	7.4	2.7	116.91	頁岩	縦長剥片素材
3	ベルト内	スクレイパー	6.7	5.6	2.0	70.0	頁岩	青黑色、縦長剥片素材
4	表採	スクレイパー	5.8	2.1	0.6	8.10	頁岩	縦長剥片素材、片面加工
5	表採	スクレイパー	5.4	2.2	0.5	6.10	頁岩	縦長剥片素材、片面加工
6	671	石錘	5.4	4.3	1.1	30.15	砂岩	完形、扁平自然礫素材
7	ベルト内	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.40	サヌカイト	片脚欠損
8	ベルト内	石鏃	1.7	1.2	0.3	0.50	姫島産石	完形
9	205	石鏃	1.6	1.1	0.3	0.38	サヌカイト	先端欠損
10	ベルト内	石鏃	1.8	1.2	0.4	0.37	サヌカイト	完形

大宮・宮崎遺跡B-3区出土石器観察表(第50表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第135図11	表採	石 鎌	2.0	1.1	0.2	0.4	頁 岩	灰茶色風化変色、片脚欠損
12	576	石 鎌	1.8	1.77	0.25	0.7	サヌカイト	完形
13	ベルト内	石 鎌	3.0	1.6	0.3	1.2	頁 岩	黄茶色風化変色、完形
14	ベルト内	石 鎌	2.3	2.0	0.4	1.1	頁 岩	灰白色風化変色、先端欠損
15	577	石 鎌	1.8	1.3	0.21	0.4	頁 岩	灰白色風化変色、先端・片脚欠損

鎌で、(13)は完形(14)は先端部を、(15)は先端と片脚を欠損している。押圧剥離による加工は(13)が粗く、(14・15)は入念で長く作出された脚部は太い(14)と脚端が鋭く尖る(15)をみる。

(12) B-4区の出土遺物

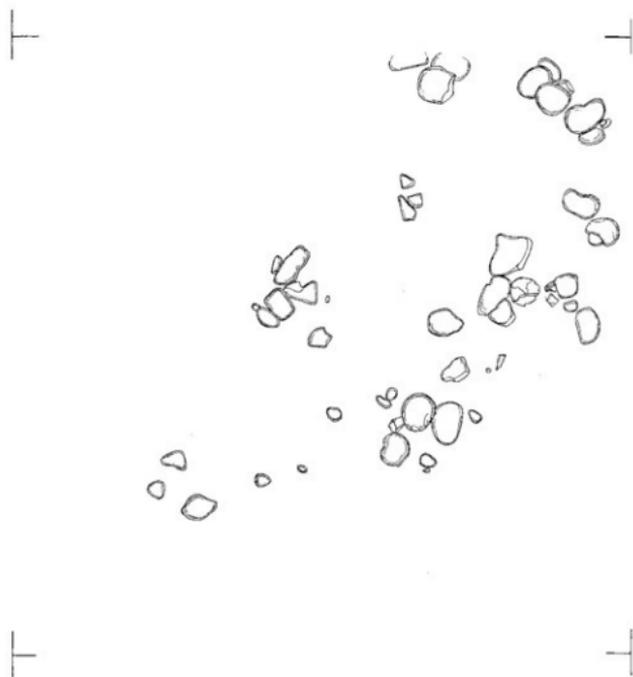
本地区には配石遺構と確かに認められるものはない。ただし、本地区の北半分には最大径20cm～30cm、大きなもので40cm前後の円形、楕円形を呈する扁平自然礫が散在的ではあるが弧状を描き見られる。これらは本来、円環状に配置された配石を形成していた可能性もないでもなく、それが後世、何らかの作用で現状の如く形を変えたものと見られるものである。遺物も、この配石内、または周辺に集中し出土している。一方、本地区の東南隅にも遺物の集中個所を見る。その遺物で主体をなすのは、土器では第4D類で、第4B類、第4C類や、第5A・B・C類が少量出土し、第6A類も1点みられる。石器は石材核が意外と少なく石鎌が比較的多い(第136図)。

土器(第137図～第139図)

第4B類(第137図1～5・7・8・17)

深鉢、浅鉢がみられ、共に平口縁と波状口縁をみる。深鉢平口縁(1)は、口縁部片で「く」字状に内折さす口縁端部はわずかに肥厚させ丸みを持つ。外面には縄文LRを施し、その面に3条の沈線を巡らし、内2条が平行横直線、1条は波状に描かれている。なお、これの内面にも文様帯を持ち、縄文を地文とする面に押し引き状の刺突文が口縁に平行し連続施文されている。(2・17)は深鉢の波状口縁部片で、前者の器壁は「く」字状に内折し内側を肥厚させ端部は丸みをなす。波頂部を欠損するが、外面には縄文LRが施され、その面に平行横直線2条と、その下位に1条が波状に描かれている。後者は波頂部をとどめる資料で、器壁は内湾させて立ち上がり、端部は肥厚し丸みをなす。これの波頂部には粘土紐貼付文を持ち、表面に刻目がみられ、外面には2条の平行沈線が描かれている。

第137図(7・8)は深鉢の胴部片で、外面には共に縄文RLが施され、その面に2条の平行横直線と、3条の斜行沈線がシャープに描かれている。

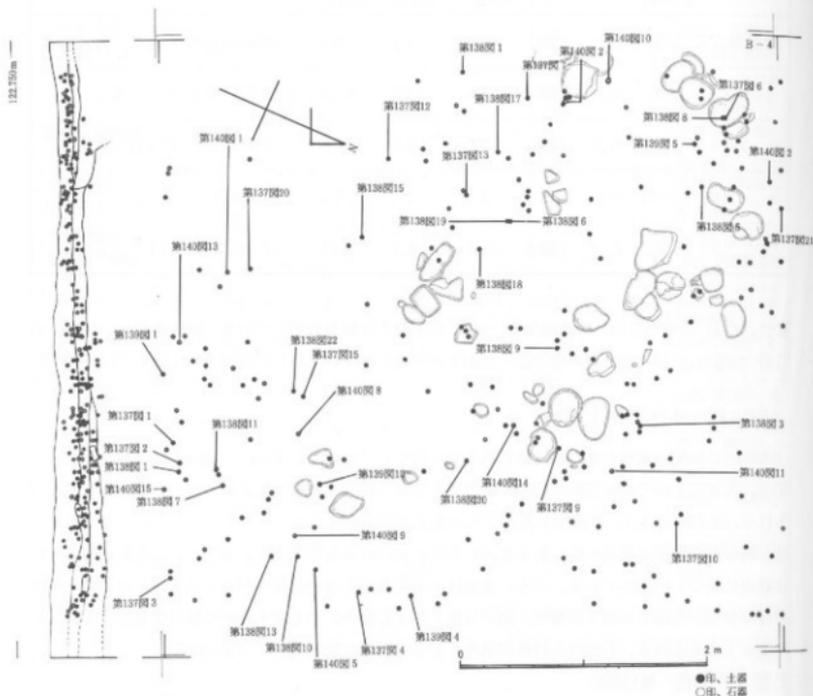


第136図 B-4区出土遺物平面、垂直分布実測図

浅鉢（第137図3～5）、総て口縁部片で、（3）は波状口縁を呈し、器壁は緩く内湾し立ち上がり、端部は尖り気みとなる。外面には縄文RLを幅広く持ち、その面に2条の平行沈線が描かれている。（4・5）は共に「く」字状に緩く内折させ、口縁は内湾気みに立ち上がり、端部は尖り気みに丸みをなす。外面には縄文LRを施し、その面に（4）は逆三角形文様が描かれていたものであろう斜行沈線がみられる。（5）は6条の平行横直線文の中間に縦位の短直線を描き長方形区画文を形成し文様構成する。

第4C類（第137図6・9～13）

深鉢の口縁部片と1点の胴部片を含む。口縁は総て平口縁を呈し、器壁は「く」字状に緩く内折させ、端部はわずかに肥厚させ丸みをなし、頸部は長く弓状に外反している。口縁外面には縄文LR



第136図 B-4区出土遺物平面、垂直分布実測図

浅鉢（第137図3～5）、絶て口縁部片で、（3）は波状口縁を呈し、器壁は緩く内湾し立ち上がり、端部は尖り気みとなる。外面には縄文RLを幅広く持ち、その面に2条の平行沈線が描かれている。（4・5）は共に「く」字状に緩く内折させ、口縁は内湾気みに立ち上がり、端部は尖り気みに丸みをなす。外面には縄文LRを施し、その面に（4）は逆三角形文様が描かれていたものであろう斜行沈線がみられる。（5）は6条の平行横直線の間縦位の短直線を描き長方形区画文を形成し文様構成する。

第4C類（第137図6・9～13）

深鉢の口縁部片と1点の胴部片を含む。口縁は絶て平口縁を呈し、器壁は「く」字状に緩く内折させ、端部はわずかに肥厚させ丸みをなし、頸部は長く弓状に外反している。口縁外面には縄文LR

が施され、その面に2条の平行横直線が描かれるが、(9)に限っては3条沈線がみられ、内面には帯縄文と、その面に押し引き状の刺突文が連続施文されている。同じ内面文様は(10)にもみられ、(12)は外面の沈線間に勾玉状の刺突文をみる。胴部(6)は、上段に2条の平行沈線、下段には1条沈線が引かれ、その沈線間に3条単位の斜行沈線を描き逆三角形文を構成する。本資料の沈線末端には、刺突文が付され特徴的である。

第4D(第137図14~21、第138図1~6)

深鉢、浅鉢があり、両者共に平口縁と波状口縁をみる。深鉢波状口縁(第137図14)は、波頂部を欠損している。外面には縄文LRが施され、その面に3条単位の平行沈線が巡り、波頂部直下で1条沈線が横位に引かれ、その末端に勾玉状の刺突文が付され、3条沈線間には斜行刻目文が連続施文されている。深鉢平口縁(第137図15・16・21)外反する長い頸部を持ち「く」字状に内折さず口縁は小さく萎縮退化している。外面には2~3条の平行横直線を巡らし、その沈線間に斜行刻目文が連続施文されている。(第137図19・20、第138図1~6)は深鉢胴部片で、器形は緩く膨らみを持つものから球状に膨張さす(5)などをみる。縄文LRを施す外面には3条~7条までの平行横直線が描かれ、これらの沈線間には連続斜行刻目文を1段ないしは2段巡らすもの、「C」字状文を左右対向させ「X」字状文を付すものなどがみられる。中には1条沈線を波状に描く(第138図5・6)も含まれている。

浅鉢(第137図18)は、緩い波状をなす口縁部片で、器形は「く」字状に内曲させ、外面には4条の平行横直線が描かれ、沈線間には列点刺突文が施されている。

第4E類(第138図7~14)

総て深鉢で、口縁と胴部片である。口縁は平縁、波状がみられ、中には完形復元可能なミニチュア土器1点が含まれている。

深鉢平口縁(7・8)は緩く外傾し、端部は平坦気みに作られ、外面の縄文は(7)がRL、(8)はLRで幅広く施されている。深鉢波状口縁(9)は器壁は外傾し、端部は尖り気みとなり、外面には貝殻疑似縄文をみる。

第138図(10)は口径7.0cm、器高7.5cmを測る深鉢のミニチュア土器で、口縁は直線的に立ち上がるがわずかに外傾させ、端部は尖り胴部は緩く膨らみ丸底となる底部へと移行する。口縁外面と胴上半部に大粒の縄文RLが施されている。(11~14)の胴部片は、(12)が外反する頸部と胴上半部は膨張させ、他は緩く膨らむ器形を呈する。外面には縄文帯を幅広く持ち、(12)はLR、他は総てRLで(14)は大粒の縄文を縦走させている。

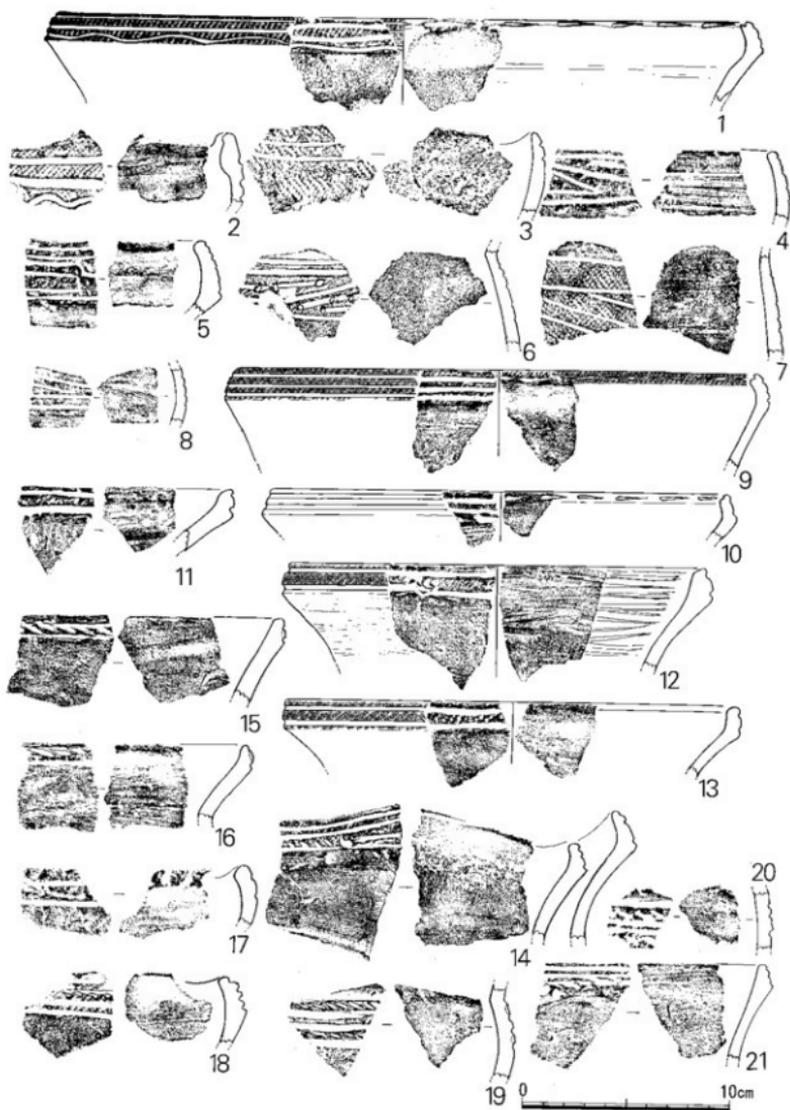
第5A類(第138図18~20)

深鉢の口縁部片で、外反、直立さす器形をなし、端部は丸く作られている。内面にみる凹線文は、口縁端部より少し下った位置にみる。

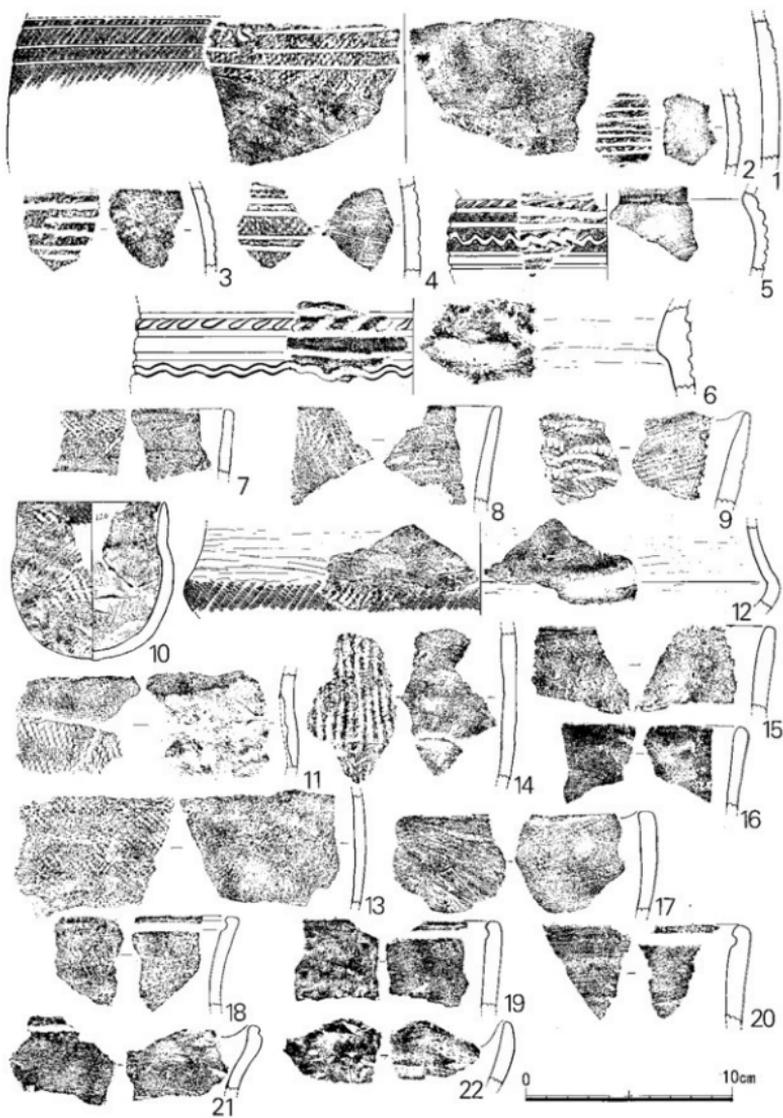
第5B類(第138図21)

深鉢の波状口縁部片で、長い頸部は外反し、口縁は緩く内曲させ端部は丸く作られている。口縁外面に描かれてる1条の凹線文は第5A類同様、端部より少し下った位置にみる。

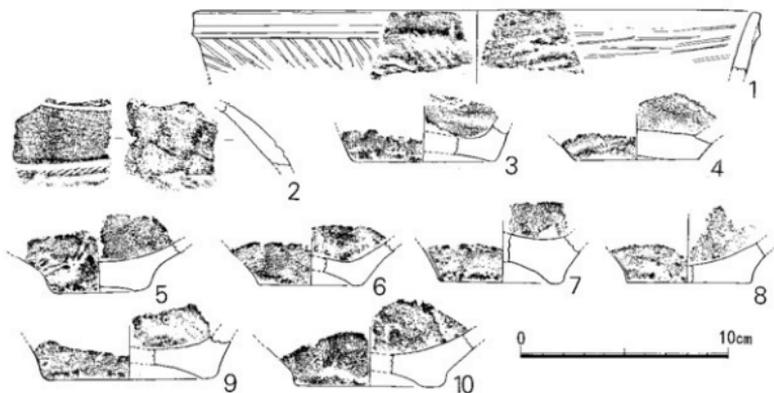
第5C類(第138図15~17・22)



第137图 大宮・宮崎遺跡B-4区出土土器



第138图 大宮・宮崎遺跡B-4区出土土器



第139図 大宮・宮崎遺跡B-4区出土土器

深鉢と浅鉢があり、前者は平口縁、後者は波状口縁を呈する。平口縁は外傾させ、端部は丸みをなすもの、平坦面を作るものである。波状口縁を呈する(17)は波状の傾斜が緩く、器壁は緩く内湾させ端部はわずかに肥厚し平坦面を持つ。(22)は波状の傾斜が強く、山形状に上げ、器壁は内湾し端部は尖る。

第6 A類 (第139図1)

深鉢の口縁部片1点で、器壁は外傾し、端部は平坦に作られている。外面には端部から少し下った位置に断面三角形を呈する背の低い小さな無刻目突帯文1条が貼付されている。外面の条痕は斜行させ、内面は横走させている。

注口土器 (第139図2)、口縁部片で、口縁端部を欠損する。器壁は内傾し、1条の細線が口縁端部直下に巡り、胴部の屈曲部直上に2条沈線を描き、この沈線間に細線で連続斜行文を施文している。

底部 (第139図3～10)

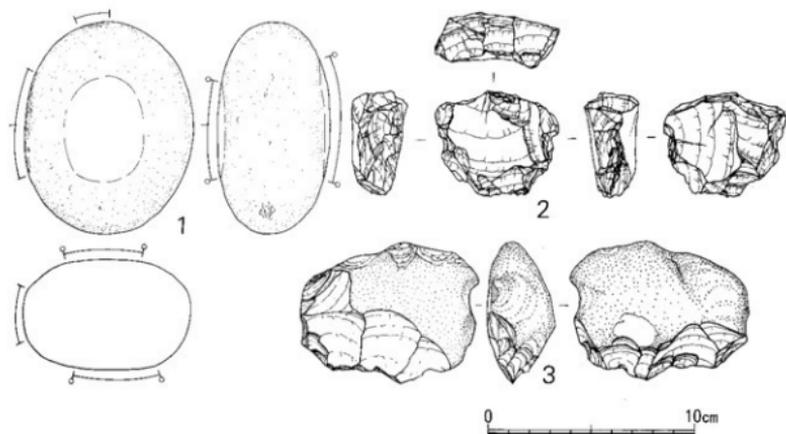
8点の底部は(8)が平底となる他は総て、外底が弧状に上がる上げ底を呈する。推定底径6cm～7cmを測るものが最も多く、最大8.5cm、最小は4.5cmである。

石器 (第140図～第141図)

石鏃を主体に磨石、叩石、スクレイパー、石錘、石材核、石錐などである。

磨石 (第140図1)

分厚な楕円形を呈する砂岩礫素材で、上面の平坦面に滑らかに磨耗した使用痕をとどめる。



第140図 大宮・宮崎遺跡B-4区出土石器

石材核 (第140図2・3)

小型の石材核で、(2)は分厚で板状となる剥片を素材とし、両面中央に第一次剥離面を幅広くとどめ、縁辺全周に小型の剥片剥離痕を残している。(3)は楕円形を呈する自然礫素材で、両面に幅広く自然面を残し、長軸一辺に交互剥離技法によって剥離された剥片剥離痕をとどめ、両面に小型横長剥片剥離痕を残す。

スクレイパー (第141図1~3)

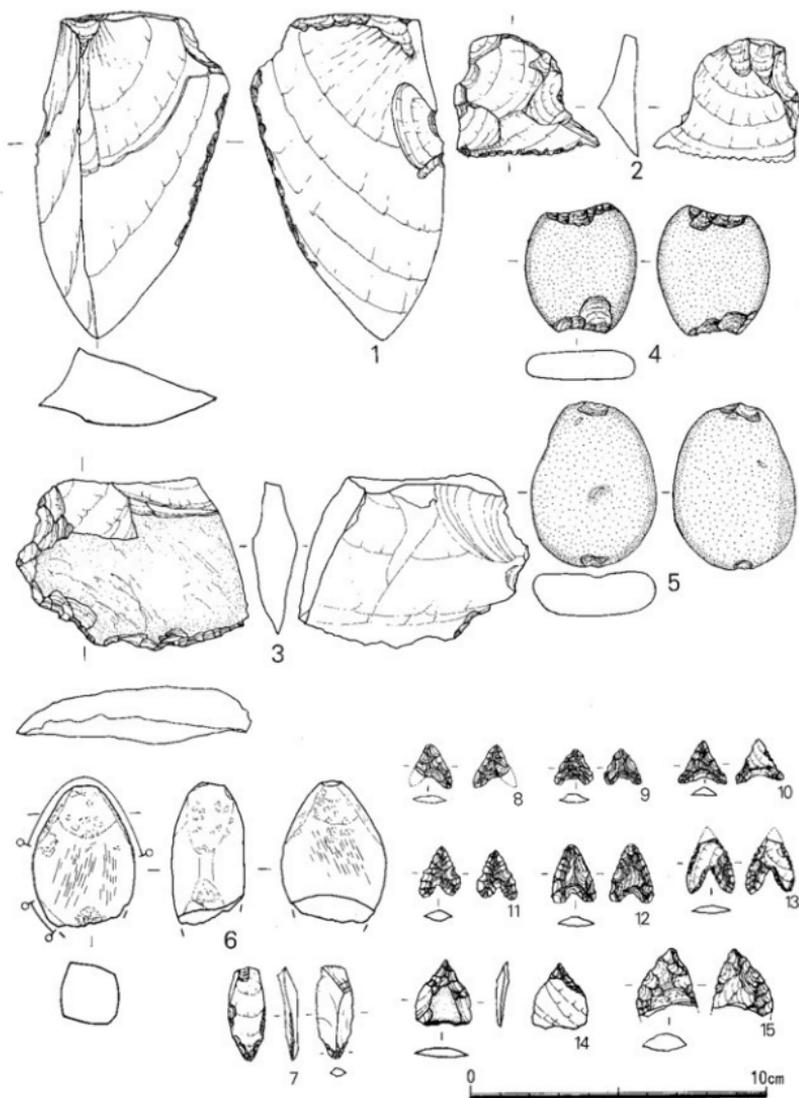
(1)は大型の分厚な縦長剥片素材で、木葉形を呈する片側縁に小さく押圧剥離を両面より加え直線的で鋭利な刃部を作出している。(2)は小型で不定形な横長剥片素材で長軸一辺に片面より細密な押圧剥離を加え鋸歯状となる刃部を形成する。(3)は分厚な横長剥片素材で、片面に第一次剥離面を幅広く、一方の面に自然面をそのままとどめ、長軸一辺に粗く片面加工によってジグザク状の刃部を作出する。

石錘 (第141図4・5)

長楕円形を呈する扁平な砂岩礫素材で、長軸両端部に打ち欠きを加え石錘としている。

叩石 (第141図6)

小型の楕円形を呈する砂岩礫素材で、使用痕を両端部の両側面と上面の表、裏2面に顕著にとどめ、上面観は丸みをなす菱形を呈する。これの中央上面は、両面共に磨石として使用され、細密な



第141图 大宮・宮崎遺跡B-4区出土石器

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第51表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第137図1	131	深鉢口縁部	34	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
2	114	深鉢口縁部	27	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
3	128	浅鉢口縁部	29	黄色 縄文RL	黄色 撫で滑らか	長石粒 大粒砂	良好
4	71	浅鉢口縁部	22	黒褐色、スス付 着、撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
5	表採	浅鉢口縁部	35	黒褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
6	183	深鉢胴部	24	赤褐色 縄文LR	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
7	47	深鉢胴部	35	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
8	表採	深鉢胴部	23	黄茶褐色 縄文RL	黄茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
9	45	深鉢口縁部	27	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
10	16	深鉢口縁部	21	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂石粒	良好
11	表採	深鉢口縁部	20	黄赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	160	深鉢口縁部	20	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
13	108	深鉢口縁部	21	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
14	ベルト内	深鉢口縁部	24	赤褐色、スス付 着、縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
15	130	深鉢口縁部	31	黒褐色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母粒	良好
16	表採	深鉢口縁部	30	赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
17	表採	浅鉢口縁部	23	黄褐色、表面 風化剥離	灰黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	不良
18	表採	浅鉢口縁部	32	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
19	表採	深鉢胴部	25	黒褐色、スス付 着、撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
20	52	深鉢胴部	?	茶褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	細長砂石粒	良好
21	198	深鉢口縁部	27	淡黄茶色 撫で滑らか	白茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-3区出土土器観察表(第52表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第138図	1	44 深鉢胴部	37	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	長石 金雲母 粒	良好
2	表採	深鉢胴部	?	赤褐色 縄文LR	赤褐色 撫で滑らか	細砂 粒	不良
3	79	深鉢胴部	21	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂 石粒	良好
4	表採	深鉢胴部	32	茶褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
5	184	深鉢胴部	15	黄褐色 縄文LR	黄褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
6	57	深鉢胴部	27	淡茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂 黒雲母 粒	良好
7	112	深鉢口縁部	23	灰茶色 縄文RL	灰茶色、横撫 で滑らか	細砂 粒	良好
8	183	深鉢口縁部	26	灰茶色 縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
9	196	深鉢口縁部	27	黒褐色、スス付 着、縄文LR	茶褐色 斜行条痕	細砂 長石 粒	良好
10	120	口縁 ミニ深鉢胴部 器高	7 8 7.5	灰茶色 縄文RL	灰茶色 撫で滑らか	細砂 金雲母 粒	良好
11	110	深鉢胴部	31	灰茶色 縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細砂 石粒	良好
12	124	深鉢胴部	29	茶褐色 縄文LR	茶褐色 横撫で滑らか	細砂 金雲母 粒	良好
13	137	深鉢胴部	23	灰茶色、スス付 着、縄文RL	灰茶色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
14	163	深鉢胴部	34	灰茶色 縦走縄文	灰茶色 撫で滑らか	大黒 雲母 粒	良好
15	97	深鉢口縁部	38	灰茶色 横撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂 石粒	良好
16	13	深鉢口縁部	27	灰茶褐色 横撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
17	180	深鉢口縁部	22	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂 金雲母 粒	良好
18	197	深鉢口縁部	18	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細砂 粒	良好
19	57	深鉢口縁部	28	黒褐色、スス付 着、横撫で滑らか	黄茶褐色、横撫 で滑らか	細砂 粒	良好
20	3	深鉢口縁部	21	灰茶色 横撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂 粒	良好
21	表採	深鉢口縁部	23	茶褐色 横撫で滑らか	茶褐色 横撫で滑らか	細砂 石粒	良好
22	50	浅鉢口縁部	12	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	石 石英 粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-4区出土土器観察表(第53表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第139図1	表採	深鉢口縁部	27.5	黒褐色 斜行条痕	灰茶褐色 斜行浅条痕	細砂粒	良好
2	ベルト内	注口上器 口縁部	21	灰茶色 飽研磨	灰茶色 飽研磨	細長砂粒	良好
3	132	底部	7.0	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂粒	良好
4	168	底部	6.0	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
5	9	底部	5.0	茶褐色 撫で滑らか	灰黒色 撫で滑らか	細砂粒	良好
6	表採	底部	5.5	黄褐色 撫で滑らか	黄褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好
7	表採	底部	6.0	黄色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	大粒砂	不良
8	491	底部	6.0	淡黄色 撫で滑らか	淡黄色 撫で滑らか	長石 雲母粒	良好
9	表採	底部	8.0	赤褐色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細長砂粒	良好
10	42	底部	7.5	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細長砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-4区出土石器観察表(第54表)

図番号	遺物 記録No	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第140図1	93	磨石	10.3	8.2	5.5	642.11	砂岩	楕円形礫素材、 両面中央に研磨 痕残す
2	90	石材核	5.1	6.0	2.7	86.91	頁岩	小型、全面に 剥離痕残す
3	表採	石材核	8.4	6.8	3.3	210	頁岩	青黒色、両面 に自然面残す
第141図1	ベルト内	スクレイパー	11.0	6.0	2.5	160	頁岩	縦長剥片素材、片 側面に刃部形成
2	ベルト内	スクレイパー	4.1	4.8	1.2	20	頁岩	縦長不定形剥 片素材
3	表採	スクレイパー	5.9	7.9	1.9	92.25	頁岩	片面に幅広く 自然面残す

大宮・宮崎遺跡B-4区出土石器観察表(第55表)

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第141図4	208	石 錘	4.4	3.7	1.0	35	砂 岩	完形
5	175	石 錘	5.6	4.2	1.4	50.7	砂 岩	完形
6	表採	叩 石	4.8	3.5	2.4	56.25	砂 岩	片端欠損
7	表採	石 錐	3.1	1.2	0.5	1.8	チャート	青黒色、光沢あり、 縦長剥片素材
8	85	石 鎌	1.6	1.1	0.2	0.3	サヌカイト	片脚欠損
9	84	石 鎌	1.3	1.3	0.3	0.3	サヌカイト	完形
10	158	石 鎌	1.7	1.6	0.3	0.3	サヌカイト	完形
11	159	石 鎌	1.9	1.4	0.3	0.5	姫島産 黒曜石	完形
12	ベルト内	石 鎌	1.9	1.45	0.25	0.6	サヌカイト	完形
13	141	石 鎌	1.9	1.6	0.3	0.6	頁 岩	灰緑色、先端 欠損
14	190	石 鎌	2.2	1.9	0.4	1.06	頁 岩	完形
15	157	石 鎌	2.5	2.0	0.6	2.0	頁 岩	基部欠損

線条痕を残している。

石錐(第141図7)

光沢を有するチャート製で、縦長剥片を素材とし、これの片端部に入念な押圧剥離を加え錐先端を作出している。

石鎌(第141図8～15)

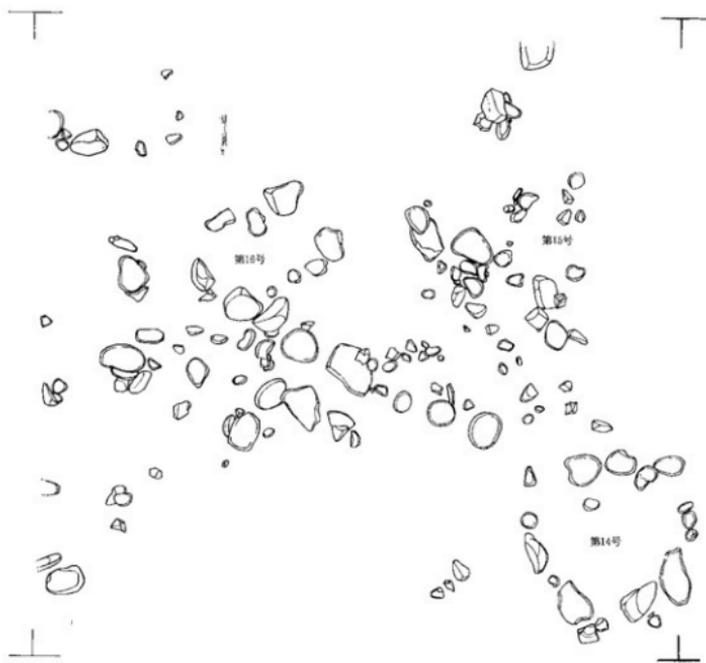
小型三角形鎌(8～10)と、二等辺三角形鎌(11～15)の2種に大別される。前者は一辺の長さ1.5cm前後を測り、基部は弧状に浅く抉られている。(10)は先端、両脚端共に尖り鋭く作られている。後者は、一辺の長さ2cm前後で、基部は(11～13)が山形状に抉られ、(14)はわずかに抉られ、(15)は基部を欠損している。これらは、押圧剥離による加工はどれも粗く、また形状が左右非対称となるなど粗製品で占められている。

(13) B-5 区の遺構と出土遺物

本地区には、北東隅に第14号配石、その西側に第15号配石、これの南側に接して第16号配石の3基が存在する。遺物は本地区の全域に出土し、土器、石器共に多く見られるものの、その出土割合はやや石器が勝る(第142図)。

第14号配石(第143図)

やや小規模な配石で、最大径25cm~30cm前後の扁平礫8個を円環状に配置したもので、直径約1.4mを測る。敷密には、8個の扁平礫の中に最大径40cmを測る長楕円形礫が1個含まれ、10cm前後の礫11個もこれらの礫の間に配置され形成している。中央部には礫はなく、広い空間を作り出している。内部からは第4C類深鉢口縁部片1点、叩石1点、石材核1点が出土している。



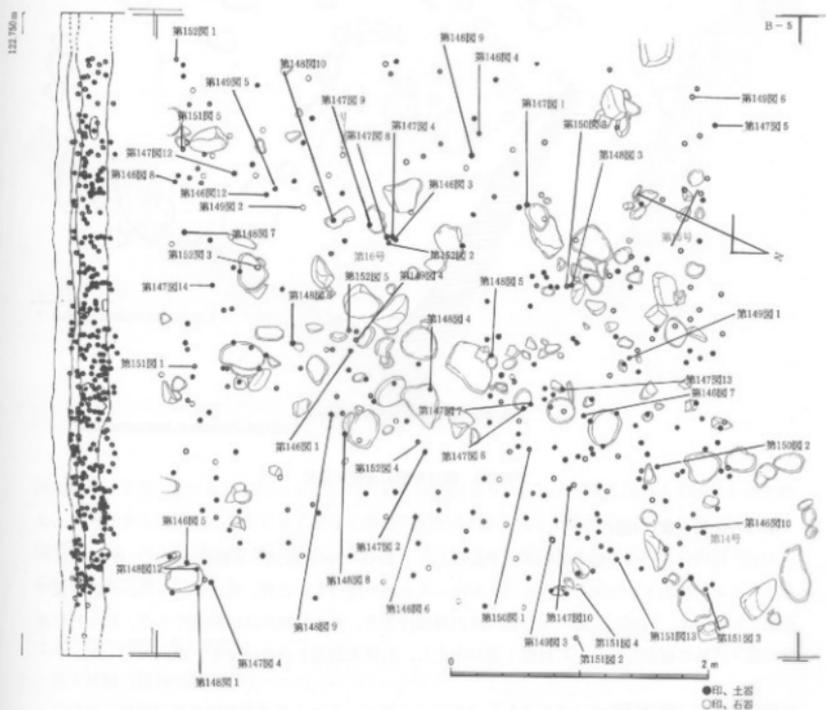
第142図 B-5区出土遺物平面、垂直分布実測図

(13) B-5 区の遺構と出土遺物

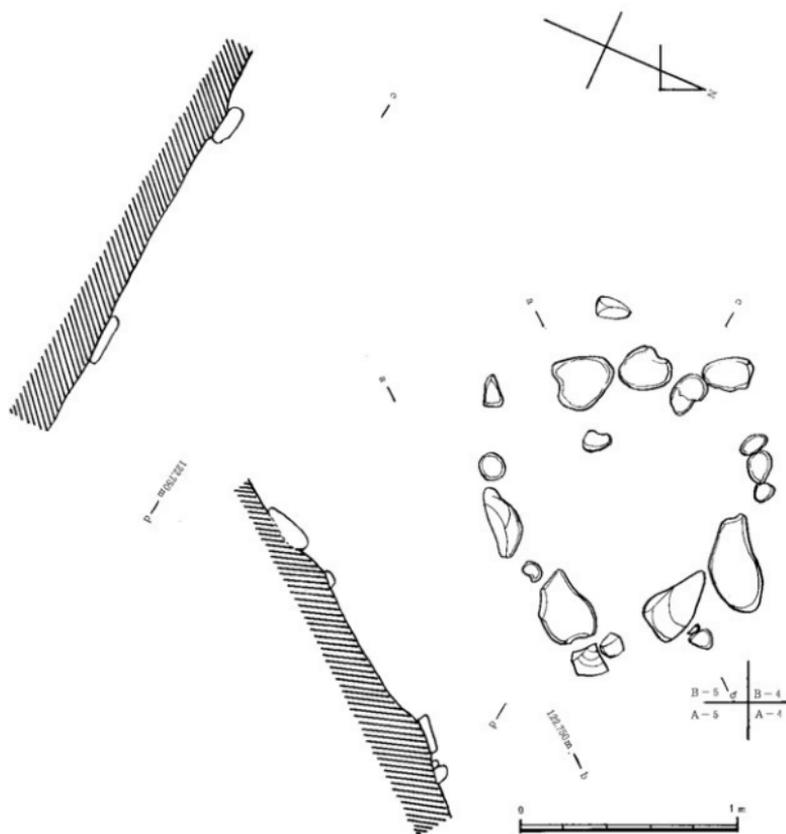
本地区には、北東隅に第14号配石、その西側に第15号配石、これの南側に接して第16号配石の3基が存在する。遺物は本地区の全域に出土し、土器、石器共に多く見られるものの、その出土割合はやや石器が勝る(第142図)。

第14号配石(第143図)

やや小規模な配石で、最大径25cm~30cm前後の扁平礫8個を円環状に配置したもので、直径約1.4mを測る。厳密には、8個の扁平礫の中に最大径40cmを測る長楕円形礫が1個含まれ、10cm前後の礫11個もこれらの礫の間に配置され形成している。中央部には礫はなく、広い空間を作り出している。内部からは第4C類深鉢口縁部片1点、叩石1点、石材核1点が出土している。



第142図 B-5 区出土遺物平面、垂直分布実測図



第143図 第14号配石遺構実測図

第15号配石 (第144図)

円形、楕円形を呈する扁平礫約50個を長径2.4m、短径1.6mに雑然と不整楕円形状に配置されたものである。使用された礫は最大径30cm前後の大きさを持つもの5個、他は10cm～20cm前後の礫で形成されている。内部からは第4 D類深鉢口縁部片3点、第4 C類深鉢口縁部片1点、第4 E類深鉢口縁・浅鉢口縁部片2点、石材核1点が出土し、石斧未製品1点の出土もある。

第16号配石 (第145図)

最大径30cm前後から10cm～20cm前後の大きさを持つ円形、楕円形扁平礫約40個を直径約2mの範



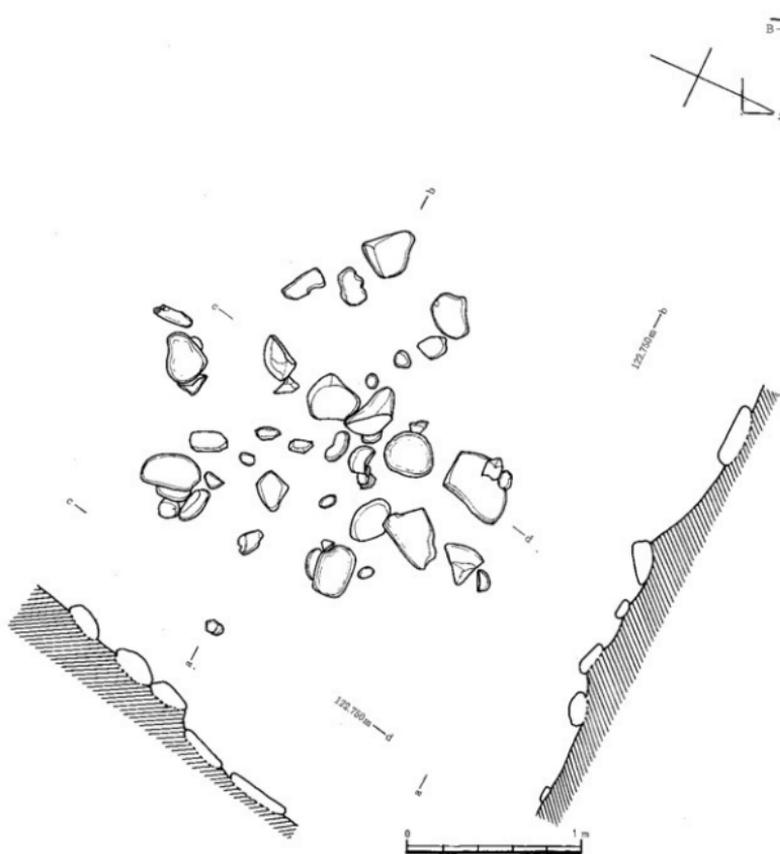
第144図 第15号配石遺構実測図

団に雑然と不整円形に配置したもので、中央部には空間はない。30cm前後を測る大型礫は11個を数え、中央部から周辺へと集中することなく満遍に配置されている。内部からは第4 D類深鉢口縁・胴部片3点、第4 B類深鉢口縁・胴部片2点、第4 E類深鉢口縁部片3点、底部片1点、石鏝3点、石材核1点などが出土している。

土器 (第146図～第148図)

第4 B類 (第146図1～6)

深鉢のみで平口縁と胴部片がみられる。口縁(1・2)は緩く「く」字状に内折し、端部は肥厚し丸く作られる。外面には縄文LRが施され、その面に2条を平行横直線、1条を波状に描く(1)



第145図 第16号配石遺構実測図

と、2条の平行横直線とその下に押し引き状の刺突文を横位に連続施す(2)をみる。後者の内面には押し引き状刺突文が口縁に平行し連続施文されている。胴部も外面に縄文LRが施され、その面に平行横直線を上下2段に巡らし、その沈線間に斜行沈線で逆三角形文を描き連続転回さす。(3～5)には平行横直線と斜行沈線が、(6)は平行横直線がみられる。

第4C類(第147図7～9)

深鉢口縁部片と胴部片で、口縁は平口縁を呈する。長い頸部は弓状に外反し、口縁は「く」字状に内折させ、その端部は肉厚く丸みをなす。外面には縄文LRが施され、その面に(7)は3条の

平行横直線と内面に衰退した押し引き状刺突文が施される。(8)は太い沈線で2条の平行横直線が描かれている。胴部(9)は胴上半部片で、外面に縄文LRが施され、その面に上下に平行横直線を巡らせ、その沈線間に傾斜の緩い逆三角形文が描かれる。

第4D類(第146図10~12、第147図1~14)

本地区主体の土器で深鉢と浅鉢があり、共に平口縁と波状口縁をみる。深鉢(第146図10~12、第147図1~4・6~10)は平口縁をなし、長い頸部は弓状に外反さすもの、外反度を弱め直立気みに立ち上がるものがみられ、「く」字状に内折さす口縁の立ち上がりは短く萎縮退化し、端部の大部分は尖り気みとなる。外面に縄文LRが施され、その面に2条~3条単位の平行沈線が巡り、沈線間に斜行連続刻目文や、沈線末端に小さな縦位の刺突文を対向させ主文様とするものなどをみる。深鉢波状口縁(第147図5)は、緩く内湾気みに立ち上がり、外面には平行横直線2条と、口縁に平行し2条の沈線が巡り、沈線の溝の中に穀粒状の列点刺突文が施されている。

胴部(第147図8~10)は膨らみは弱く、その上半部に縄文LRとなる面に平行横直線を4条前後巡らせ、沈線間に斜行刻目文を1段ないし2段描く。(10)は無文地に斜行刻目文と波状文を描き文様構成している。

浅鉢(第147図11~14)、(11・12)は平口縁で、前者の口縁は緩く内曲し、外面の縄文LRとなる面には4条の平行横直線が引かれ、その沈線間中央に1列の斜行刻目文が施されている。後者は萎縮退化した「く」字状口縁を持ち、外面には2条の平行横直線が引かれ、その沈線末端に「C」字状文を左右対向させている。(13・14)は傾斜の緩い波状口縁で、器壁は緩く内湾気みに立ち上がり、前者の端部は平坦面を持ち、外面に3条の平行沈線が描かれ、後者の端部は丸みを持ち、外面には幅狭い長方形区画文が描かれている。

第4E類(第148図3~8)

深鉢、浅鉢がみられ、深鉢には波状口縁をみる。深鉢(3)の口縁は外反し、端部は平坦に作られ、外面には幅狭い縄文帯RLをみる。(4)は外傾する長い頸部から口縁は緩く内曲し端部は丸みをなす。外面には幅広い縄文帯RLを持つ。(8)は胴部片で、表面には縄文RLが幅広く施文されている。(5~7)は浅鉢で、(5・6)共に器壁は外傾し、端部は平坦に作られ、(7)は内湾し端部は丸みをなす。外面には幅広い縄文帯RLが施文されている。

第5B類(第148図2)

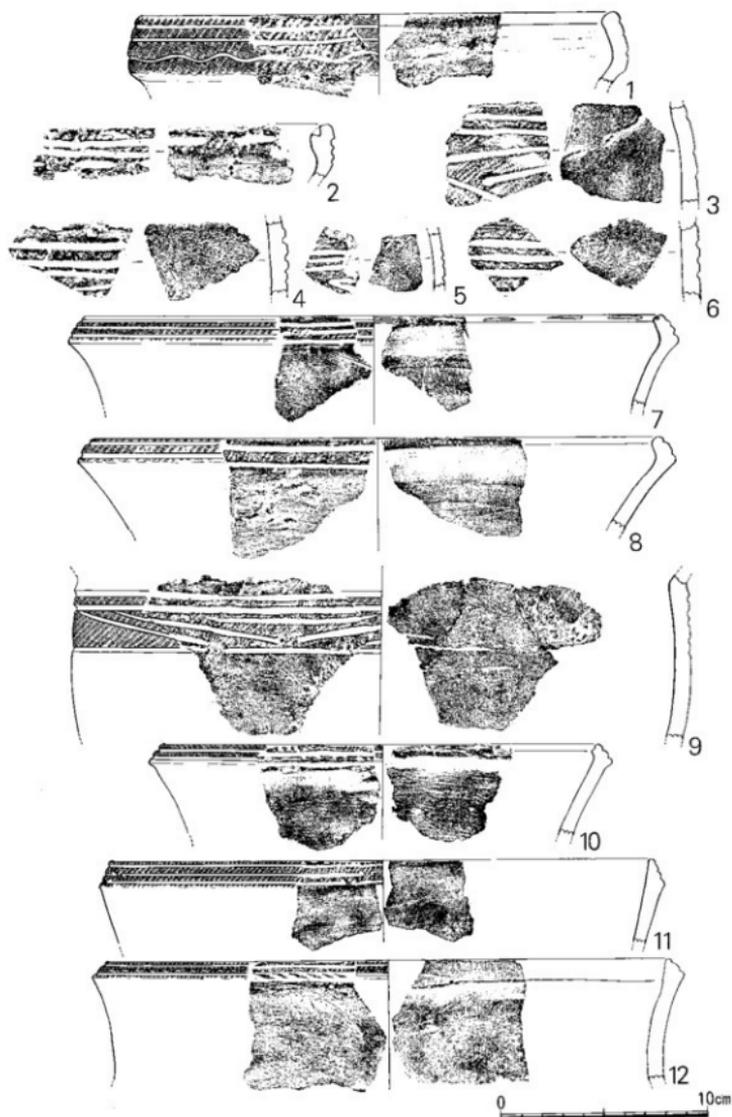
推定口径12.5cmの小型で、口縁は外反し端部は肉薄く尖る。外面の口縁直下には細沈線1条が描かれている。大きさ、器形から本資料は注口土器の可能性が高い。

第5C類(第148図1)

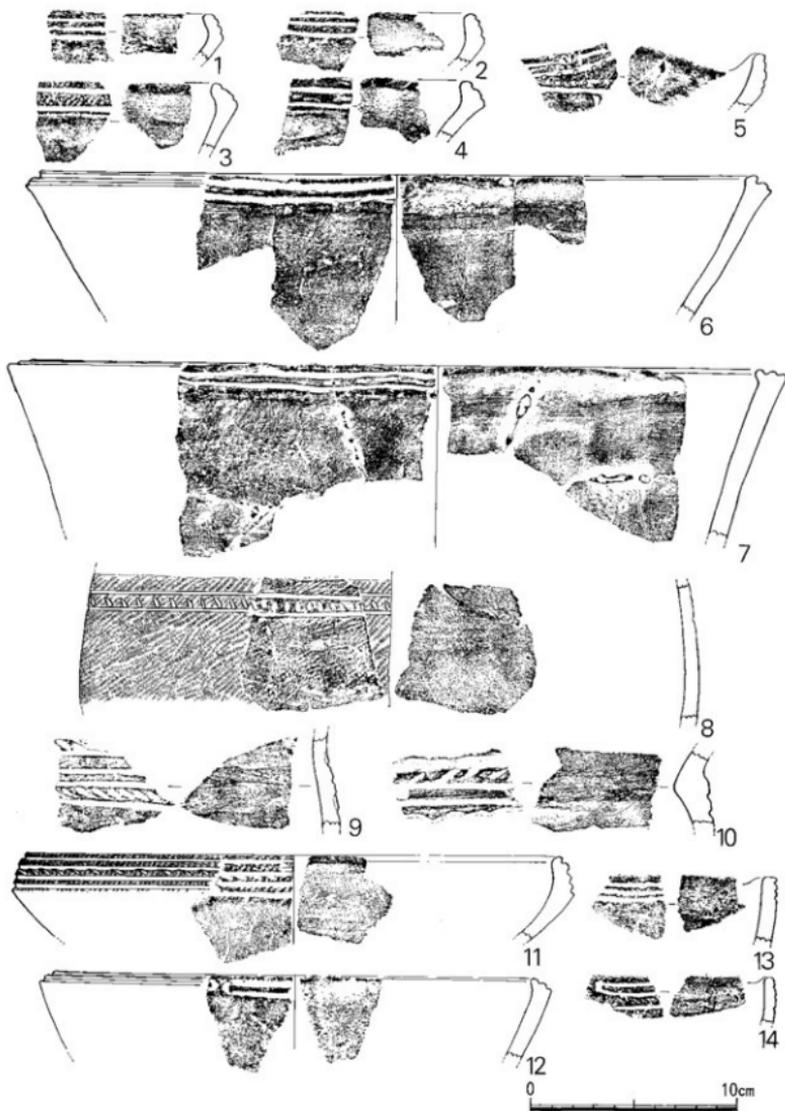
深鉢の口縁部片で、器壁はわずかに外傾し、端部は若干肥厚し丸みをなす。

第6A類(第148図9)

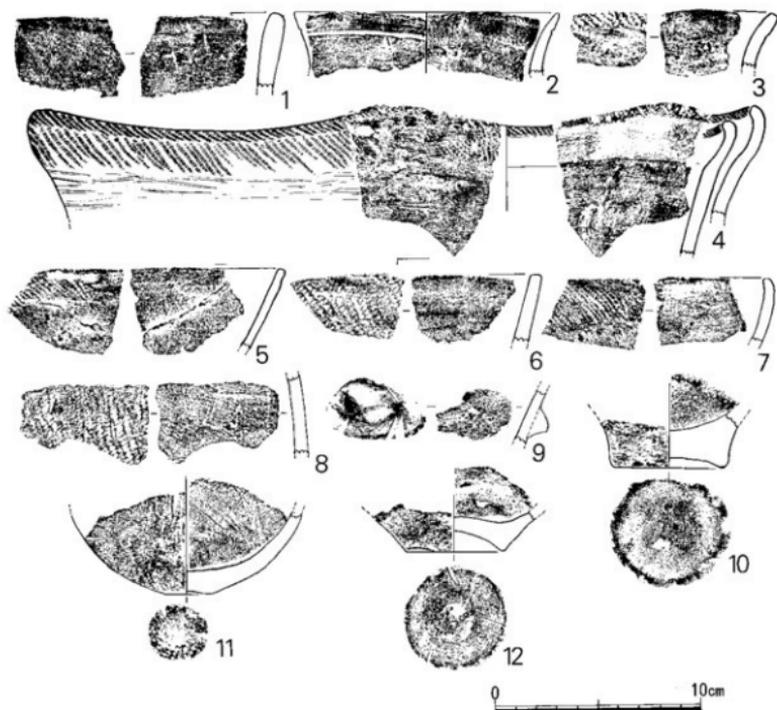
浅鉢の胴部片で、器壁は薄く精良な粘土が用いられ、器面は飽研磨された精製品である。外傾する器壁の外面には、リボン状を呈する貼付文を有する。



第146図 大宮・宮崎遺跡B-5区出土土器



第147图 大宮・宮崎遺跡B-5区出土土器



第148図 大宮・宮崎遺跡B-5区出土土器

底部（第148図10～12）

(11)は球状に膨らむ胴部から底部へと急にすばまり、底径3cmを測る小さな上げ底となる底部を持つ。(10・12)は共に弧状に上がる上げ底を呈し、前者の器壁は薄く外底を1cmと深く上げ、後者は器肉が厚く外底の上がりも0.5cmと浅い。

石器（第149図～第152図）

石材核を主体に石錘、磨石、スクレイパー、打製石斧、砥石、石錐、石鏃、石斧未製品などである。

石材核（第149図1～6、第150図1・2、第151図4）

どれも拳大礫を素材とし、大型のものはない。(1・2)は円形状をなし、前者は分厚く側面の

全周に剥片剥離痕をとどめ、その剥離は全面に及び自然面をどこにもとどめていない。後者も周縁より剥片剥離がなされ、前者に比べやや大型の横長剥片剥離痕を両面のほぼ全面に残す。(3)は長軸の片側面より交互剥離技法によって剥片剥離がなされ、両面にその剥離痕を残し、片面にわずかに自然面をとどめている。(4)は円礫を半裁し用いたもので、片面に平坦面をとどめ、その縁辺を打面とし剥片剥離がなされている。なお、これの平坦面にも剥片剥離がなされ、良好な横長剥片剥離痕をとどめている。(5)は分厚な剥片素材で、片面に原礫面を幅広くとどめ、一方の面に剥片剥離痕を全面に残している。(6)は楕円形を呈する分厚な自然礫素材で、片面に自然面を幅広くとどめ、一方の面には側面より打ち欠かれた剥片剥離痕を全面に残す。第150図(1・2)は共に両面に自然面をとどめ、打面は縁辺の3面に持ち、剥片剥離がなされ、良好な横長剥片剥離痕を両面にとどめている。第151図(4)は小型で、分厚な剥片素材で、周縁から剥片剥離がなされ、その剥離痕を全面にとどめ、一方の面の中央には第一次剥離面を幅広く残している。

石斧未製品(第150図3)

長楕円形を呈する自然礫の長軸片端に細かく打ち欠きを加えられている。石斧製作を意図したものである。

石鐘(第150図5~7)

長楕円形を呈する扁平砂岩礫を素材とし、紐掛けとする加工は長軸両端面に打ち欠きによってなされ、浅い凹み部を作出している。

磨石(第151図1)

楕円形をなす分厚な砂岩礫素材で、平坦面を有する両面に使用による磨耗痕をとどめている。

叩石(第151図2・3)

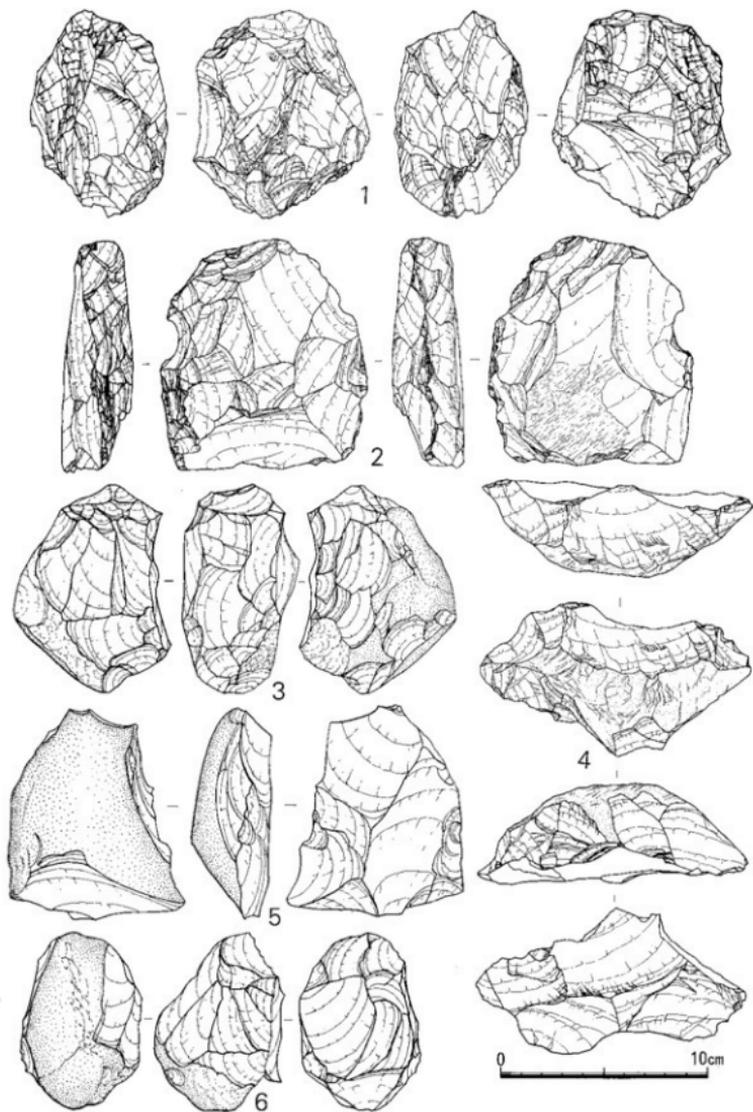
小型で、楕円形を呈する砂岩礫素材で、両者は主にアバタ状となる使用痕を両側面に残し、(3)は平坦面をなす上面に磨耗痕をとどめ、磨石としても併用されている。

打製石斧(第151図5)

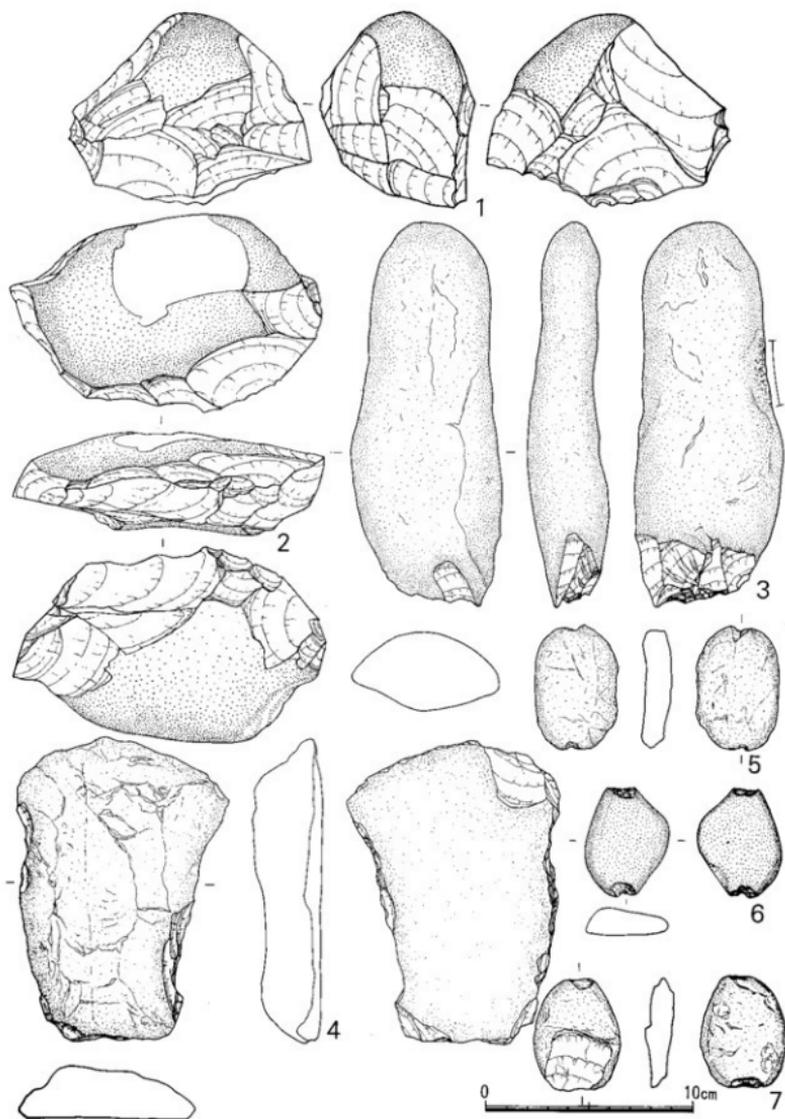
撥形を呈し、やや分厚である。片面は両側縁より大きく剥離され中央に棟を作り、一方の面には第一次剥離面を幅広く残す。細かな打ち欠き加工は主に片側縁と刃部に集中し、側縁の一部に自然面をとどめている。

スクレイパー(第151図6~9・13)

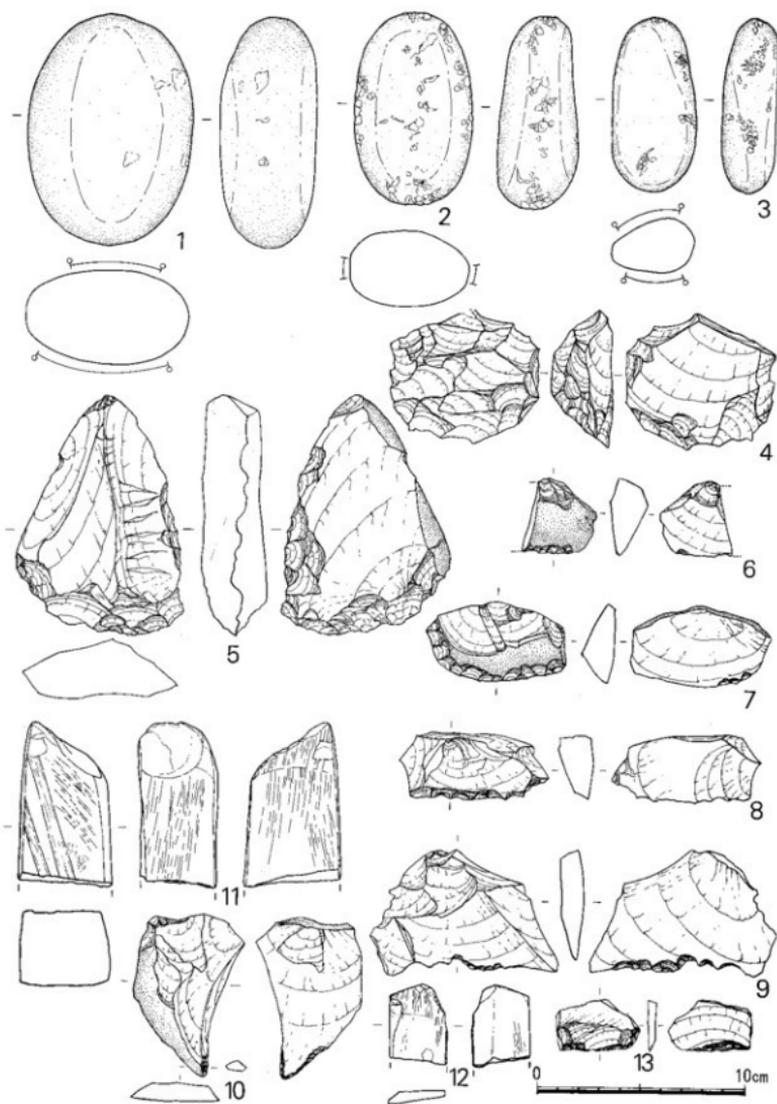
素材とする剥片は横長、縦長共にみられるが、その割合は前者が圧倒的に勝る。横長剥片素材(6・7・9・13)、(6)は分厚で約2分1を欠損し、片面に自然面を、一方の面には第一次剥離面をそのまま残し、長軸一辺に片面加工によって刃部を形成している。(7)も分厚で、片面の一



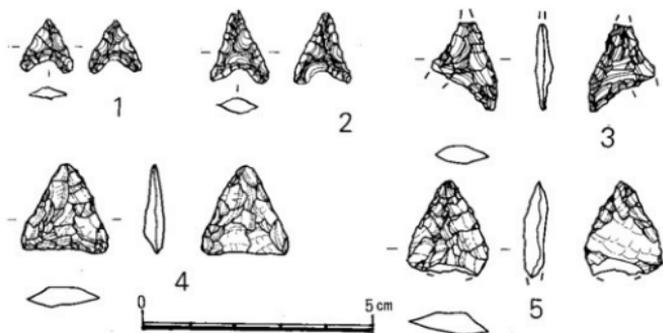
第149图 大宮・宮崎遺跡B-5区出土石器



第150图 大宮・宮崎通助B-5区出土石器



第151图 大宮・宮崎遺跡B-5区出土石器



第152図 大宮・宮崎遺跡B-5区出土石器

部に自然面を、一方の面に第一次剥離面をそのまま残し、長軸一辺に外湾する刃部を片面加工によって作出する。(9)はやや大型で、片面には数枚の剥片剥離痕をとどめ、一方の面は第一次剥離面を幅広く残し、長軸一辺に両面より粗く押圧剥離を加え鋸歯状の刃部を形成している。(13)は小型で、片面に小さな剥離痕を、一方の面には第一次剥離面をそのまま残し、打面側に両面より押圧剥離を加え直線的な刃部を作出している。縦長剥片素材(8)は分厚で、片面には横剥ぎされた剥離痕をとどめ、一方の面には第一次剥離面をそのまま残す。この片側面に片面より押圧剥離を加え鋸歯状となる刃部を形成する。

石錐 (第151図10)

扁平な縦長剥片素材で、長軸片端部に両面加工によって錐先部を作出している。この一方の面には自然面を一部にとどめ、片面には第一次剥離面をそのまま残している。

砥石 (第151図11・12)

細粒質の砂岩製で、(11)は分厚く断面が四角形に近く、途中で折れ長さ6.8cmをとどめる残片である。四面共に研かれ滑らかな肌を呈する。(12)は扁平、小型で、これも片端部を欠失する残片であり、両面と側面共に研かれている。

石鏃 (第152図1～5)

基部に抉りを持つ小型三角形鏃(1)と、二等辺三角形鏃(2・3)、基部に抉入を見ない(4・5)の3種がみられる。基部に抉入をみるタイプは抉りも浅く、形に歪みがあるなど粗製品。基部に抉りのないタイプは、やや大型で、これも押圧剥離による加工は粗く粗製品である。なお(3)は先端と片脚、(5)は基部の一部を欠損し、他は完形である。

大宮・宮崎遺跡B-5区出土土器観察表(第56表)

図番号	遺物 記録No	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第146図1	ベルト内	深鉢口縁部	23	赤褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 金雲母	良好
2	表採	深鉢口縁部	30	黒褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
3	188	深鉢胴部	24	赤褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	182	深鉢胴部	21	暗茶褐色 縄文LR	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
5	73	深鉢胴部	21	黄褐色 縄文LR	黄褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
6	125	深鉢胴部	32	暗茶褐色 縄文LR	黒褐色 横撫で滑らか	金雲母粒 長石	良好
7	28	深鉢口縁部	28	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
8	184	深鉢口縁部	27	黒褐色、スス付 着、縄文LR	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
9	56	深鉢口縁部	30	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
10	80	深鉢口縁部	21	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	黄茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
11	307	深鉢口縁部	26	暗黄茶色、縄文LR、 撫で滑らか	暗黄茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
12	186	深鉢口縁部	27	暗茶褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
第147図1	55	深鉢口縁部	28	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
2	124	深鉢口縁部	31	赤褐色、縄文LR、 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
3	188	深鉢口縁部	35	黒褐色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好
4	129	深鉢口縁部	23	黒褐色 撫で滑らか	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
5	62	深鉢口縁部	21	黒褐色、スス付 着、縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	細砂粒 長石	良好
6	167	深鉢口縁部	38	暗茶褐色 横撫で滑らか	暗茶褐色 横撫で滑らか	細黒雲母	良好
7	191	深鉢口縁部	43	灰茶褐色 横撫で滑らか	灰茶褐色 横撫で滑らか	細砂粒 黒雲母	良好
8	188	深鉢口縁部	30	赤褐色 縄文LR	暗灰茶色 横撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-5区出土土器観察表(第57表)

図番号	遺物 記録No.	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外 面	内 面		
第147図9	32	深鉢 胴部	31	黒褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細長 砂石 粒	良好
10	302	深鉢 胴部	28	灰茶褐色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細黒 砂 粒 雲母 粒	良好
11	表採	浅鉢口縁部	27	黄褐色、縄文LR、 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	長 石 粒 細 砂 粒	良好
12	22	浅鉢口縁部	23	灰黄色 撫で滑らか	暗茶褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
13	36	浅鉢口縁部	32	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
14	266	浅鉢口縁部	23	淡黄茶色 撫で滑らか	黒褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
第148図1	29	深鉢口縁部	38	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細長 砂石 粒	良好
2	550	深鉢口縁部	13	灰茶色 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
3	304	深鉢口縁部	29	赤褐色、縄文RL、 撫で滑らか	灰茶色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
4	240	深鉢口縁部	35	黒褐色、スス付 着、縄文RL	灰茶褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
5	306	深鉢口縁部	42	黒褐色 縄文RL	黒褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
6	122	深鉢口縁部	33	黄茶色 縄文RL	淡黄茶色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
7	116	浅鉢口縁部	23	黄茶褐色 縄文RL	黄茶褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
8	264	深鉢 胴部	20	黒褐色 縄文RL	黒褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
9	151	浅鉢 胴部	23	灰黄茶色 撫で滑らか	灰黄茶色 撫で滑らか	細長 砂石 粒	良好
10	33	底 部	5.5	茶褐色 撫で滑らか	茶褐色 撫で滑らか	細長 砂石 粒	良好
11	ベルト内	底 部	2.5	灰茶色 撫で滑らか	灰茶褐色 撫で滑らか	細 砂 粒	良好
12	273	底 部	5.0	淡黄茶色 撫で滑らか	淡黄茶色 撫で滑らか	細長 砂石 粒	良好

大宮・宮崎遺跡B-5区出土石器観察表(第58表)

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第149図	1	石材核	10.0	8.5	6.4	558.03	頁岩	全面に剥離痕 残す
2	108	石材核	3.4	11.2	10.0	402.96	頁岩	全面に剥離痕 残す
3	1	石材核	10.0	7.5	4.9	480	頁岩	青黒色、一部 に自然面残す
4	321	石材核	5.0	13.1	7.5	349.98	頁岩	片面に自然面残 す、剥離面鋭利
5	106	石材核	10.1	8.5	3.6	290	頁岩	片面に自然面 幅広く残す
6	38	石材核	8.5	5.9	5.6	320	頁岩	青黒色、片面に自 然面幅広く残す
第150図	1	石材核	9.4	11.9	7.2	810	頁岩	青黒色、一部に 自然面残す、剥 離面鋭利
2	215	石材核	15.2	9.5	4.2	680	頁岩	灰白色、両面 に自然面残す
3	288	石斧未製品	18.6	7.2	3.9	591.01	頁岩	長楕円形礫素材、刃部加工
4	327	スクレイパー	14.7	9.3	3.3	543.48	頁岩	大型、両側面 に刃部形成
5	表採	石 錘	6.0	4.0	1.4	43.63	砂岩	完形
6	表採	石 錘	5.25	4.2	1.3	23	砂岩	完形
7	表採	石 錘	5.4	4.2	1.4	34.56	砂岩	完形
第151図	1	磨石	11.2	8.0	4.6	609.81	砂岩	楕円形礫素材、 中央両面研磨痕
2	143	叩石	9.3	5.7	3.7	285.59	砂岩	長楕円形礫素材、 側面に使用痕
3	242	叩石	8.5	4.1	2.5	137.26	砂岩	長楕円形礫素材、 側面使用痕及び 中央両面研磨痕
4	136	石材核	7.2	6.2	2.3	140	頁岩	全面剥離痕残 す、小型
5	283	打製石斧	11.7	8.0	3.0	275	頁岩	一部に自然面 残す
6	表採	スクレイパー	3.6	3.1	1.9	22.1	頁岩	2分1欠損、 肉厚剥片素材
7	表採	スクレイパー	3.9	6.8	1.6	40.4	頁岩	横長剥片素材、 刃部片面加工

大宮・宮崎遺跡B-5区出土石器観察表(第59表)

図番号	遺物 記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第151図8	表採	スクレイパー	3.1	7.3	1.6	50	頁岩	縦長肉厚剥片 素材
9	表採	スクレイパー	5.7	9.0	1.1	54.5	頁岩	横長剥片素材、刃 部両面加工形成
10	表採	石錐	8.2	5.0	0.9	36.1	頁岩	縦長剥片素材
11	表採	砥石	8.0	4.6	3.8	211.96	砂岩	約2分1欠損
12	表採	砥石	3.9	2.8	0.7	9.09	砂岩	全面磨製
13	237	スクレイパー	2.4	4.1	0.4	10	サヌカイト	横長剥片素材、両 面加工刃部形成
第152図1	202	石鏃	1.1	1.1	0.2	0.1	姫島産 黒曜石	完形
2	205	石鏃	1.6	1.25	0.4	0.2	姫島産 黒曜石	完形
3	114	石鏃	1.9	1.4	0.4	0.54	姫島産 黒曜石	先端、片脚欠 損
4	204	石鏃	1.9	1.9	0.5	1.25	頁岩	黄白色風化、 完形
5	340	石鏃	2.1	1.8	0.5	1.47	頁岩	基部欠損

(14) C-0区の出土遺物

本地区には遺構はなく、遺物も深鉢底部片1点と、胴部細片1点が出土したのみで、他に拳大礫の散在が確かめられたくらいで見ると見るべきものはない(第153図)。

底部(第156図5)は、推定底径5cmを測り、外底が弧状に上がる上げ底を呈する。

(15) C-1区の出土遺物

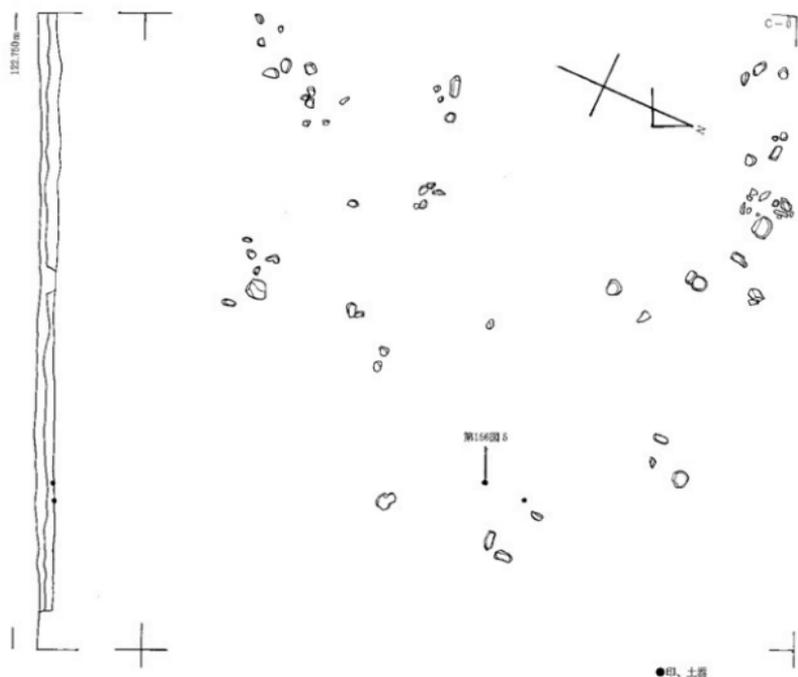
本地区は、中・近世の小礫群の検出と、その時期の遺物を若干見ただのみで、縄文遺物の出土は無文の胴部片を少数みただのみで、ここではそれらの資料の図示を割舍した。

(16) C-2区の遺構と出土遺物

遺物の出土は多くはないが、本地区のほぼ中央部に散在分布し、その位置に配石遺構1基が検出されている(第154図)。

第17号配石(第155図)

長径3m、短径2.6mの範囲に扁平礫を雑然と配置したもので、最大径30cm前後の大きさを持つ



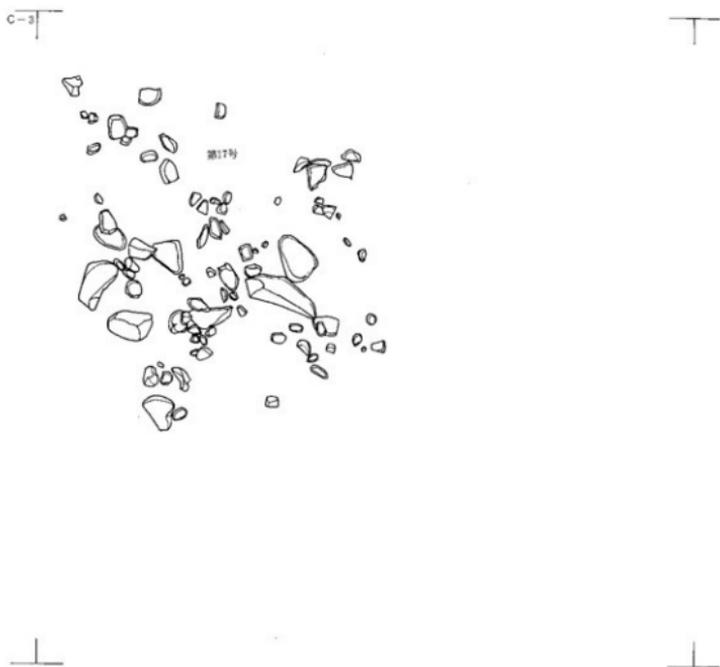
第153図 C-0区出土遺物平面、垂直分布実測図

礫8個と、それに最大長約60cm、最大幅15cmを測る長大な礫1個がやや中央部近くに配置され、その周辺に10cm～20cm前後の自然石約60個が散在している。この礫の中には叩石2点が含まれている。形状として本遺構は不定形で、環状となっていた本来の形を大きく変えたものとなっている。内部からは石鏃1点、周辺より第4B類深鉢口縁部片1点、注口土器の注口部などが出土している。

土器（第156図）

第4B類（第156図1・2）

(1)は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片で、器壁は緩く内湾気みに立ち上がり、端部はわずかに肥厚し丸みをなす。波頂部には粘土紐貼付文がみられ、外面の縄文RLとなる面に窓枠状の文様とその中に「コ」字状文を描き構成する。(2)は深鉢の胴部片で、器壁は緩く膨らみ、外面には縄文LRが施され、その面に間隔を開けた平行横直線3条が描かれている。



第154図 C-2区出土遺物平面、垂直分布実測図

第5C類 (第156図4)

浅鉢の口縁部片で、器壁は緩く内曲し、端部は丸く作られている。

注口土器 (第156図3)

注口土器の注口部残片で、最大径3.5cmを基部に持ち、先端部へと向い細まるが、その端部を欠損している。器面は鏡撫でされ滑らかな肌を呈する。

石器 (第156図)

石材核 (156図6)

1点の出土で、しかも小型で側面観は三角形形状を呈し、その上面は平坦面を持つ。剥離は、その平坦面の縁辺に持ち、小さな剥片剥離痕を周縁に残している。



第154図 C-2区出土遺物平面、垂直分布実測図

● 卑、土器
○ 卑、石器

第5 C類 (第156図4)

浅鉢の口縁部片で、器壁は緩く内曲し、端部は丸く作られている。

注口土器 (第166図3)

注口土器の注口部残片で、最大径3.5cmを基部に持ち、先端部へと向い細まるが、その端部を欠損している。器面は篋撫でされ滑らかな肌を呈する。

石器 (第156図)

石材核 (156図6)

1点の出土で、しかも小型で側面観は三角形形状を呈し、その上面は平坦面を持つ。剥離は、その平坦面の縁辺に持ち、小さな剥片剥離痕を周縁に残している。



第155图 第17号配石遺構実測図



第156图 大宮・宮崎遺跡C-0区・C-2区出土土器、石器

大宮・宮崎遺跡C-0区出土土器観察表 (第60表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第156図5	1	底部	5.0	赤褐色 撫で滑らか	赤褐色 撫で滑らか	細砂粒	良好

大宮・宮崎遺跡C-2区出土土器観察表 (第61表)

図番号	遺物記録No.	器種及び破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
				外面	内面		
第156図1	135	深鉢口縁部	22	黒褐色 縄文RL	赤褐色 横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
2	132	深鉢胴部	23	暗茶褐色 縄文LR	赤褐色 横撫で滑らか	石英粒 金雲母粒	良好
3	133	注口部 長径 短径	3.5 2.8	淡黄灰色 撫で滑らか	黄灰色 撫で滑らか	細砂粒	良好
4	表採	浅鉢口縁部	24	黒褐色 横撫で滑らか	黒褐色 横撫で滑らか	大粒砂	良好

大宮・宮崎遺跡C-2区出土石器観察表 (第62表)

図番号	遺物記録No.	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
第156図6	表採	石材核	5.9	5.5	2.5	58.57	頁岩	肉厚剥片素材、 全面剥離
7	147	石錘	4.7	4.1	1.4	50	砂岩	完形
8	29	石鏃	2.3	1.8	0.4	1.7	頁岩	基部欠損
9	ベルト内	打製石斧	13.2	5.7	2.5	250	頁岩	完形、撥形
10	ベルト内	打製石斧	13.5	5.05	2.75	250	頁岩	完形、撥形

石錘 (第156図7)

楕円形を呈する扁平砂岩礫を素材とし、長軸の両端部に打ち欠きによって紐掛けの凹みを作り出している。

石鏃 (第156図8)

基部を欠損した先端部の残片で、一辺の長さ2.5cmを測る。押圧剥離による加工は大まかで、身の中央部には第一次剥離面を幅広く残し、全体的に作りは粗雑である。

打製石斧 (第156図 9・10)

長楕円形礫を素材とし、周辺より粗く打ち欠きを加え撚形に整形されたもので、(9)は剥離加工が全面に及び、(10)は身の両面と側面の一部に自然面を残し、身にやや歪みを持つ。共に刃先を外側へと外湾させ特徴としている。

(17) C-3区の遺構と出土遺物

本地区における遺物は中央部に稀薄で、南と北の両側に散在的な出土分布をみる。その量はさほど多くはないが、第4 B類土器や、完形の磨製石斧、スクレイパーなど比較的良好な資料に恵まれている。また、本区南側に配石遺構1基が検出されているが、これは、ちょうど中央部からC-4区とのセンターに掛かっているが、解説については本区で取り扱った(第157図)。

第18号配石 (第158図)

長径2m、短径1mの範囲に雑然と自然石を配置したもので、全体形は長楕円形状を呈する。用いられた自然石は大部分が扁平で、大きなもので直径20cm前後を測り6個みられ、他は10cm前後の自然石約30個がみられる。内部からの遺物は、中央部にはないが周辺に第4 D類深鉢口縁部片1点、スクレイパー1点がみられ、近辺からは底部片、石材核、第5 C類深鉢口縁部片などが出土している。

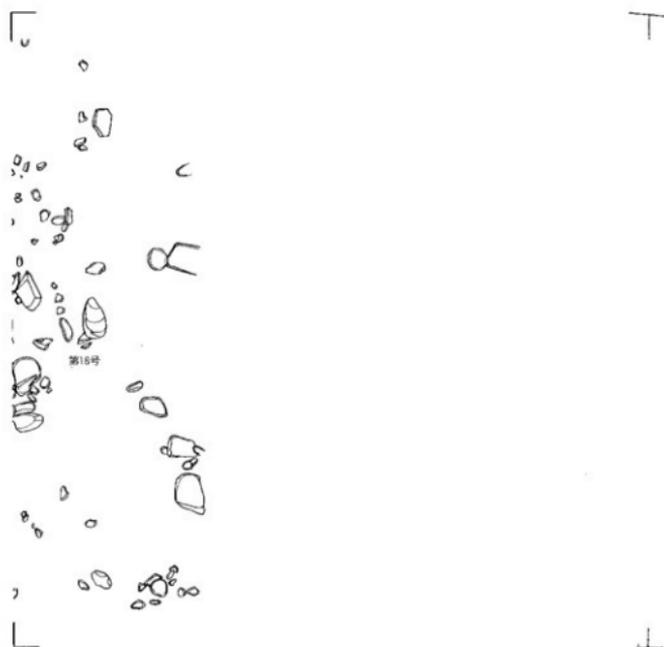
土器 (第159図)

第4 B類 (第159図 1~5・14)

深鉢と浅鉢がある。深鉢は平口縁(1)で、器壁は「く」字状に内折し、端部は肥厚し丸く作られている。外面には縄文LRが施され、その面に2条の平行横直線とその下位に1条を波状に描き文様構成している。(3~5・14)は胴部片で、緩く膨らむ外面には縄文LRが施され、その面に2条の平行横直線とそれに接し斜行沈線が引かれ逆三角形文を描く。(3)は逆三角形文の中央部片で、「S」字状文が大きく描かれ、(5)には3条の斜行沈線が(4)には重弧文が、(14)は5条単位の斜行沈線がシャープに描かれている。浅鉢(2)は、口縁部片で器壁は緩く内湾し、端部は丸くおさまる。外面には縄文LRが施され、その面に3条の平行横直線がやや幅広く描かれている。

第4 D類 (第159図 6・7・9)

深鉢のみである。平口縁(7)は外反する頸部から口縁は緩く「く」字状に内折し、立ち上がりは短く寸詰まりとなっている。外面には縄文LRが施され、その面に2条の平行横直線が引かれ、その沈線間に列点刺突文が付されている。(6・9)は波状口縁となるもので、前者は波頂部を欠損する。外反する頸部から「く」字状に内折する口縁を持ち、外面には縄文LRが施され、その面に2条の平行沈線が口縁に平行し巡り、波頂部直下で2条沈線下位に1条の短沈線が横位に引かれ、その沈線の末端には縦位に小さな刺突文を付す。後者は緩やかな波状を呈し、頸部は外反させ、口縁は「く」字状に内折し、端部は尖っている。外面には縄文LRが施され、その面には口縁に平行する2条沈線が巡らされ、沈線間に穀粒状の列点刺突文をみる。



第157図 C-3区出土遺物平面、垂直分布実測図

第4E類 (第159図8)

深鉢の口縁部片で器壁は外反し、端部は幅狭な平坦面を持つ。外面には幅広い縄文帯R Lを形成する。

第5A類 (第159図12)

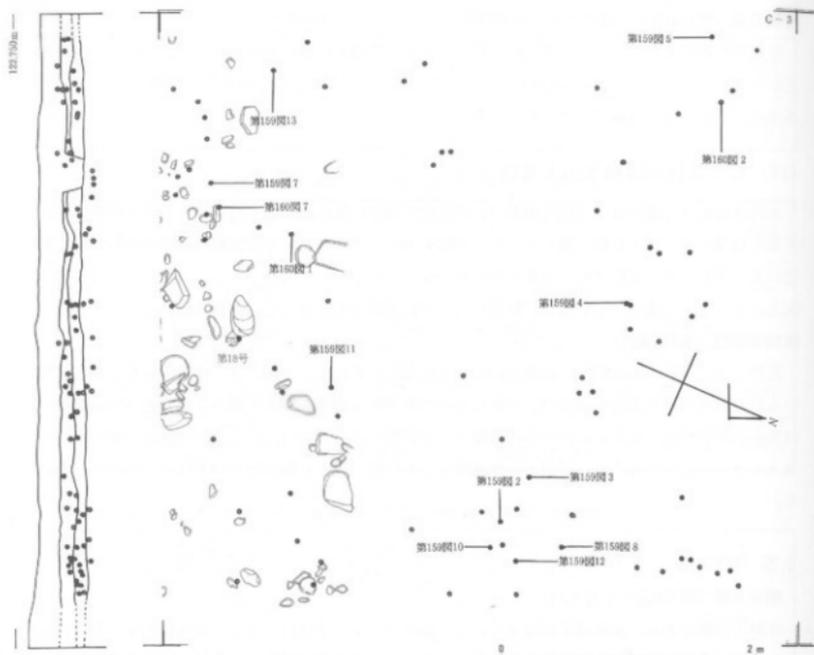
深鉢の口縁部片で、平口縁を呈する。器壁は直立気みにわずかに外傾し、端部は幅狭く平坦面を作っている。内面の沈線は端部より少し下った位置に描かれている。

第5C類 (第159図10・11)

共に深鉢の口縁部片で、平口縁を呈する。(10)は外反させ、端部は平坦に作られ、(11)は直線的に延びた器壁は外反し、端部は内曲させ丸みを持つ。

底部 (第159図13)

推定底径8.5cmを測り、外底は弧状に緩く上がる上げ底である。



第157図 C-3区出土遺物平面、垂直分布実測図

●中、土器
○中、石器

第4 E類 (第159図8)

深鉢の口縁部片で器壁は外反し、端部は幅状な平坦面を持つ。外面には幅広い縄文帯R Lを形成する。

第5 A類 (第159図12)

深鉢の口縁部片で、平口縁を呈する。器壁は直立気ろにわずかに外傾し、端部は幅狭く平坦面を作っている。内面の沈線は端部より少し下った位置に描かれている。

第5 C類 (第159図10・11)

共に深鉢の口縁部片で、平口縁を呈する。(10)は外反させ、端部は平坦に作られ、(11)は直線的に延びた器壁は外反し、端部は内曲させ丸みを持つ。

底部 (第159図13)

推定底径8.5cmを測り、外底は弧状に緩く上がる上げ底である。